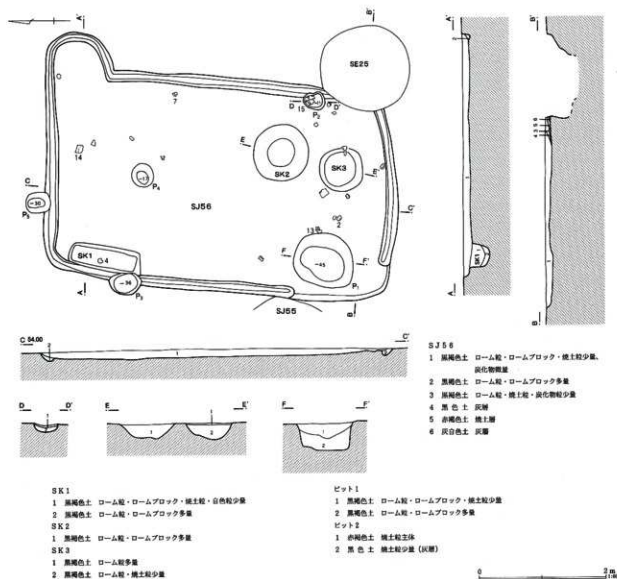


第303図 第56号住居跡



方形で、規模は長軸1.18m、短軸0.40m、床面からの深さは0.30m前後である。上面に貼床はないこと、土壌中央やや西寄りの、底面からやや浮いた位置からロクロ土師器小皿が正位で出土したこと、住居埋土が土壌上面に覆っていたことから、住居廃絶直後に掘られた土壌墓(廃屋墓)の可能性が高いものと考えた。土壌規模が小さいことを考慮すると、乳幼児か小児を埋葬したものであろうか。

2・3号土壌は上面に貼床が施され、住居に伴う床下土壌と考えられる。

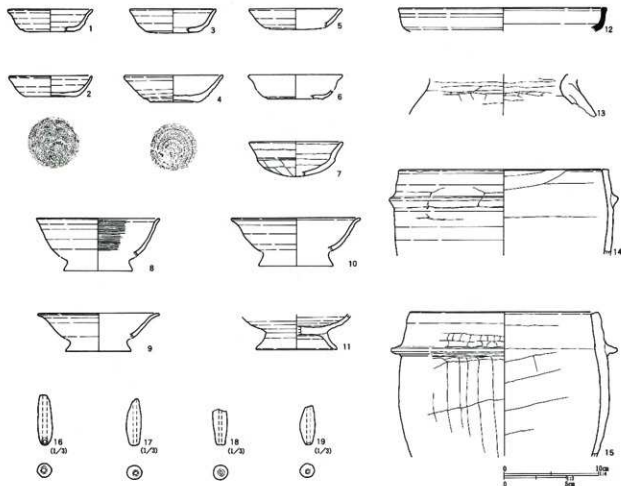
壁溝は南西コーナー部を除きほぼ全周する。特に東壁北端の張出部でカーブに沿うように巡っており、張

り出し施設が住居に伴うことを証明している。

張出部は半円形を描くように壁外に約60cmほど突出しており、底面は床面と同レベルで続いており、屋内に取り込まれていたことが窺える。

出土遺物はロクロ土師器小皿・ロクロ土師器高台碗、土師器環・壺・羽釜、須恵器盤、土鎌がある(第304図)。第304図4のロクロ土師器小皿は前述したように1号土壌(廃屋墓)出土。土壌墓の副葬品と思われる。6の小皿と8・11の高台碗はPit 1内出土である。15の羽釜は灰溜め状ピット(Pit 2)から出土した。第304図1～6はロクロ土師器小皿である。口径9cm、器高2.5cm以下の小振りで扁平なもの(1～3・5・6)

第304図 第56号住居跡出土遺物



と、口径10cm、器高2.8cm、口縁部が直線的に開くもの(4)がある。8～11はロクロ土師器高台椀である。8は内面へラミガキされている。やや黒ずむことから黒色処理された可能性がある。14・15は土師質の羽釜である。14は素土土が比較的細かく、ロクロ整形されている。15は胎土に大粒の礫を多量に含むやや粗い土で、非ロクロ整形である。胴部は縦方向へのヘラケズリ調整が施されている。7の土師器杯と12の須恵器盤は混入である。

住居の時期は、11世紀前半と推定される。

第57号住居跡(第305・306図)

第57号住居跡は、C-16・17グリッドに位置する。第58号住居跡に南東壁を切られているが、床面及び壁溝は残存していた。また、カマド先端を第16号土壌に切られていた。北西壁は調査区外に延びている。

平面形は方形と推定され、規模は長軸5.92m、短軸3.63m(現在長)、深さ0.13mを測る。主軸方向はN-138°-Wを示す。

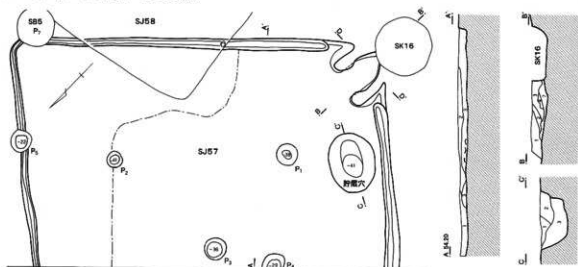
床面は概ね平坦である。全体に堅く締まっているが、特に住居西半、図上で破線で示した部分が非常に堅く踏み固められていた。

カマドは南コーナー部に設置されていた。該期としては特異なカマドといえる。燃焼部は概ね壁内におさまり、先端部を僅かに第16号土壌に切られている。底面はほぼ平坦である。袖は白色粘土を積み上げて構築され、燃焼部内面の側壁は被熱していた。

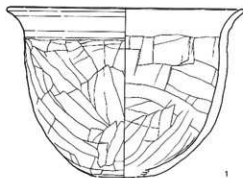
ピットは5本検出された。Pit 1・2は主柱穴と思われる。深さは40cm前後である。Pit 3～5は住居よりも新しい時期の所産である。

貯蔵穴はカマドに向かって右脇の南西壁内側に設け

第305図 第57号住居跡・出土遺物(1)



調査区補注



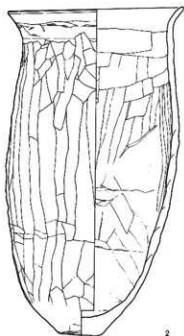
- 1 褐色土 ロームブロック・ローム粒多量、黒色土粒混入
 - 2 暗褐色土 ローム粒少量
 - 3 暗褐色土 ロームブロックまばらに含む、黒色土ブロック混入
- カマド
- 1 暗褐色土 白色粘土粒・ローム粒・粘土粒少量
 - 2 赤褐色粘土 白色粘土混入（天井部粘着土）
 - 3 暗褐色土 粘土粒多量（床面上）
 - 4 赤褐色粘土 ブロック状、暗褐色土混入（天井部粘着土）
 - 5 白色粘土 粘土ブロック少量（暗部粘着土）
 - 6 白色粘土 粘部粘着土
 - 7 黒色土 灰多量、粘土粒、炭化物粒混入（灰層）
 - 8 暗褐色土 ローム粒混入（煙り方）



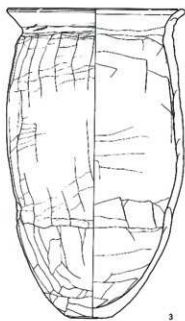
貯蔵穴

- 1 白色土 ローム粒多量
- 2 暗褐色土 ローム粒少量
- 3 暗褐色土 ローム粒多量

0 2m



2



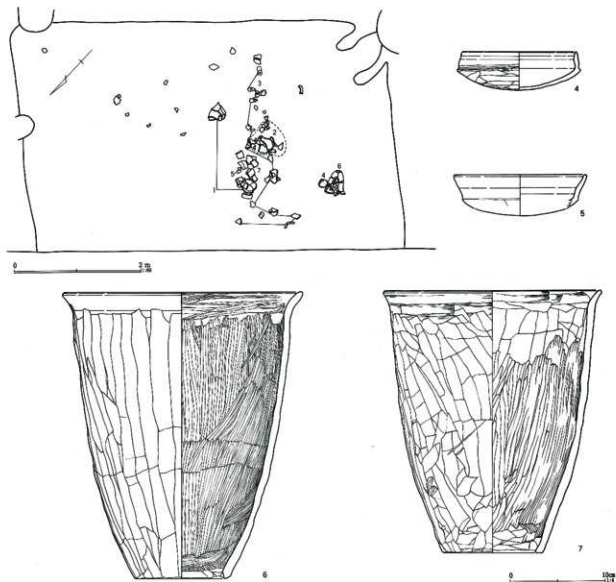
3

0 10cm

られていた。楕円形プランで、長径93cm、短径75cm、深さ41cmである。壁溝はカマドを除き全周する。

出土遺物は土師器環・甕・甌・鉢がある(第305・306図)。量的には少ないが、遺存率の高いものが多い。第306図 第57号住居跡・出土遺物(2)

306図4の環と6の甌は貯蔵穴北西から出土した。環はほぼ床面、甌はやや浮いた位置から横倒しの状態で出土した。第305図2の甕は Pit 1北側の床面に潰れた状態で出土している。3の甕は床面またはやや浮いた



第142表 第57号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	鉢	24.5	17.7	7.0	ABDEJ	1	にぶい橙	95	No.10・21・30・45 外面被熱器面剥落 黒斑あり
2	甕	18.6	30.5	4.2	IJ	1	明赤褐	90	No.19・21・40
3	甕	18.9	32.5	4.0	ADIJ	1	橙	80	No.3・4・5・7・8・13・18・20・22・24・25
4	環	12.0	4.0		H	1	褐	90	No.2 黒炭あり
5	環	(14.0)	3.5		ADEH	2	にぶい橙	10	No.14
6	甕	25.5	30.2	10.2	AEIJ	1	明赤褐	80	No.1 内面ミガキ
7	甕	(23.2)	27.5	10.5	ABJ	1	橙	60	No.9・11~17・24・41~44 内面ミガキ

位置から広範囲に散乱した状態で出土した。第305図1の鉢も2片に分かれていた。第306図7の甕も床面から僅かに浮いた位置から出土した。

第305図1は土師器鉢。外面は二次被熱を受け、器面が剥落している。2・3は土師器甕。胴縦方向のヘラケズリ調整。3の底部は木葉痕が残る。第306図4は土師器の坏身模倣坏。口径12cm。黒斑がある。全体に黒ずみ、黒色処理された可能性が高い。5は蓋坏模倣坏。口径は不安定である。6・7は甕。内面はヘラミガキ調整されている。住居の時期は鬼高期、6世紀末葉～7世紀初頭頃と推定される。

第58号住居跡 (第307図)

第58号住居跡は、C-16・17グリッドに位置する。重複する第57・59号住居跡、第5号掘立柱建物跡を切って構築されていた。

平面形は横長方形で、規模は長軸3.86m、短軸2.95m、深さ0.12mを測る。主軸方向はN-84°Eを示す。床面は中央部がやや深く、壁際に向かって若干上がっている。全体に堅く踏み固められており、特にカマド前面から住居中央部が非常に堅く締まっていた。また、第5号掘立柱建物跡 Pit 6 上面は貼床されていたが、ピットの影響で床面が陥没していた。

カマドは東壁の南寄りに設置される。燃焼部から煙道部は壁を切り込んで掘り込まれていた。燃焼部は床面と段差なく続き、煙道部は緩やかな段差をもって水平方向に延びている。焚口部両側壁には片岩系の板石が埋め込まれていた。燃焼部中央付近底面には石製支脚が埋設され、その周囲に板石が崩落したような状態で散乱していた。カマドの補強材に使用したのもだろう。

ピットは南西コーナーから1本検出された。深さ54cm。住居に伴うカマド対向ピットと考えられる。

土壌は2基カマド前面から検出された。いずれも上面に貼床が施され、いわゆる床下土壌と考えられる。土壌埋土にはロームブロックが多量に混んでいた。

壁溝は東壁部と南壁から西壁にかけて部分的に巡っていた。

出土遺物はロクロ土師器の小皿と高台椀、土師器甕、須恵器甕が検出された(第307図)。第307図1のロクロ土師器小皿は南東コーナー部の床面から出土した。3の高台椀は西壁際から出土している。6の須恵器甕はカマド内から板石に混じって出土した。カマド補強材に転用されたものか。

第307図1はロクロ土師器小皿で、底部は回転系切り。2・3はロクロ土師器高台椀。いずれも内面ヘラミガキと黒色処理が施されている。3は胎土が粗い。4・5の土師器甕及び6・7の須恵器甕は混入品である。住居の時期は10世紀後葉～11世紀初頭であろう。

第59号住居跡 (第308～310図)

第59号住居跡は、C・D-17グリッドに位置する。重複する第58・60・66号住居跡、第5号掘立柱建物跡に切られていた。

平面形は正方形で、規模は長軸5.53m、短軸5.19m、深さ0.24mを測る。主軸方向はN-45°Wを示す。

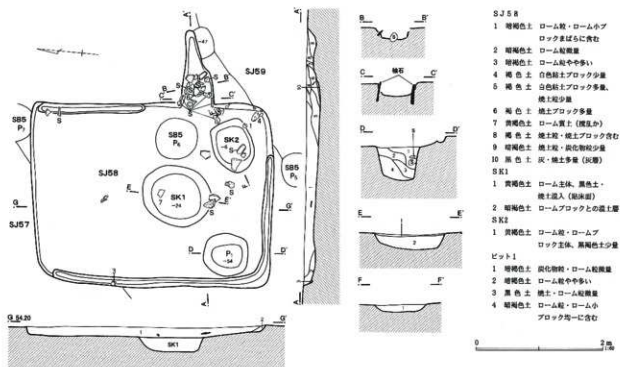
床面はゴツゴツした凹凸が顕著で、全体に堅く踏み固められていた。一部第60号住居跡の掘り方が床面まで及び、削平されていた。

カマドは北西壁のやや北寄りに設置されている(第310図)。燃焼部はほぼ壁内におさまり、煙道部は削平されていた。埋土は第1～4層が天井部崩落土、第5層が灰層である。灰層は厚く堆積していた。第6層は掘り方である。カマド内には土師器甕が2個体残されていた。第312図23はやや北西に傾いた状態で、上面は削平され、口縁部が欠けている。カマドに掛けられた状態で放棄された可能性がある。第312図22は横倒しの状態で出土した。カマド架構材として使用されたものか、本来カマドに掛けられていたものが断定はできない。もし、後者とする、縦置きとの二つ掛けカマドとなる可能性もある。

袖は白色粘土を主体に積み上げられていた。両袖内には土師器甕が2個体宛、倒立状態で埋設されていた。カマド袖の補強材として使用されたものと考えられる。

住居に伴うと思われるピットは10本検出された。Pit 1～4は主柱穴と考えられる。Pit 5～8・10も

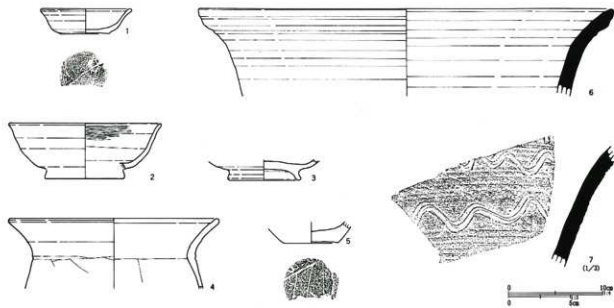
第307図 第58号住居跡・出土遺物



SJS8

- 1 暗褐色土 ローム殻・ローム小ブ
ロックまばらに含む
 - 2 暗褐色土 ローム粗繊維
 - 3 暗褐色土 ローム殻や中多い
 - 4 褐色土 白色粘土ブロック少量
 - 5 褐色土 白色粘土ブロック多量、
粘土殻少量
 - 6 褐色土 粘土ブロック多量
 - 7 黄褐色土 ローム質土(硬さか)
 - 8 褐色土 粘土殻・粘土ブロック含む
 - 9 暗褐色土 粘土・炭化物殻少量
 - 10 黒色土 灰・粘土多量(灰層)
- SJ51
- 1 黄褐色土 ローム主体、黒色土・
粘土混入(細繊維)
 - 2 暗褐色土 ロームブロックとの混土層
- SJ52
- 1 黄褐色土 ローム殻・ロームブ
ロック主体、黒褐色土少量
- ピット1
- 1 暗褐色土 炭化物殻・ローム粗繊維
 - 2 暗褐色土 ローム殻や中多い
 - 3 黒色土 粘土・ローム粗繊維
 - 4 暗褐色土 ローム殻・ローム小
ブロック等一に含む

0 2m



第143表 第58号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	検出	色調	残存率	備考
1	小皿	9.7	2.6	5.2	EI	2	明赤褐	50	Na.3 ロクロ土師器
2	高台椀	(16.1)	4.8		AEHJ	2	橙	15	ロクロ土師器 内面ミガキ+黒色処理
3	高台椀		2.1	7.2	EJ	3	黒褐	35	Na.12 ロクロ土師器 内面ミガキ+黒色処理
4	椀	(22.0)	7.3		ABDEH	1	橙	25	Na.2
5	椀		2.2	5.9	ABEHJ	2	黒褐	45	SJ58・57
6	須恵婁	(44.0)	9.1		BEHI	2	灰黄	15	カマド Na.1 未野産か
7	須恵婁				BEHI	2	青灰	5	Na.7 未野産

主柱穴に重複する状態で検出され、これも主柱穴配置を採ることから、少なくとも1度は建て替えがあった可能性が高い。

貯蔵穴はカマドに向かって右脇のコーナー部から検出された。円形プランテ、直径65cm、深さ57cmである。壁溝はカマドを除き全周する。

出土遺物は土師器環・鉢・甕・壺、須恵器壺などがある(第311・312図)。特にカマド内から、土師器甕がまとまって検出されている。第311図16・17はカマド左袖、18・19はカマド右袖内から出土した。20~23はカマド内出土。24の甕は貯蔵穴内に落ち込むような状態で検出された。遺物は住居中央から北半部に多く検出されている。また、東壁近くには編物石と思われる棒

状礫が10数点まとまって出土した。その他、重複する第60号住居跡に、本住居跡に帰属するであろう遺物が混入していた。

第311図1~14は土師器環である。いずれも口縁部が稜をもって直立または反反するいわゆる模倣環で占められるが、口縁部が短く底部の丸味が強い一群が含まれている(1・10~12)。これらは口縁下に明確な稜をもたず、ヘラケズリによってそれを作り出している点も特徴である。15は鉢。16~27は甕である。甕はいわゆる長胴甕で、胴部は長く延びる。口縁部は斜め上方に緩やかに立ち上がるものが多い。28~30は土師器壺。32は須恵器壺である。胴部は平行叩き後、カキ目が施されている。木野産である。北武蔵型環を伴わな

第144表 第59・60号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	11.4	3.2		EH	1	橙	50	SJ59
2	環	(10.0)	3.7		DEH	2	にぶい橙	25	SJ59 カマド袖
3	環	(11.0)	2.7		A EH	2	にぶい赤褐	10	SJ59 床下
4	環	(10.0)	2.3		DEH	2	灰褐	10	SJ59
5	環	(12.0)	3.8		DEH	1	橙	50	SJ59
6	環	11.8	4.1		EH	1	にぶい橙	60	SJ59
7	環	(12.6)	3.5		EH	1	黒褐	40	SJ59
8	環	(12.8)	4.3		AD	1	橙	30	SJ59 No29
9	環	12.8	3.7		DH	1	にぶい黄橙	15	SJ59
10	環	14.0	4.4		ADH	1	橙	60	SJ59
11	環	(13.0)	4.7		ADE	1	橙	30	SJ59
12	環	(14.0)	5.5		AH	1	橙	40	SJ59
13	環	(17.8)	6.0		ADH	1	橙	50	SJ59
14	環	(13.0)	4.5		DEH	2	にぶい黄橙	10	SJ59 内黒
15	鉢	12.4	8.4	(5.6)	EH	1	橙	70	SJ59 No18
16	甕	21.1	31.2		ADE J	1	にぶい黄橙	85	SJ59 No16 カマド袖
17	甕	20.4	30.4		ADE J	1	にぶい黄橙	90	SJ59 No15 カマド袖
18	甕	20.5	28.8		ABDE J	1	橙	80	SJ59 カマド No3 カマド 袖 No11
19	甕	22.2	20.2		ABDE J	1	橙	80	SJ59 カマド袖内 No17 カマド No17
20	甕		14	(4.8)	BDE J	2	暗赤褐	50	SJ59 カマド No5
21	甕		13.6	5.0	BDE J	2	明赤褐	40	SJ59 カマド袖 No13 底部木炭痕
22	甕	(19.4)	34.2	5.4	ADE J	1	にぶい赤褐	70	SJ59 No1 カマド内
23	甕		27.5	4.3	ADE J	1	にぶい橙	50	SJ59 カマド No2
24	甕	(21.0)	21.5		ADE J	1	にぶい橙	40	SJ59 貯蔵穴 No1・3・4
25	甕	24.6	30.3		BDE J	1	にぶい黄橙	70	SJ59 No9・11
26	甕	(21.4)	9.7		ABDE	1	にぶい橙	25	SJ59
27	甕	21.9	13.2		ABDE	1	にぶい橙	70	SJ59 No20
28	壺	22.2	11.8		ABE J	1	にぶい橙	50	SJ59 No27
29	壺	(24.0)	6.7		DEH	1	灰黄褐	20	SJ59
30	壺		2.4	10.0	BDEH	2	にぶい橙	80	SJ59 No23
31	支脚		4.9	(7.2)	CEH	1	にぶい黄橙	50	SJ59 カマド
32	須恵壺	(14.6)	6.4		E I J	1	にぶい黄橙	25	SJ59 No12 木野産

いこと、模倣環の新しい様相を供えること等から、住居の時期は7世紀前半～中葉頃と考えられる。

第60号住居跡 (第308・309図)

第60号住居跡は、C・D-17グリッドに位置する。重複する第59・70・73号住居跡を切って構築されていた。

平面形は縦長の長方形で、規模は長軸4.58m、短軸3.02m、深さ0.14mを測る。主軸方向はN-98°-Eを示す。

床面はやや凹凸が顕著で、カマド前面から住居中央部は堅く踏み固められていた。埋土には炭化物・焼土が多量に含まれ、また、炭化材が数カ所に遺存していたことから、火災を受け焼失したものと考えられる。

カマドは東壁の南寄りに設置される。燃焼部は壁を切り込んで構築され、底面は床面よりも一段深く掘り込まれている。埋土は第4層が床面、第5層が掘り方である。軸は検出されなかった。

ビットは検出されなかった。カマド前面に土壌が1基検出された。上面には貼床されていたことから、床下土壌または、掘り方の一部と考えられる。

出土遺物としては土師器環・皿・甕、須恵器高台椀・

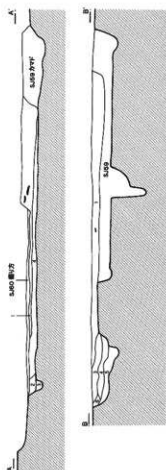
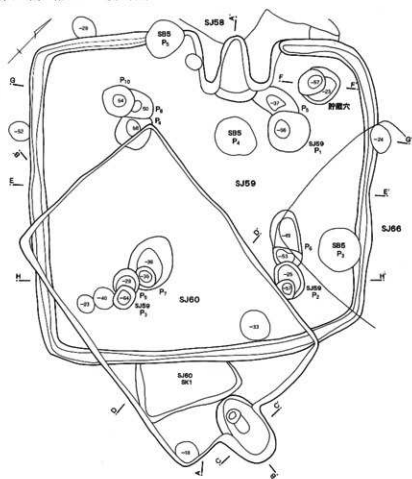
蓋、土鉢、石製紡錘車が検出されたが、量的には少ない。また、第313図33～40・47～49は混入である。その大半は第59号住居跡に帰属するものと推定される。第313図42はカマド内出土の土師器環である。口縁部下端に棒状工具による沈線をもとに1条巡らせている。体部は無調整(ナデ)、底部は平底でヘラケズリ調整されている。43も同巧である。44の環は深身のタイプで、体部は無調整(指頭ナデ)、底部は平底風でヘラケズリ調整。45はほぼ床面出土の須恵器高台椀である。完形。内面に焼成前の「X」状の線刻がある。ヘラ記号か。46も同一形態で、1号土壌(床面下)から出土した。いずれも焼きは甘く、末野産である。

52・53は石製紡錘車である。52は南西コーナ一部、炭化材に挟まれるような位置から出土した。床面から10cm程浮いている。紡軸を通す孔の周囲に「山」の字状の線刻を4つ配している。53はカマド右脇から出土した。やはり床面より数cm浮いている。紡軸を通す孔の横に直径2～4mmの小穴が貫通している。50・51は土鉢である。

住居の時期は9世紀後半～末葉と考えられる。

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
33	環	(12.0)	2.8		ADEH	3	にぶい橙	15	SJ60
34	環	(12.3)	3		ADEH	2	橙	20	SJ60 No12
35	環	11.5	4.8		DEH	2	橙	95	SJ60 No16・19
36	環	(11.5)	4.2		ADEH	1	橙	25	SJ60 No21
37	環	(11.6)	3.7		EH	2	橙	30	SJ60
38	環	(12.0)	3.2		ADEH	1	橙	25	SJ60 No23
39	環	(15.0)	2.6		ADEH	1	明赤褐	10	SJ60
40	皿	(17.0)	3.3		AEH	3	橙	10	SJ60
41	須恵蓋	(10.0)	2.3		E	1	青灰	10	SJ60 湖西産
42	環	11.2	3.6	6.1	ADEH	1	橙	60	SJ60 カマド No1
43	環	(12.4)	3.5		AEH	2	橙	20	SJ60
44	環	(13.0)	4.9	(7.5)	ADEH	1	にぶい橙	20	SJ60 No2
45	須恵高台椀	14.6	5.5	7.4	BEIJ	2	灰黄	100	SJ60 No3 末野産
46	須恵高台椀	(14.8)	5.5	8.4	ABEI	3	にぶい黄橙	30	SJ60 SK1 末野産
47	鉢	(22.9)	4.8		ADEH	2	橙	10	SJ60 No14
48	甕	(20.2)	9.5		ABD	1	にぶい橙	20	SJ60 No16・17
49	甕	(22.2)	6.3		ADEH	2	浅黄橙	25	SJ60 No9・12
50	土鉢	長5.51cm 最大径1.42cm 孔径0.40cm 重量9.21g にぶい橙 SJ60							
51	土鉢	長6.50cm 最大径2.00cm 孔径0.60cm 重量22.47g 浅黄橙 SJ60							
52	石製紡錘車	上径4.0cm 下径2.65cm 孔径0.8cm 厚さ1.55cm 重量37.88g SJ60 上面線刻あり							
53	石製紡錘車	上径4.2cm 下径3.1cm 孔径0.7cm 厚さ1.45cm 重量38.75g SJ60 小穿孔あり							

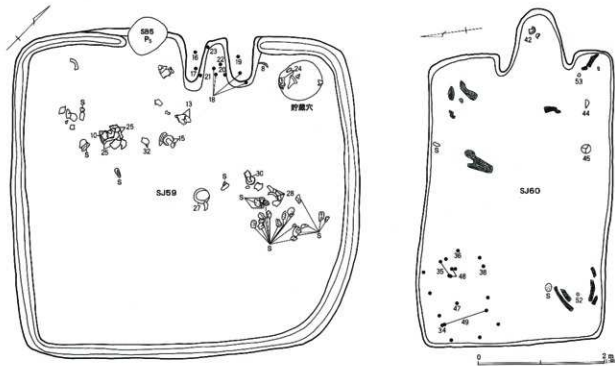
第308図 第59・60号住居跡



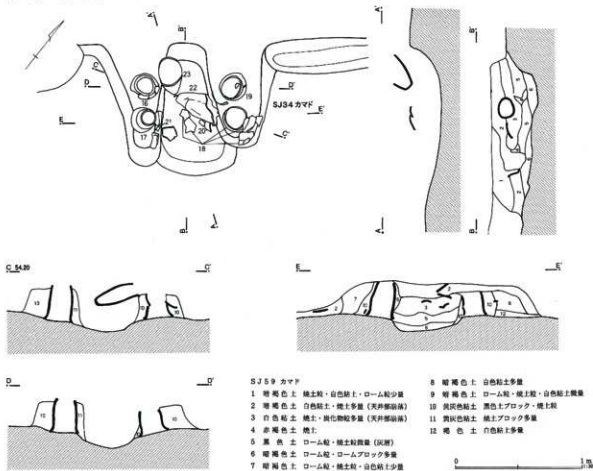
- SJS9
- 1 曜褐色土 ローム殻・焼土殻・焼土ブロック・白色粒多量、炭化惣粒・ロームブロック少量
 - 2 黒褐色土 ローム殻・ロームブロック多量
 - 3 曜褐色土 ローム殻少量
 - 4 黒色土 ロームブロック多量
- SJS9 ビット
- 1 曜褐色土 白色焼土ブロック
 - 2 曜褐色土 ローム殻や多い(柱後身取りか)
 - 3 曜褐色土 黒色土ブロック混入
 - 4 黒色土
 - 5 黒色土 ローム殻多量
 - 6 黒褐色土 地山1土塊、曜褐色土混入
 - 7 黒色土 ロームブロック混入
- SJS9 貯蔵穴
- 1 曜褐色土 白色焼土・焼土・ロームブロック
 - 2 曜褐色土 ロームブロック
 - 3 曜褐色土 白色焼土ブロック粒多量
 - 4 黒色土 ロームブロック混入
- SJS60
- 1 曜褐色土 炭化惣粒ブロック・焼土粒多量、ローム殻混入
 - 2 曜褐色土 ロームブロック含む(柱石部)
 - 3 曜褐色土 焼土ブロック多量、炭化惣粒や多い(天井部)
 - 4 黒褐色土 灰多量、粘土質・炭化惣粒含む(灰層)
 - 5 黒色土 焼土殻・ローム殻少量(敷利方)
 - 6 曜褐色土 焼土殻少量(混入土)
 - 7 曜褐色土 炭化惣粒・焼土殻含む(混入土)



第309図 第59・60号住居跡・遺物分布図

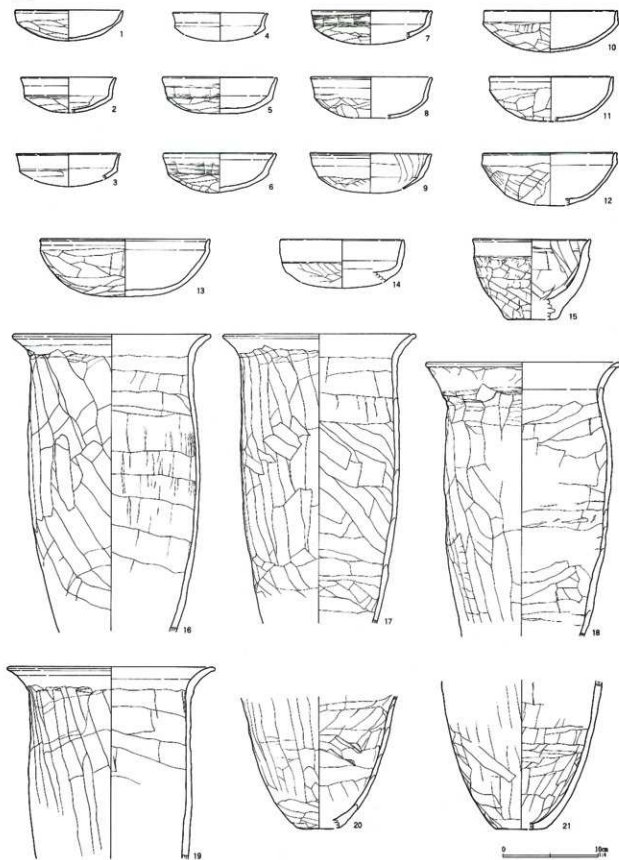


第310図 第59号住居跡カマド

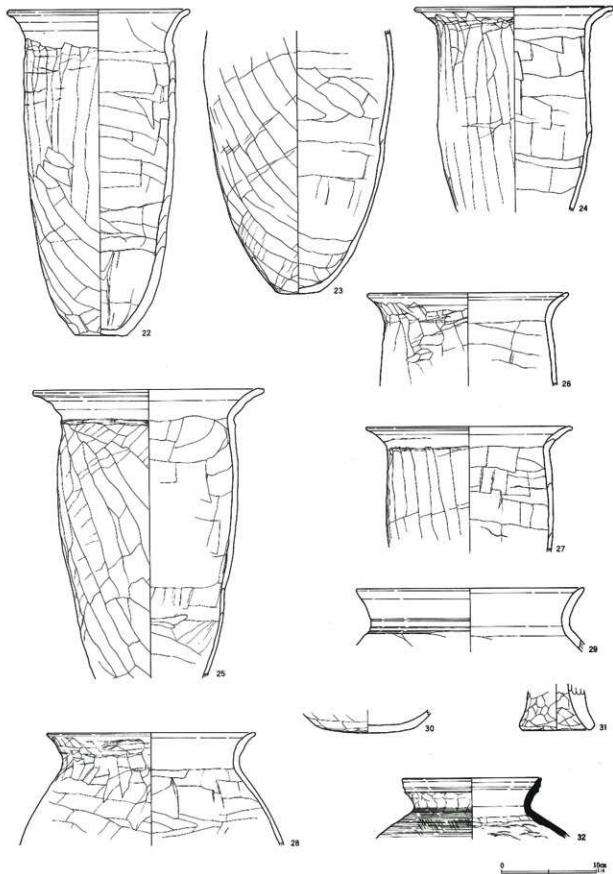


第311图 第59・60号住居跡出土遺物(I)

SJ59

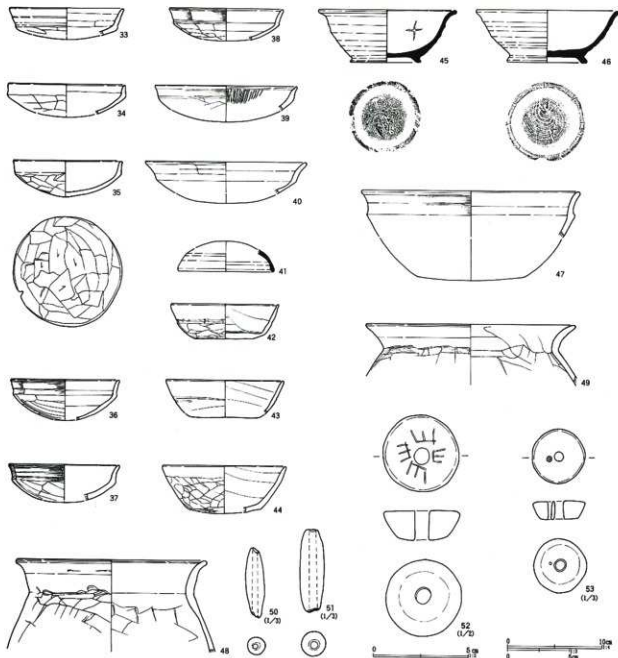


第312图 第59·60号住居跡出土文物(2)



第313図 第59・60号住居跡出土遺物(3)

SJ60



第61号住居跡 (第314図)

第61号住居跡は、C-17・18グリッドに位置する。当初、本住居跡の存在に気づかず、第63号住居跡を掘り進めたところ土層観察用の断面に貼床面が検出された。重複遺構との新旧関係は、第62～65号住居跡を切っていた。また、第3・4号掘立柱建物跡とも重複し、本住居跡の方が新しいものと判断した。

平面形は正方形で、規模は長軸2.73m、短軸2.65m

と小型である。深さは0.10mを測る。主軸方向はN-0°を示す。

残存する部分の床面は平坦である。カマドは検出されなかった。おそらく当初から存在しなかった可能性が高い。

ピット他の付風施設は検出されなかった。

出土遺物は土師器環・甕・小型甕、須恵器高台碗・鉢がある(第315図1～10)。遺物は住居南半の貼床面

の直上または、やや浮いた位置から出土している。

第315図1は須恵器高台椀。軟質で焼きが甘い。末野産である。2は平底の土師器環。体部は無調整、底部ヘラケズリ。3はやや大振りの土師器環で、体部は無調整(指頭感)、底部ヘラケズリ。内面には底部から口縁部に向かって粗い暗文が施される。4～7は「コ」の字状口縁甕である。頸部は短くやや内傾している。8は須恵器鉢である。底部外面は円形に浅く窪んでいる。末野産である。9は小型甕である。住居の時期は9世紀末葉を中心とした年代であろう。

第62号住居跡 (第314図)

第62号住居跡はC-17・18グリッドに位置する。遺存状態は極めて悪く、西壁部を中心に壁溝が確認されたことから住居跡の存在が判明した。床面は既に削平され、カマド掘り方と思われる焼土を多量に含む土壌が検出されたに留まる。第61号住居跡に切られていたが、第63・65号住居跡、及び第3～5号掘立柱建物跡

との新旧関係は明確に把握できなかった。

平面形は長方形になるものと推定され、規模は長軸4.26m(推定)、短軸2.60m、主軸方向はN-107-Eを示す。

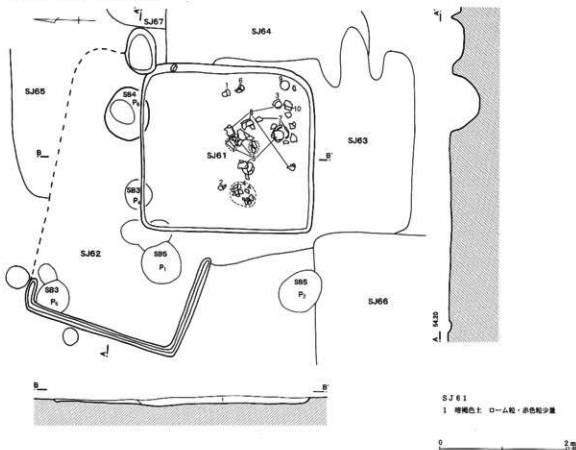
床面は削平されていた。西壁付近には掘り方面をもつ。東壁の北寄りに焼土混じりの浅い土壌が検出され、一応カマドの掘り方ではないかと考えたが、下面の調査で第64号住居跡カマドが検出されたことから誤認した可能性が高い。カマドは不明としておく。

住居に伴うピットは検出されなかった。

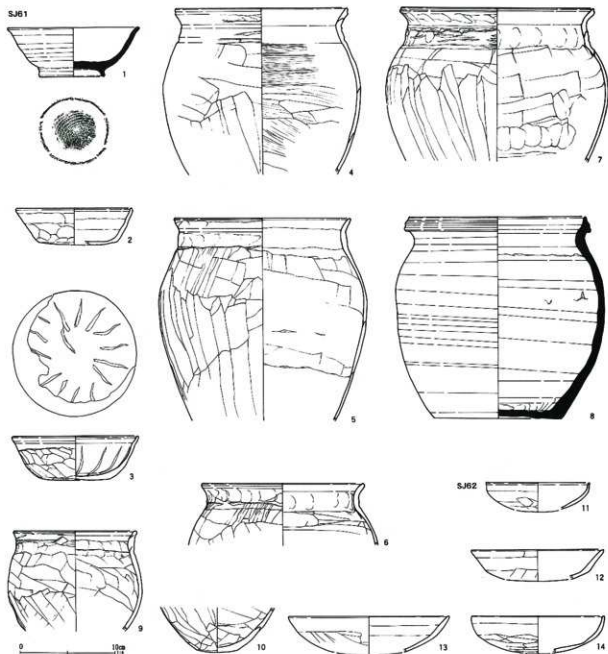
出土遺物は土師器の環と皿がある(第315図11～14)。

11・14の環はカマド状の土壌から検出されたもので、確実に伴う遺物として良いか躊躇される。12・13は西壁部の掘り方から出土した。出土遺物の時期は8世紀初頭前後であろうが、これをもって住居の時期として良いかは判然としない。第61号住居跡との関係から9世紀後半以前とするに留めておく。

第314図 第61・62号住居跡



第315図 第61・62号住居跡出土遺物



第63号住居跡 (第316図)

第63号住居跡は、C-17・18グリッドに位置する。遺構密集区の一隅にあり、多数の遺構と重複している。第64号住居跡を切り、第61・66号住居跡に切られている。第62号住居跡との新旧関係は不明である。また、第4号掘立柱建物跡とも重複し、掘立柱建物跡の方が新しい可能性が高い。

平面形は歪んだ正方形で、規模は長軸3.41m、短軸

3.22m、深さ0.23mを測る。主軸方向はN-87°-Eを示す。

床面は凹凸が比較的顕著である。住居南半は堅く踏み固められていた。北半部はやや軟弱である。カマドは東壁の南寄りに設置される。燃焼部先端は壁を切り込んでおり、底面は一段深く掘り込まれていた。第4・5層は天井部崩落土、第6層が灰層である。第7・8層は掘り方埋土と考えられる。袖は白色粘土を用いて

第145表 第61・62号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高台柄	(14.0)	5.1	6.7	DEI	3	にぶい黄橙	55	SJ61 No.19 末野産 軟質
2	坏	12.2	3.8	8.2	DH	1	にぶい橙	65	SJ61 No.1 SJ62 体部無調整 底部ケズリ
3	坏	13.3	4.6	8.3	CHI	1	にぶい橙	60	SJ61 No.15 内面放射障文 体部外面指押え
4	甕	(18.2)	17.5		DEH	1	明赤褐	25	SJ61 No.2
5	甕	18.6	21.2		ADEH	1	にぶい橙	50	SJ61 No.3・5・6・9・11
6	甕	(17.2)	6.5		DEH	2	にぶい黄橙	25	SJ61 No.18
7	甕	20.4	16.1		ADEH	2	橙	70	SJ61 No.8・9 確認面
8	須恵鉢	18.8	21.1	13.6	HIJ	2	にぶい褐	80	SJ61 No.4・5・7・14 末野産 底部円形に凹む
9	小型甕	13.0	10.54		DHJ	1	にぶい橙	80	SJ61 No.16
10	甕		4.7	4.4	HI	2	にぶい橙	30	SJ61 No.14
11	坏	(11.0)	2.8		AE	2	にぶい赤褐	10	SJ62 カマド
12	皿	(14.0)	3.1		ADEH	3	橙	15	SJ62
13	皿	(17.0)	3.8		DEH	2	橙	20	SJ62
14	坏	(14.0)	3.9		ADEH	2	にぶい赤褐	25	SJ62 カマド

構築されていたが、かなり流出しており遺存状態はあまり良くない。

ピットは2本検出された。主柱穴か否かは不明である。壁溝は南壁から西壁にかけて部分的に検出された。出土遺物は土師器・坏・甕、須恵器・坏・壺がある(第317図1~11)。第317図1~6は土師器坏である。1は模倣坏、2~6は北武蔵型坏である。2・6はほぼ床面、4は南壁際の覆土上層から出土した。7は土師器皿。8・9は須恵器坏である。8はカマド内出土。9は底部回転ヘラケズリ調整される。両者とも末野産である。10は土師器甕で、胴部縦ヘラケズリされるもので様相的には古い。混入かもしれない。11は須恵器壺で、カマド脇のコーナー部から倒立状態で出土した。器台に転用された可能性がある。末野産。時期は北武蔵型坏や須恵器から8世紀初頭を中心とした年代と推定される。

第64号住居跡(第316図)

第64号住居跡は、C-17・18グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第65号住居跡を切り、第61・63・67号住居跡に切られていた。第62号住居跡との先後関係は不明。第3号掘立柱建物跡との関係は不明であったが、本住居跡の方が新しい可能性がある。

平面形は正方形で、規模は長軸3.73m、短軸3.32m、深さ0.10mを測る。主軸方向はN-4°-Eを示す。床面は大半が削平されていた。残存部は凹凸が顕著

であった。カマドは北壁の東寄りに設置されていた。燃焼部は壁を切り込んでいた。埋土は白色粘土と焼土が多量に含まれ、その下面に灰層が形成されていた。袖は白色粘土を積み上げて構築されたものと推定されるが、既に崩落し、明確に捉えることはできなかった。壁溝は西壁から南壁にかけて途切れる箇所がある。ピット他の付属施設は検出されなかった。

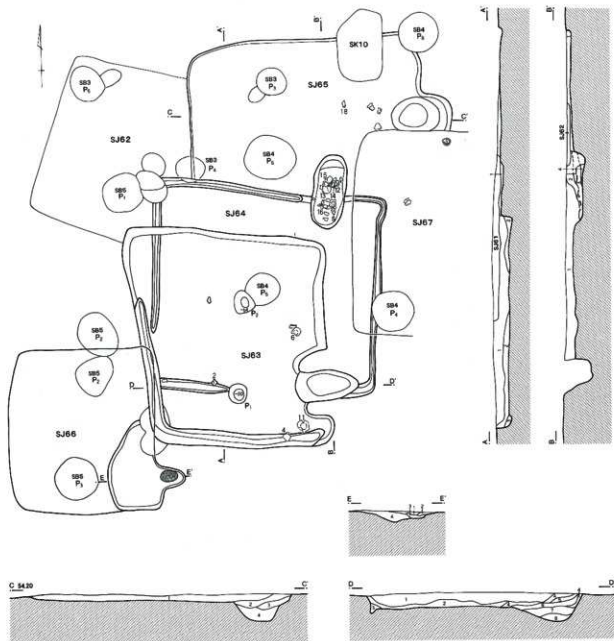
出土遺物は土師器・坏・甕があり(第317図12~16)、いずれもカマド内から検出されている。土師器坏は口縁部が内湾または直立する丸底形態の北武蔵型坏である。甕は長胴甕であるが、胴部に丸味をもち器壁がやや薄くなっている。住居の時期は重複する第63号住居跡と大差なく、8世紀初頭前後と思われる。両者は継続的に建て替えられた可能性がある。

第65号住居跡(第316図)

第65号住居跡は、C-17・18グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第61・64・67号住居跡、第4号掘立柱建物跡及び第10号土壌に切られていた。第3号掘立柱建物跡との新旧関係は不明確であるが、Pit 3は床面下から検出され、掘立柱建物跡の方が古い可能性がある。また、第62号住居跡との関係は不明である。

平面形は方形系と推定され、規模は長軸3.72m、短軸2.50m(現在長)、深さ0.09mを測る。主軸方向はN-88°-Eを示す。

第316図 第63～66号住居跡



SJ63

1 暗褐色土 ローム粒・赤色粒・ロームブロック多量

2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少量

3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量

カマド

4 暗褐色土 ローム粒少量、白色粘土多量（天井部破損）

5 赤褐色土 焼土層

6 黒色土 ローム粒・焼土粒少量（灰層）

7 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量

8 暗褐色土 ローム粒少量

SJ64

1 暗褐色土 ロームブロック混入

2 暗褐色土 白色粘土・焼土ブロック多量（カマド天井部破損）

3 黒色土 灰・焼土多量（灰層）

4 暗褐色土 ロームブロック混入

SJ65

1 暗褐色土 ロームブロック多量、焼土粒中多量（人海狗埋め戻し）

2 暗褐色土 焼土粒・焼土ブロック・ローム混入（天井部破損土）

3 黒色土 灰多量、焼土粒・炭化物粒多量（灰層）

4 黒色土 ロームブロック・ローム粒混入（カマド残り方）

SJ66 カマド

1 黒色土 灰多量、焼土粒・炭化物粒混入（灰層）

2 赤褐色土 焼土層

3 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒・ローム粒混入（残り方）

4 暗褐色土 ロームブロック混入（残り方）

0 2m

第317図 第63~66号住居跡出土遺物

SJ63



1



4



7



2



5



8



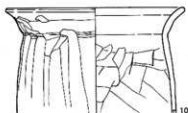
3



6



9



10

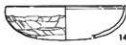


11

SJ64



12



14



13



15

SJ65



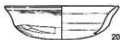
17



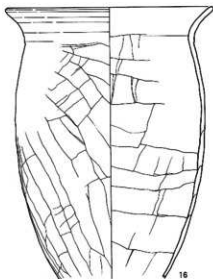
19



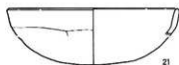
18



20



16



21

SJ66



22



23



第146表 第63～66号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(12.0)	3.1		DEH	1	にぶい橙	20	SJ63
2	環	12.4	3.5		D	1	にぶい橙	70	SJ63 No.3
3	環	(12.0)	3.7		ADH	2	にぶい橙	35	SJ63
4	環	13.6	4.4		ADEH	1	橙	90	SJ63 No.2
5	環	(14.0)	3.1		ADEH	2	橙	10	SJ63
6	環	14.2	4.6		ADEI	1	にぶい赤褐	90	SJ63 No.6
7	皿	(17.0)	2.9		DEH	2	橙	15	SJ63
8	須恵環	(15.0)	4		BCEI	2	浅黄	15	SJ63 カマド 末野産
9	須恵環	(16.0)	4.1	(11.0)	DEGIJ	3	灰黄	25	SJ63 末野産 底面回転ヘラケズリ
10	甕	(19.0)	11.1		DHI	1	明赤褐	30	SJ63
11	須恵壺	17.0	8.4		BI	1	灰	60	SJ63 No.1 末野産
12	環	(12.9)	3.8		BCDH	1	明赤褐	30	SJ64 カマド No.2・9
13	環	14.0	4.6		BCDH	1	橙	80	SJ64 カマド No.1
14	環	12.5	3.4		DH	1	にぶい橙	25	SJ64 カマド No.13
15	皿	14.9	3.6	12.9	ABCDH	1	橙	75	SJ64 カマド No.2
16	甕	22.0	27.8		ADEH	2	にぶい橙	35	SJ64 カマド No.14
17	環	(10.0)	2.6		DEH	2	橙	20	SJ65
18	環	(11.0)	2.8		ADEH	1	橙	20	SJ65 No.4
19	環	(14.0)	3.6		ADE	2	橙	20	SJ65 床下
20	環	(11.8)	3.1		DE	2	明赤褐	25	SJ65 カマド
21	碗	(18.0)	2.9		DE	2	明赤褐	15	SJ65
22	環	(12.0)	2.4		AEH	2	明赤褐	5	SJ66 床下
23	環	(13.0)	2.8		DEH	3	明赤褐	1	SJ66 床下

床面は凹凸が顕著である。土にはロームブロックが多量に含まれ、人為的に埋め戻された可能性がある。カマドは東壁に設置され、燃焼部は壁を切り込んでいる。カマド南半は第67号住居跡に切られており、遺存状態は悪い。底面は床面下に掘り込まれ、掘り方面をもつ(第4層)。第3層が灰層である。袖部は遺存していなかった。

住居に伴うと思われるピットは検出されなかった。

出土遺物は土師器環・碗の小片が検出されたのみである(第317図17～21)。環には模倣環と北武蔵型環がある。住居の時期決定は難しいが、重複関係や出土遺物から7世紀中葉～後半頃と考えておく。

第68号住居跡(第316図)

第68号住居跡は、C-17グリッドに位置する。遺存状態が極めて悪く、カマドとその前面の掘り方が辛うじて残存するのみである。第57・63号住居跡を切っている。第5号掘立柱建物跡との関係は不明確であるが、本住居跡の方が新しい可能性が高い。

平面形は方形系統と推定されるが、規模は不明であ

る。主軸方向はN-90°-Eを示す。

カマドは東壁に設置される。燃焼部は壁を切り込んでおり、灰層と底面の被熱焼土層が露出していた。

出土遺物は土師器の環小片が2点検出されたに留まる(第317図22・23)。カマドの形態や重複関係から考えて、出土遺物は住居に伴う可能性は低い。おそらく、10世紀後半以降の住居跡と推定される。

第67号住居跡(第318図)

第67号住居跡は、C-18グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第64・65号住居跡を切り、第68号住居跡、第4号掘立柱建物跡に切られていた。

平面形は正方形で、規模は長軸3.50m、短軸3.30m、深さ0.22mを測る。主軸方向はN-2°-Eを示す。

床面は凹凸が激しい。全体に堅く踏み固められていたが、西壁部付近の床面はやや軟弱であった。

カマドは北壁の東寄りに設置される。燃焼部はほぼ壁内におさまり、底面は皿状に窪む。側壁は被熱していた。煙道部は燃焼部から段差をもって壁外に延びている。袖部は白色粘土を積み上げて構築されていた。

ピットは2本検出されたが、住居に伴うものではないであろう。

出土遺物は、土師器環・皿・甕・壺、須恵器蓋・環、土製支脚がある(第318図1~11)。第318図1はやや扁平な環であるが、もう少し丸味が強いてであろう。2・3は内湾口縁の北武蔵型環である。4~6は皿。7は須恵器蓋で、内面にかえりが付く。北壁直下の床面出土。完形品で、口径11.5cm前後の環と組み合うであろう。形態・胎土から秋間産と思われる。8は無台環。推定口径16cm。底部はヘラ切りされている。素地土は細かく、混入物がほとんどない。群馬産と思われる。敢えていえば東附・観音山窯跡群産の特徴に近いものがある。9は土師器甕、10は土師器壺である。住居の時期は8世紀初頭前後と推定される。

第68号住居跡 (第318図)

第68号住居跡は、C-18グリッドに位置する。分割調査を実施した関係で、住居の存在に気づかず、第67号住居跡を掘り下げてしまったが、断面観察により本住居跡が第67号住居跡覆土上面に乗っていることが判明した。

平面形は方形と推定され、規模は長軸2.40m、短軸2.28m、深さ0.09mを測る。主軸方向はN-90°-Eを示す。

床面は凹凸があるが、全体に堅く締まっていた。カマドは東壁の南寄りに設置される。燃焼部は壁を切り

込んで構築されていた。第4層が掘り方とおもわれ、その上面が火床面と考えられる。袖は検出されなかった。火床面には倒立状態の小型甕が残されていた。

ピットは3本検出された。壁にかかる Pit 1・3及び北東コーナー部に重複するピットは住居よりも新しい時期の所産である。Pit 2の帰属は不明である。

貯蔵穴と思われるピットは南東コーナー部にある。深さ5cm程度と浅く Pit 3に切られていた。埋土は焼土・灰・焼土混じりの暗褐色土で、土師器環が出土した。また、住居北東部に土甕が1基検出された。上面は貼床されており、掘り方または床下土壌であろう。

出土遺物は少なく、土師器環と小型甕が検出されたに留まる(第318図12~14)。第318図12は1号土甕内出土の土師器環である。混入と思われる。13は貯蔵穴内出土の土師器環。体部は無調整(指押さえ)、底部は平底でヘラケズリ調整される。14はカマド内出土の小型台付甕である。住居の時期は9世紀後半~末葉頃と推定される。

第69号住居跡 (第319図)

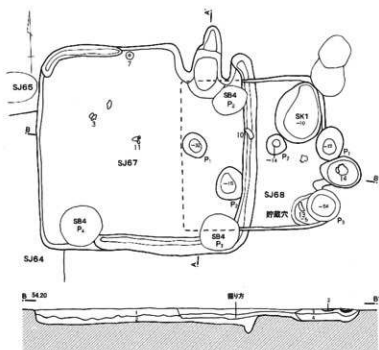
第69号住居跡は、C-17・18グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第63号住居跡及び第70号住居跡に切られていた。

平面形は方形と推定され、規模は長軸3.58m、短軸1.20m(現在長)、深さ0.11mを測る。主軸方向はN-2°-Eを示す。

第147表 第67・68号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(12.1)	2.7		DEH	2	橙	15	SJ67
2	環	(12.4)	4.0		DEH	1	にぶい橙	40	SJ67
3	環	(15.0)	4.4		DEH	2	にぶい橙	20	SJ67 No.3
4	皿	(14.0)	2.9		ADEH	1	橙	10	SJ67
5	皿	(16.2)	2.5		DEH	2	橙	10	SJ67
6	皿	(16.0)	3.2		ABDEH	3	橙	10	SJ67
7	須恵蓋	12.8	2.3		EH	2	灰黄	100	SJ67 No.1 黒色粒子 秋間産
8	須恵環	(16.0)	4.2	10.0	B	1	灰白	40	SJ67 群馬産 底部ヘラ切り
9	甕	22.2	6.8		DEH	2	にぶい赤褐	30	SJ67
10	壺	24.0	6.5		BDEHI	1	にぶい褐	5	SJ67 No.5
11	支脚		9.5		AD	1	にぶい橙	85	SJ67 No.4
12	環	(12.0)	2.8		ADEH	2	橙	25	SJ68 SK 1
13	環	(14.0)	3.9	(9.0)	ABDEH	2	にぶい橙	15	SJ68 貯蔵穴
14	台付甕	13.0	13.0		ADH	1	明赤褐	60	SJ68 カマド No.1

第318図 第67・68号住居跡・出土遺物



SJ67

- 1 暗褐色土 ローム殻・赤色粒・白色粉多量
- 2 黒褐色土 ローム殻・ロームブロック・赤色粒少量

カマド

- 3 黒褐色土 ローム殻・焼土粒・焼土ブロック・
白色粘土ブロック・炭化物粒少量

4 黒褐色土 焼土多量

5 暗褐色土 ローム殻・ロームブロック多量

SJ68

- 1 暗褐色土 ローム殻・焼土粒少量

カマド

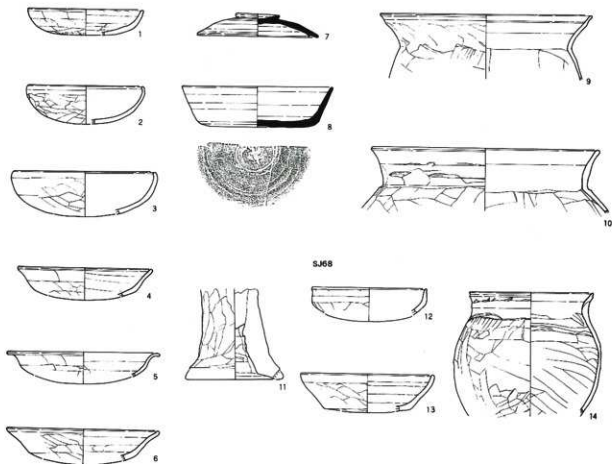
2 赤褐色土 焼土ブロック

3 暗褐色土 焼土殻・焼土ブロック多量

4 暗褐色土 ローム殻・ロームブロック・
焼土粒多量 (掘り方)

0 2m

SJ67



0 10cm

床面は貼床されやや凹凸をもつが、全体に堅く締まっていた。埋土にはロームブロックが多量に含まれ、埋戻された可能性がある。

カマドは北壁の東寄りに設置される。燃焼部は壁を切り込み、底面は皿状に窪んでいた。袖部に相当する位置には白色粘土が薄く堆積していたが、ほとんど崩落したものと思われ、明確な袖部は検出できなかった。ピットは検出されなかった。壁溝はカマドを除き巡っていた。

出土遺物は、土師器の環・皿・椀・小型甕・壺がある(第321図1~9)が、量的には少ない。第321図1~5は土師器環で、5は模倣環、それ以外は口縁部が短く内湾する丸底形態の北武蔵型環である。6は皿、7は椀である。1・3・6は床面から出土している。住居の時期は8世紀初頭前後と考えられ、重複する第63号住居跡との時期差はほとんどみられない。

第70号住居跡(第319図)

第70号住居跡は、C・D-17・18グリッドに位置する。重複する第69・72・73号住居跡を切り、第71号住居跡に切られていた。第6号掘立柱建物跡との関係は不明確であるが、掘立柱建物跡の方が新しい可能性がある高いものと判断した。

平面形は正方形で、規模は長軸4.85m、短軸4.77m、深さ0.17mを測る。主軸方向はN-110°-E。

床面は概ね平坦で、全体に比較的堅く踏み固められていた。カマドは東壁の中央からやや北寄りに設置されていた。燃焼部は壁を切り込んで構築され、底面は深く掘り込まれている。第10層が灰層、第11層は掘り方埋土である。袖部は白色粘土を主体に積み上げて構築されていた。

ピットは2本検出された(Pit 1・2)。いずれも主柱穴に相当するものと考えられる。4本主柱穴とすると、第6号掘立柱建物跡 Pit 7が本住居跡の柱穴に対応する。おそらくほぼ同一地点に重なって掘り込まれたものと考えられる。壁溝はカマドを除き全周する。

出土遺物は土師器の環・皿・鉢・小型甕・甕、須恵器長頸瓶・壺がある(第321図10~30)。第321図11の土

師器環は完形品で、南壁直下の壁溝上面から出土した。15の環はカマド前面の床面から僅かに浮いた位置から出土した。23の皿は南壁部の床面出土。12の環と30の須恵器壺は覆土下層、18の環は覆土上層から出土している。

第321図11~18・21は北武蔵型環である。口縁部が直立し、扁平な器形のものが主体を占める。22~24は土師器皿。口径15cm前後とやや縮小している。29は長頸瓶口縁部片。接合しない2片を合成した。外面にカキ目が施されている。灰色で堅緻に焼き上がっており、表面に黒色粒子が見える。秋間か湖西産と思われる。本住居跡と第69号住居跡出土の破片が接合しており、本来的には第69号住居跡に伴う遺物とみても良いかもしれない。30は末野産の壺である。住居の時期は8世紀前半と考えられるが、8世紀初頭までは遡らないであろう。

第71号住居跡(第319・320図)

第71号住居跡は、D-17・18グリッドに位置する。重複する第70・72・73号住居跡を切って構築されていた。第6号掘立柱建物跡とも重複し、断面観察により掘立柱建物跡の方が新しいことが判明した。

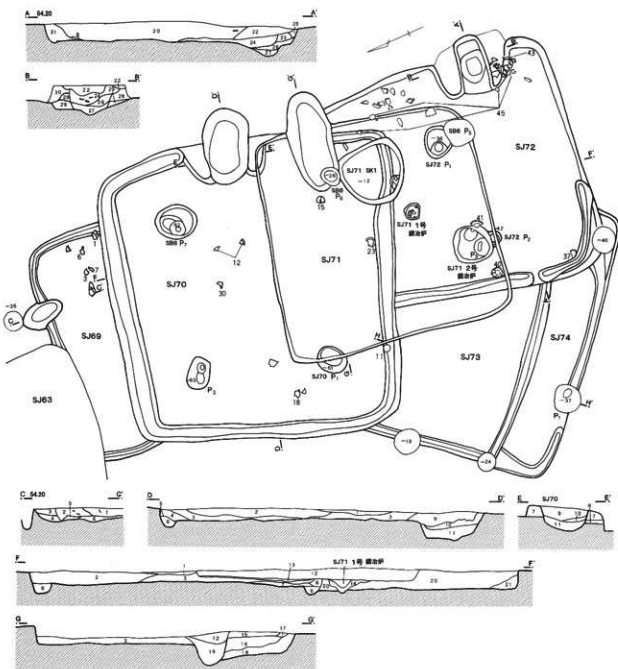
平面形は正方形で、規模は長軸3.66m、短軸3.63m、深さ0.14mを測る。主軸方向はN-97°-Eを示す。床面はかなりの部分で掘り過ぎてしまったが、断面観察によって第70号住居跡覆土中に貼床されたことが判明した。概ね平坦で、床面直上に薄い炭化物層が覆っていた。

カマドは東壁の北寄りに設置される。埋土には白色粘土と焼土粒子が多量に含まれていた(第15~17層)。最下層は掘り方と考えられる(第18層)。袖部は明確に把握することはできなかった。少なくとも白色粘土を積み上げた袖部は存在しなかった。

ピットは検出されなかった。

特筆される遺構として鍛冶炉が2基検出された(第320図)。1号鍛冶炉は住居中央やや南に位置する。床面を直径50cm、深さ20cmほど掘り窪め、粘土を貼って炉を構築している。炉体は青灰色に還元し、鉄滓が数

第319図 第69～74号住居跡

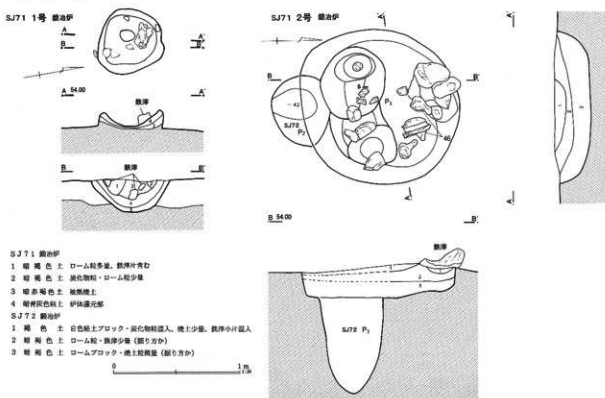


- SJ 69**
- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム混入 (埋め戻し)
 - 2 暗褐色土 ローム小ブロック・地上粘土多量 (埋め戻し?)
 - 3 暗褐色土 地上粘土多量、白色粘土粒子少量 (天井部崩壊?)
 - 4 黒色土 ロームブロック少量 (掘り方)
 - 5 黄褐色土 ローム・黒色土の混入層 (掘り方)
 - 6 暗褐色土 ロームブロック混入。上面は灰を形成 (掘り方)

- SJ 70**
- 1 褐色土 地上粘土多量
 - 2 暗褐色土 ロームブロック多量
 - 3 暗褐色土 粘土多量、ローム少量
 - 4 暗褐色土 複雑なローム粘土多量
 - 5 黄褐色土 (ローム壁面土)
 - 6 黒色土
 - 7 白色粘土 粘土混入
 - 8 暗褐色土 白色粘土ブロック少量
 - 9 暗褐色土 粘土ブロック多量、白色粘土ブロック少量
 - 10 黒色土 (灰層)
 - 11 暗褐色土 ロームブロック・粘土混入 (掘り方)
- SJ 71**
- 12 黄褐色土 ローム混・赤色粒、ロームブロック少量
 - 13 暗褐色土 (掘込)
 - 14 褐色土 ローム混・ロームブロック混入 (掘込)
 - 15 黄褐色土 粘土多量、灰化物粒少量
 - 16 暗褐色土 白色粘土ブロック・粘土粒多量
 - 17 赤褐色土 埋
 - 18 褐色土 白色粘土・粘土ブロック・地上粘土混入
 - 19 暗褐色土 粘土粒・灰化物粒多量

- SJ 72**
- 20 暗褐色土 ローム混・粘土粒多量、部分的に白色粘土ブロック (埋め戻し?)
 - 21 黄褐色土 ローム混入 (一次埋土)
 - 22 褐色土 ローム混・粘土多量、白色粘土ブロック多量
 - 23 暗褐色土 粘土・黄褐色粘土少量
 - 24 褐色土 粘土ブロック・黄褐色粘土ブロック多量 (天井部崩壊土)
 - 25 褐色土 粘土ブロック・地上粘土・黒色土混入
 - 26 黒色土 粘土混入 (灰層)
 - 27 褐色土 ローム多量、粘土混入 (掘り方)
 - 28 灰白色粘土 埋
 - 29 黒色土
 - 30 暗褐色土 ローム混比較的多
- SJ 73**
- 1 暗褐色土 ローム混少量
 - 2 暗褐色土 ローム混・赤色粒少量
 - 3 暗褐色土 ローム混多量
- SJ 74**
- 4 暗褐色土 ローム混・ロームブロック多量

第320図 第71号住居跡 1号・2号鍛冶炉



点付着した状態で遺存していた。遺存状態は極めて良好である。また、炉体の外側は被熱しており、赤褐色の地山酸化層が確認された。

2号鍛冶炉としたものは、1号鍛冶炉の南西側に位置する。調査時には本住居跡下層の第72号住居跡に伴うとしたが、床面に焼土が堆積しており、浅い土壇状の掘り込みがみられたことから、本住居跡に伴う施設と考えた。土壇は直径130cm、深さ30cmで、鍋底状に掘り込まれていた。上面に焼土が堆積し、その下層に鉄滓・羽口片・白色粘土・焼土と炭化物を含む土が堆積していた。鍛冶炉自体とは考えられないが、鍛冶に関係する遺構であろう。あるいは、鍛冶炉の作り替えに伴って廃棄土壇に転用されたのかもしれない。土壇下面にはピットが検出され、おそらく重複する第72号住居跡に伴う可能性が高いものと推定される。

出土遺物は土師器環と須恵器環、砥石、羽口がある(第322図31~36・46)。いずれも小片で住居に確実に伴う遺物は抽出できない。31・33・34は混入と考えられる。32はやや扁平化した北武蔵型環で、重複する第

70号住居跡と時期差はあまりみられない。35は平底暗文環で、底部内面に螺旋暗文とそれを崩した表現と思われる波状の暗文が付く。おそらく9世紀代の所産と推定される。他には9世紀代に該当する土器片は存在せず、混入の可能性が高い。轆羽口(46)は第72号住居跡出土となっているが、前述したように本住居跡に伴うものと判断した。推定直径8cm程で、外面に還元部と溶解部がみられることから鍛冶炉に挿入された部分の破片と考えられる。住居の時期は不明確である。第70号住居跡に後続することは確実に、8世紀前半またはそれ以降とするに留めたい。

第72号住居跡(第319図)

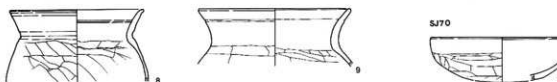
第72号住居跡は、D-17・18グリッドに位置する。多数の遺構と重複し、第73・74号住居跡を切り、第70・71・84号住居跡・第6号掘立柱建物跡に切られている。

平面形は方形と推定され、規模は長軸3.86m、短軸3.60m(現在長)、深さ0.30mを測る。主軸方向はN-95°-Eを示す。

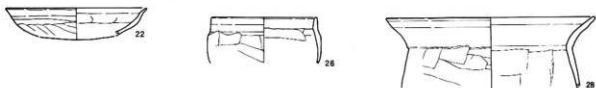
大寄II区

第321图 第69~73号住居跡出土遺物(1)

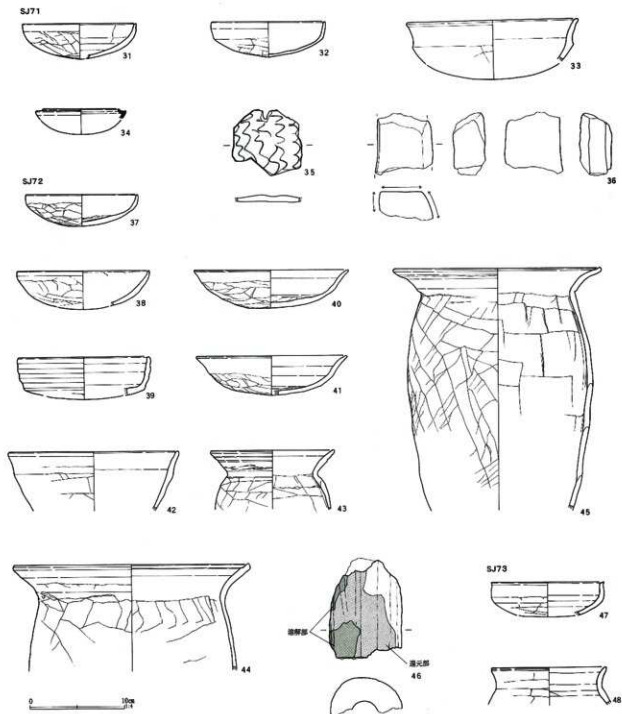
SJ69



SJ70



第322図 第69～73号住居跡出土遺物(2)



床面は平坦で全体に強く踏み固められていた。埋土は大きな土層変化はみられず、埋め戻された可能性がある(第20層)。

カマドは東壁の南寄りに設置される。燃焼部は僅かに壁を切り込んで構築されていた。底面は一段深く掘り込まれ、第26層が灰層である。袖部は白色粘土を主

体に積み上げられていた。

ピットは3本検出された。Pit 1とPit 2またはPit 3が主柱穴に対応するかもしれない。2本主柱穴か。壁溝は西壁から南壁にかけて部分的に検出された。出土遺物は土師器の環・皿・鉢・甕・小型甕がある(第322図37～45)。37の環は南西コーナー部の覆土上

層出土。40の皿は西壁下の床面から僅かに浮いた位置 圃から出土した。
から出土した。45の甕と43の小型甕はカマドとその周 第322図37・38は丸底形態の北武蔵型環である。39は

第148表 第69～73号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	環	12.0	3.8		DEH	1	にぶい褐	70	SJ69 No.6
2	環	(12.0)	3.7		DEH	1	にぶい褐	45	SJ69 確認面
3	環	(12.0)	3.3		ABCDH	1	にぶい褐	30	SJ69 No.2
4	環	(12.0)	3.0		ADEH	2	橙	30	SJ69
5	環	(11.0)	3.5		EH	2	にぶい橙	20	SJ69
6	皿	(18.0)	3.9		ADEH	2	橙	15	SJ69 No.5
7	碗	(20.0)	5.4		DEH	1	橙	15	SJ69 No.3
8	小型甕	(14.0)	7.5		ADH	1	明赤褐	25	SJ69
9	小型壺	(16.0)	6.0		ADE	2	にぶい赤褐	25	SJ69
10	環	(14.9)	4.7		DEH	1	にぶい橙	20	SJ70 確認面
11	環	12.6	3.3		ADH	1	橙	100	SJ70 No.10
12	環	12.5	3.2		CDH	1	にぶい橙	75	SJ70 No.1・3
13	環	(11.0)	2.9		BDE	1	橙	30	SJ70 確認面
14	環	(12.0)	3.4		ABD	1	灰褐	30	SJ70 覆土
15	環	12.6	3.1		DEH	1	橙	80	SJ70 No.4
16	環	(12.0)	2.4		AEG	2	にぶい橙	10	SJ70 床下一括
17	環	12.2	3.2		DEH	1	にぶい橙	30	SJ70
18	環	14.0	3.5		DEH	1	にぶい橙	70	SJ70 No.9
19	環	(12.0)	2.5		ADE	1	橙	5	SJ70
20	環	(13.0)	2.9		ADEG	2	にぶい橙	5	SJ70
21	環	(15.8)	4.5		DEG	2	灰黄褐	25	SJ70 床下一括
22	皿	(14.9)	2.8		BDH	2	橙	20	SJ70 覆土
23	皿	15.0	3.7		DEHJ	1	橙	80	SJ70 No.11
24	皿	(14.9)	3.2		DH	1	にぶい橙	25	SJ70 覆土
25	鉢	(14.0)	5.7		D	1	橙	25	SJ70 SJ59
26	小型壺	(11.0)	4.8		CDGI	2	にぶい黄橙	10	SJ70 床下一括
27	小型甕	(14.0)	6.0		ADEGH	2	橙	15	SJ70 カマド
28	甕	(22.0)	7.5		DEH	2	橙	5	SJ70 覆土
29	須恵長頸瓶	(10.0)	9.8		E	1	灰白	30	SJ70・69 覆土 秋間か湖西産
30	須恵甕	(22.0)	6.9		BEI	1	暗青灰	10	SJ70 No.2 覆土 木野産
31	環	(12.0)	3.7		BDEH	2	黒	20	SJ71 内外面黒色処理
32	環	(12.0)	3.7		ABDEH	2	橙	20	SJ71
33	碗	(18.0)	4.4		ADEH	2	橙	5	SJ71
34	須恵環	(8.0)	1.1		E	1	青灰	15	SJ71・72
35	環		1.2		ABDEH	1	明赤褐		SJ71 内面 ラセン+波状暗文(線刻)
36	砥石	長(5.7)cm 最大幅5.8cm 厚さ3.4cm 重量147.35g				SJ71			
37	環	11.8	3.3		BDH	1	橙	60	SJ72 No.20
38	環	(14.0)	3.7		DE	2	にぶい褐	20	SJ72
39	環	(14.0)	4.0		AEH	2	橙	10	SJ72・71
40	皿	16.3	4.0		BDH	1	橙	90	SJ72 No.22
41	皿	16.0	4.1		ADH	1	橙	50	SJ72 No.23
42	鉢	(18.0)	6.2		ADH	1	橙	15	SJ72
43	小型甕	(13.0)	6.3		BDEH	1	にぶい褐	50	SJ72 No.17
44	甕	(25.0)	11.2		ADH	1	橙	25	SJ72
45	甕	22.2	25.4		DEH	1	明赤褐	50	SJ72 No.2・15・16 右袖内
46	須口	長10.6cm 最大幅7.6cm 孔径(3.0)cm 重量259.54g				SJ72 鍛冶炉 No.8			
47	環	(12.0)	3.5		DEH	1	にぶい黄橙	10	SJ73
48	小型甕	(12.0)	4.0		ADEH	2	にぶい橙	20	SJ73

有段口縁環で明らかな混入である。40・41は土師器皿で、口縁部は大きく外反する。44・45は土師器甕である。45は胴部が長く伸び、口縁部が「く」の字状に強く折れる。住居の時期は8世紀初頭を中心とした年代と考えられる。

第73号住居跡 (第319図)

第73号住居跡は、D-17グリッドに位置する。重複する第74号住居跡を切り、第70・71・72号住居跡に切られていた。第74号住居跡は西壁が共有され、南壁も平行することから継続的な建て替えと考えられる。

平面形は方形と推定され、規模は長軸2.95m (現在長)、短軸2.27m (現在長)、深さ0.13mを測る。主軸方向はN-131°-Eを示す。

床面は概ね平坦で堅く踏み固められていた。カマドは検出されなかった。

住居に伴うピットはない。壁溝は巡っている。

出土遺物は土師器環と小型甕の小片が検出されたのみである(第321図47・48)。第321図47は口唇部内面に沈線が巡るもので比企型環と考えられる。赤彩痕は残らない。小片であるため口径は不安定である。時期は不明確であるが、比企型環の特徴から6世紀末葉～7世紀前半頃に位置付けておきたい。第72号住居跡出土の有段口縁環(39)も本住居跡に帰属するものかもしれない。

第74号住居跡 (第319図)

第74号住居跡は、D-17グリッドに位置し、重複する第72・73号住居跡に切られていた。第73号住居跡とは西壁を共有し南壁も平行するため、本住居跡から第73号住居跡に建て替えられたものと推定される。

平面形は方形で、規模は長軸4.36m、短軸0.82m (現在長)、深さ0.04mを測る。主軸方向はN-131°-Eを示す。

床面は平坦である。カマドは検出されなかった。ピットは壁にかかって2本検出されたが、遺構に伴うものではない。

出土遺物は検出されなかった。時期は不明であるが、第73号住居跡とはほぼ同時期と推定される。

第75号住居跡 (第323図)

第75号住居跡は、B-18・19、C-18グリッドに位置する。重複する第44・76・77号住居跡・第4・60号土壌に切られていた。一部壁溝が内側に巡ることから少なくとも一度は拡張に伴って替えが、また、柱の重複から数度の同位置建て替えがあったことが窺える。

平面形は整った正方形である。大型の住居跡で、規模は長軸6.94m、短軸6.70mを測る。深さは0.02mと非常に浅く、確認面ではほぼ床面が露出していた。

床面はほぼ平坦であるが、北側コーナー付近と南側コーナー部は重複する第44・76号住居跡によって床面の一部が削平されていた。主軸方向はN-137°-Wを示す。

床面はカマド前面から主柱穴内部は非常に堅く踏み固められていた。柱穴の外側ではやや軟弱であった。

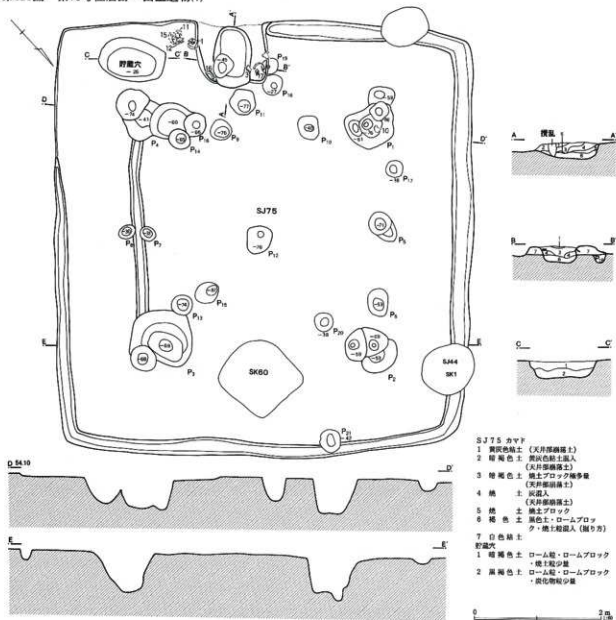
カマドは南西壁の中央からやや南寄りに設置される。燃焼部は壁内におさまリ、煙道部は削平されていた。底面は鍋底状に窪み、両側側壁上部は部分的に被熱していた。軸は白色粘土を積み上げて構築されていたが、上部はかなり流失していた。また、カマド両軸の先端部には土師器甕が各1個、倒立状態で埋設されていた。袖部の補強材(芯)として用いられたものと推定される。

ピットは21本検出された。Pit 1～4は規則的に配置され、住居に伴う4本主柱穴を構成するものと考えられる。各柱穴は2～4本重複しており、数回柱の建て替えを行ったものと推定される。また、Pit 5・7～10・11(?)は主柱穴を結ぶライン状に乗っており、梁を支える補助柱として機能した可能性もある。Pit 12は住居中心部に位置するが、上面は貼床されており、廃絶段階には柱穴として機能していなかったものと考えられる。

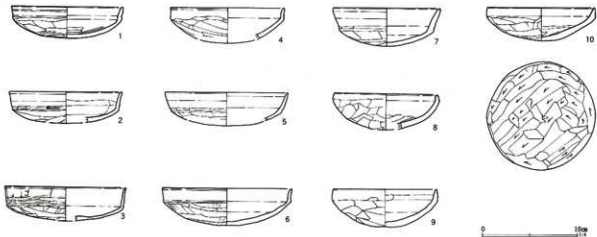
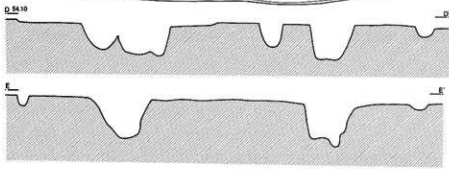
貯蔵穴はカマドに向かって左脇の南コーナー付近に位置する。楕円形プランで直径105cm、深さ26cmである。

壁溝は南コーナー部を除いて巡っていた。また、Pit 3とPit 4を結ぶ位置にも検出され、建て替え(拡張)があったことを示している。床面を除去して確認した

第323図 第75号住居跡・出土遺物(1)

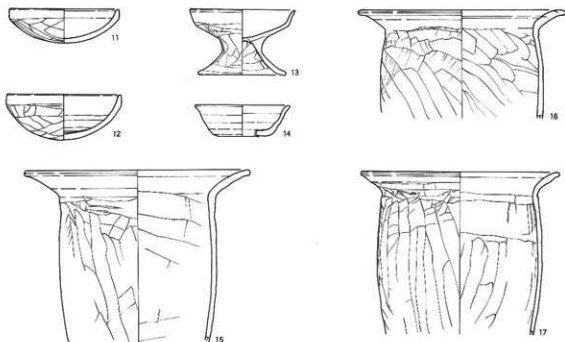


- SJ75 各P
- 1 黄褐色粘土 (天井部遺土)
 - 2 暗褐色土 黄褐色粘土混入 (天井部遺土)
 - 3 暗褐色土 焼土ブロック残少量 (天井部遺土)
 - 4 焼土 灰混入 (天井部遺土)
 - 5 焼土 焼土ブロック
 - 6 暗褐色土 ローム土・ロームブロック・焼土粒混入 (掘り方)
 - 7 白色粘土
- 貯蔵穴
- 1 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土粒少量
 - 2 黄褐色土 ローム粒・ロームブロック・炭粒混入少量



0 10cm

第324図 第75号住居跡出土遺物(2)



第149表 第75号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	11.6	3.8		BDEH	1	橙	90	No 4・11
2	環	(11.8)	3.2		ADEG	2	にぶい橙	30	カマド
3	環	12.8	3.5		DEH	1	橙	45	No 7 カマド袖
4	環	(12.0)	3.3		DEH	1	にぶい橙	20	カマド
5	環	(13.0)	2.9		EH	2	橙	30	カマド床下
6	環	(13.6)	3.9		DEH	1	橙	40	床下
7	環	(11.2)	4.0		DEH J	2	にぶい橙	25	床下
8	環	(10.9)	3.7		DEH	1	にぶい橙	30	
9	環	(10.8)	3.9		ADEH	2	にぶい赤褐	30	Pit 1
10	環	11.3	3.5		BDEH	1	にぶい黄橙	95	Pit 1 No 1
11	環	(11.5)	3.6		EH	2	にぶい橙	45	No 3 床直
12	環	11.9	4.8		DEH	1	橙	60	No 1
13	高環	(11.0)	6.9	(8.8)	ADEH	1	橙	45	カマド
14	小皿	(10.0)	3.3	(4.9)	ACDE	2	にぶい橙	15	ロクロ土師器
15	甕	(24.0)	18.1		DEH	1	にぶい橙	25	No 2
16	甕	(22.0)	11.4		BDH J	1	にぶい褐	5	No 6 カマド袖
17	甕	21.0	17.1		ADEH	1	にぶい橙	55	カマド袖

が他の部分では明瞭に検出できなかつたが、Pit 1の一部と Pit 6・13~16を拡張前の住居に対応する柱穴と見なすことも可能であろう。

出土遺物は土師器の環・甕・小型高環とロクロ土師器小皿がある(第323・324図)。

第323図1~7は土師器模倣環である。1はカマド脇の袖部にかかる位置、2~4はカマド内、5はカマ

ド掘り方から出土した。6・7は床面下の掘り方から出土したものである。口縁下端に沈線を巡らし稜を作り出すもの(1~3・5~7)と体部のケズリによって稜を作るもの(4)がある。8は北武蔵型環である。やや厚手で丸椀形態、口縁部は短く内屈する。9~12は深めの丸椀形態をとり、北武蔵型環に似るが、口縁部は三角形状に尖りや趣を異にする一群である。12

は口縁下端に弱い沈線が巡る。13は小型高環。土師器環に脚を付したものである。14はロクロ土師器小皿で重複する第44号住居跡に帰属するものとみて良からう。15-17は土師器甕である。16はカマド左袖、17はカマド右袖に埋設されたものである。いずれも長胴甕で、口縁部の屈曲が大きい。胴部は縦または斜めのヘラケズリ調整が施される。8の北武蔵型環が伴うか否か、また9-12の環の系譜が問題となるが、住居の建て替えも考慮して、取り敢えず住居の時期は7世紀前半-中葉頃と考えておく。

第76号住居跡 (第325図)

第76号住居跡は、B・C-18グリッドに位置する。重複する第75号住居跡を切り、第77号住居跡に切られていた。

平面形は正方形で、規模は長軸3.42m、短軸3.26m、深さ0.02mを測る。主軸方向はN-85°-Eを示す。

床面は凹凸があり、全体に堅く締まっていた。カマドは東壁の南に設置される。燃焼部は壁を切り込んでおり、底面は皿状に掘られていた。袖は白色粘土を用いて構築されていたが遺存状態は悪く、特に右袖部は第77号住居跡に壊されていた。

ピット他の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は土師器の環・鉢・甕がある(第325図1-5)。全て破片で、5の甕はカマド内から出土している。1は模倣環、2は北武蔵型環である。口縁部はやや内湾する。5の甕は胴部に丸味がある。時期は不明確であるが、甕からみて8世紀前半代と思われる。

第77号住居跡 (第325図)

第77号住居跡は、C-18グリッドに位置し、第75-76号住居跡を切って構築されていた。第78号住居跡との切り合いについては、調査時において不明確ながら本住居跡の方が新しいと捉えたが、おそらく誤認と思われる。第78号住居跡の方が新しいと判断した。

平面形は方形と推定され、規模は長軸3.00m、短軸1.55m(現在長)、深さ0.17mを測る。主軸方向はN-88°-Eを示す。

床面はやや凹凸をもち、全体に堅く締まっていた。

カマドは検出されなかった。

ピットは1本検出されたが、住居に伴うものではない。土壌は2基検出された。いずれも上面に貼床されており、住居に伴う床下土壌または掘り方と考えられる。

出土遺物は土師器の環と甕の小片が検出されている(第326図6-9)。第326図6・7は底部平底の土師器環と思われる。体部は無調整である。8は丸底風の土師器環。9は土師器甕、口縁部は弓状に外反する。6・7が本住居跡に伴う遺物で、8・9は混入であろう。住居の時期は9世紀代と考えられる。

第78号住居跡 (第325図)

第78号住居跡は、C-18・19グリッドに位置する。重複する第77号住居跡・第21号井戸跡を切り、第38号土壌にカマド上面を切られていた。

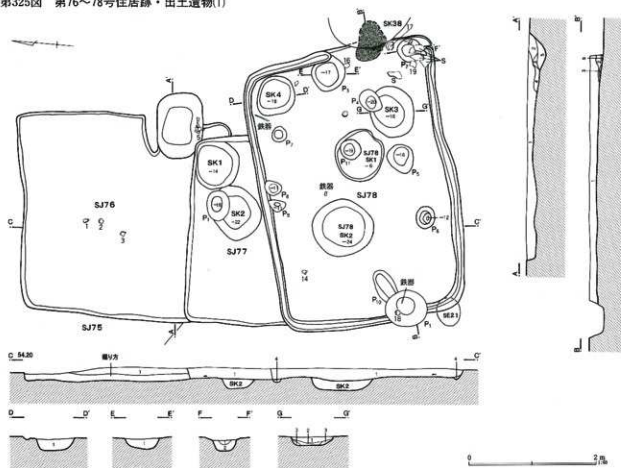
平面形は縦長の長方形で、規模は長軸4.43m、短軸3.14m、深さ0.12mを測る。主軸方向はN-75°-Eを示す。

床面はやや凹凸があり、全体に堅く踏み固められていた。カマドは東壁の中央から南に寄った位置に設けられていた。燃焼部は壁を切り込んでいるが、第38号土壌に削りされ、辛うじて底面の被熱層が残存したに留まる。

ピットは11本検出された。Pit 1は西壁の南寄り、カマドに正対する位置にある。調査時において壁ラインの外側に延びることから重複する土壌(SK47)と考えたが、埋土も近似しロクロ土師器高台碗が出土したことから、ここでは住居に伴うピット、カマド対向ピットと考えておく。Pit 2はカマド脇の南東コーナー部にある。深さ22cmの小ピットで、灰・炭化物が詰まっており、灰溜め状ピットと思われる。ピット上面には片岩系の板石が覆っていた。他のピットは住居に伴う可能性は低い。

土壌は4基検出された。1-3号土壌は床下土壌と考えられる。4号土壌は上面に床が張られておらず、あるいは住居に伴うものかもしれない。壁溝はカマドとPit 1を除き全周する。

第325図 第76～78号住居跡・出土遺物(1)



SJ76

- 1 暗褐色土 ローム粒・焼土粒・白色粒少量
- 2 暗褐色土 ローム粒・焼土粒多量(カマド)
- 3 白色粘土 焼土粒少量(カマド)
- 4 暗褐色土 焼土粒・焼土ブロック・炭化粒多量(カマド)
- 5 黒褐色土 ローム粒少量(カマド)

SJ77

- 1 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土粒・白色粒少量

SJ78

- 1 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土粒・白色粒多量(埋め戻しか?)
- 2 暗褐色土 ローム粒・焼土粒・焼土ブロック少量(カマド残がい)
- 3 黒色土 焼土粒少量(炭層)(カマド残がい)
- 4 暗褐色土

SJ78 SK3

- 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック主体・黒褐色土少量
- 2 黒褐色土 ローム粒・焼土粒少量
- 3 黒褐色土 ロームブロック

SJ78 ビット2

- 1 黒褐色土 灰・焼土粒・炭化粒多量
- 2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多量

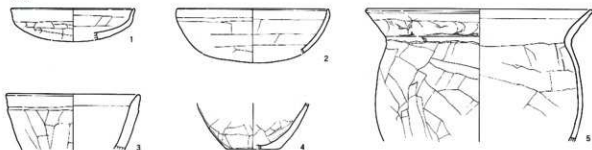
SJ78 ビット3

- 1 黒褐色土 ローム粒・焼土粒少量

SJ78 SK4

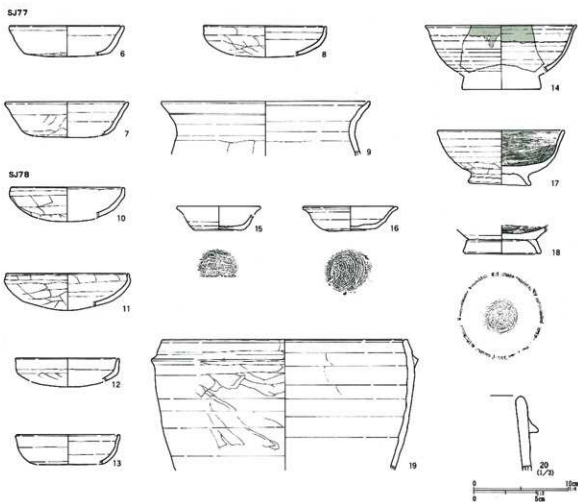
- 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多量・焼土粒少量(埋め戻し)

SJ76



0 10cm

第326図 第76～78号住居跡出土遺物(2)



出土遺物は土師器の環、ロクロ土師器小皿・高台碗、羽釜、鉄器がある(第326図10～20)。土師器環(10～13)は混入と考えられる。14は灰釉陶器高台碗である。深碗形態で、口縁部は小さく外反する。体部中位以下は回転ヘラケズリ調整される。灰釉は漬け掛けて、降灰がかかっている。胎土から東濃産と推定される。大原2号窯式か。15・16はロクロ土師器小皿。底部は回転糸切り離し。17・18はロクロ土師器高台碗。内面ヘラミガキと黒色処理が施されている。19・20は土師質の羽釜である。19はロクロ整形、鈎は低い。20は非ロクロ整形である。残存する胴部にはナデ調整でヘラケズリ痕は見えない。住居の時期は10世紀後葉～11世紀初頭頃と考えられる。

第79号住居跡(第327図)

第79号住居跡は、C・D-18グリッドに位置する。

重複する第37号土壇を切り、第80・82号住居跡に切られている。

平面形は長方形で、規模は長軸4.10m、短軸3.50m、深さ0.06mを測る。主軸方向はN-7°-Eを示す。

床面の大半は第80号住居跡によって削平されていた。残存部は概ね平坦である。カマドは検出されなかった。住居に伴うピットも検出されていない。

壁溝は西壁から南壁にかけて巡っていた。

出土遺物は土師器環が3点検出されたのみである(第327図1～3)。1は横置環、2も同類か。3は平底環である。いずれも小片で時期決定の資料に欠ける。重複住居との関係から8世紀前半以前となるのは間違いないく、3は混入と思われる。7世紀代の住居であろうか。

第150表 第76～78号住居跡出土物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(13.0)	3.3		ADEH J	2	橙	25	SJ76 Na.1
2	坏	(16.0)	4.7		DEH	2	にぶい橙	15	SJ76 Na.2
3	鉢	(16.0)	5.9		ADEH	1	にぶい橙	15	SJ76 Na.3
4	甕		4.9	(5.8)	ADEH	2	にぶい橙	35	SJ76 床下 底部木葉痕
5	甕	(24.0)	13.9		ABDEH	1	にぶい黄橙	40	SJ76 カマド No.1
6	坏	(12.0)	3.2		ADEH	2	橙	15	SJ77
7	坏	(13.0)	3.6		ADEH	2	橙	10	SJ77
8	坏	(12.9)	3.2		DEH	2	橙	15	SJ77
9	甕	(22.0)	5.7		DEH J	2	橙	10	SJ77
10	坏	(12.0)	3.2		DE	2	橙	35	SJ78 カマド
11	坏	(13.0)	3.5		ADE	2	にぶい橙	20	SJ78 カマド
12	坏	(11.0)	2.4		DEH	2	明赤褐	10	SJ78
13	坏	(11.0)	3.1		ADE	2	にぶい赤褐	10	SJ78
14	灰釉高台碗	(16.0)	4.9		E	1	灰白	10	SJ78 Na.1 灰釉漬け掛け 東濃産 大原2号窯式
15	小皿		1.6	5.0	ADE J	2	橙	50	SJ78 ロクロ土師器
16	小皿	10.0	2.5	4.2	ADEH	1	橙	80	SJ78 Na.4 ロクロ土師器
17	高台碗	13.4	5.7	6.3	BH	1	にぶい黄橙	80	SJ78 Na.5 内面黒色処理+ミガキロクロ土師器
18	高台碗		3.0	7.6	ADE	2	にぶい橙	85	SJ78 (SK47) Na.1 ロクロ土師器
19	羽釜	(26.0)	13.7		ABDEH	2	明赤褐	15	SJ78 Na.3 土師貫 ロクロ整形
20	羽釜		5.9		ADE J	2	明赤褐	10	SJ78 土師貫 非ロクロ整形

第80号住居跡 (第327図)

第80号住居跡は、C・D-18グリッドに位置する。第79・82号住居跡を切り、第81号住居跡に切られている。第6号掘立柱建物跡とも重複する。新旧関係は不明確であるが、本住居跡の方が新しい可能性がある。

平面形は長方形で、規模は長軸3.92m、短軸3.21m、深さ0.07mを測る。主軸方向はN-91°-Eを示す。

床面は凹凸が顕著である。カマドは第81号住居跡床面下から検出された。東壁(推定ライン)の中央から南寄りに位置する。上面は削平され、燃焼部掘り方が辛うじて残存するのみである。埋土には焼土粒子とローム粒子が多量に含まれていた。

ピットは1本北東コーナー部から検出されたが、住居に伴うものではない。その他の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は少なく、土師器坏(第327図4)・台付甕(5)、須恵器高台碗(第328図6)・鉢(7)が検出された。また、重複する第81号住居跡から検出された遺物のなかで、土師器坏(第328図10・11)、土師器甕(15・16)は本住居跡に帰属する可能性が高い。

第327図4は土師器坏である。平底で深身、体部上位

は無調整(指押さえ)、体部中位から底部はヘラケズリ調整されている。6は大振りの須恵器高台碗で、焼きは甘い。末野産。7の須恵器鉢は胴部平行叩き痕と当て具痕が僅かに残る。末野産である。住居の時期は9世紀後半である。

第81号住居跡 (第327図)

第81号住居跡は、C-18、D-18-19グリッドに位置する。第80・82号住居跡と重複し、本住居跡が最も新しい。

平面形は横長方形で、規模は長軸3.76m、短軸3.06m、深さ0.22mを測る。主軸方向はN-89°-Eを示す。

床面は凹凸が顕著で、全体に強く踏み固められていた。住居埋土はロームブロック混じりの暗褐色土で埋没しており、大きな土層変化はみられなかった。人為的に埋め戻された可能性が高いものと判断した。

カマドは東壁の南端に設置される。燃焼部から煙道部は壁を大きく切り込んで構築されていた。底面は概ね平坦で床面との段差はあまりない。埋土下層には焼土と灰層が堆積していた。灰層はカマド前面のピット内にも流れ込んでいた(Pit 2)。

ピットは2本カマド前面から検出された。いずれも

小ピットであるが、住居に伴うものと考えられる。

土壌は3基検出された。3号土壌としたものは南西コーナー部にあり、住居に伴うカマド対向ピットと考えて良からう。深さ49cm。1号土壌は掘り方か。2号土壌はカマド前面に位置し、上面は貼床されていた。床下土壌と考えられる。壁溝は西壁から北壁、東壁にかけて部分的に巡る。

出土遺物は土師器環・甕、ロクロ土師器高台椀・小皿、灰釉陶器碗、羽釜など検出された(第328図8~19)。

第328図8~11は土師器環である。いずれも混入である。8は注記の誤りか。12は灰釉陶器高台椀。高台部を欠くが、やや小振りの深碗形態である。体部から口縁部にかけて先細りし、体部のヘラケズリ調整はない。外面は体部下端の一部を除き施釉、内面は降灰を受け、不明瞭である。灰釉は漬け掛けと思われる。東濃産。大原2号または虎登山1号窯式か。13は小型のロクロ土師器高台椀。内外面ともにヘラミガキと黒色処理が施されている。14はロクロ土師器小皿である。底部回転糸切り。西壁際から出土した。15・16は「コ」の字状口縁甕で、混入。重複する第80号住居跡に帰属するものであろう。17は土師器甕で、口唇部に面をもつ。胴部は雑なナデ調整で仕上げている。18はカマド焚口部付近から出土した土師質の羽釜である。口縁部と胴部は直接接合しないか同一個体と思われる。ロクロ整形で、胴部下位をヘラケズリ調整している。住居の時期は10世紀後半代と推定される。

第82号住居跡(第327図)

第82号住居跡は、D-18グリッドに位置する。重複する第79・83号住居跡を切り、第80・81・84号住居跡に切られている。第6号掘立柱建物跡との関係は不明である。

平面形は長方形で、規模は長軸4.14m、短軸3.00m、深さ0.13mを測る。主軸方向はN-98°-Eを示す。

床面は概ね平坦である。カマドは東壁のほぼ中央に設置され、燃焼部は壁を切り込んでいる。底面の掘り込みは浅く、第5層上面が火床面と推定される。袖は白色粘土を使用しておらず、あまり明確ではなかった。

ピットは検出されなかった。土壌は1基、カマド前面から検出された。上面に貼床されており、住居に伴う床下土壌と考えられる。壁溝はカマドと南壁の一部を除き巡っていた。

出土遺物は土師器環・甕とロクロ土師器高台椀がある(第328図20~28)。22~24の環と27のロクロ土師器高台椀は混入である。27は第81号住居跡に帰属するものと思われる。

第328図20・21・25は北武蔵型の土師器環。扁平な器形で、底部は弱い丸底風となる。体部は無調整、底部はヘラケズリ調整される。21・25はカマド右側のコーナー部から出土した。床面よりも6~7cm浮いていた。25の環内面には「X」状の線刻が刻まれていた。26の環底部片にも同様の線刻がある。28は武蔵型甕。胴部の器壁は薄く削られている。住居の時期は8世紀中葉前後と考えられる。

第83号住居跡(第327図)

第83号住居跡は、D-18グリッドに位置する。重複する第82・84号住居跡に切られていた。

平面形は方形で、規模は長軸2.06m、短軸0.94m(現在長)、深さ0.08mを測る。小型の住居跡で、主軸方向はN-78°-Eを示す。

床面は概ね平坦で貼床されていた。カマドは検出されなかった。ピット・その他の付属施設は検出されなかった。

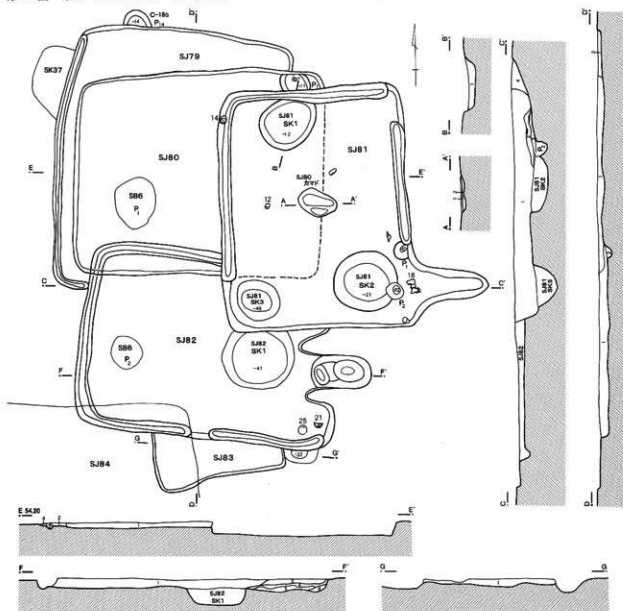
出土遺物は検出されておらず、第82号住居跡との関係から8世紀中葉以前という限定しかできない。

第84号住居跡(第329図)

第84号住居跡は、D-18グリッドに位置する。重複する第72・82・83号住居跡を切って構築されていた。第6号掘立柱建物跡 Pit 3は床面精査時には検出されなかったため、本住居跡の方が新しい可能性がある。未買収地にかかっていたために、当初住居跡の存在に気づかず、西半の床面を削平してしまった。また、東半部でも遺構確認段階で既に一部の床面が露出していた。

平面形は縦長の長方形で、規模は長軸5.00m、短軸

第327図 第79～83号住居跡・出土遺物(I)



SJ79

1 暗褐色土 焼土粒多量、ロームブロック少量

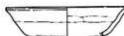
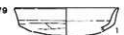
SJ80

- 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック多量、焼土、炭化物粒少量
- 暗褐色土 ロームブロック少量
- 暗褐色土 ロームブロック少量
- 暗褐色土 ロームブロック少量

SJ80 カマド

- 暗褐色土 ロームブロック(灰肌 覆土)
- 黒褐色土 ローム粒、焼土粒多量

SJ79



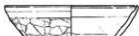
SJ81

1 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック、焼土粒、白色粒多量(埋め戻し)

- 暗褐色土 ローム粒、焼土粒、焼土ブロック、白色粒多量
- 黒色土 ローム粒少量(灰層)
- 暗褐色土 ローム粒、焼土粒多量
- 暗褐色土 ローム粒、焼土粒多量

SJ81 SK1

1 黄褐色土 ローム粒、ロームブロック主体、白色粒土ブロック、暗褐色土少量



SJ82

1 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック、焼土粒、白色粒少量

2 黄褐色土 ロームブロック

SJ82 カマド

- 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック、焼土粒多量
- 黒褐色土 ローム粒、ロームブロック上面に厚く敷いている
- 黒褐色土 ローム粒、ロームブロック多量
- 暗褐色土 ローム粒、焼土粒少量

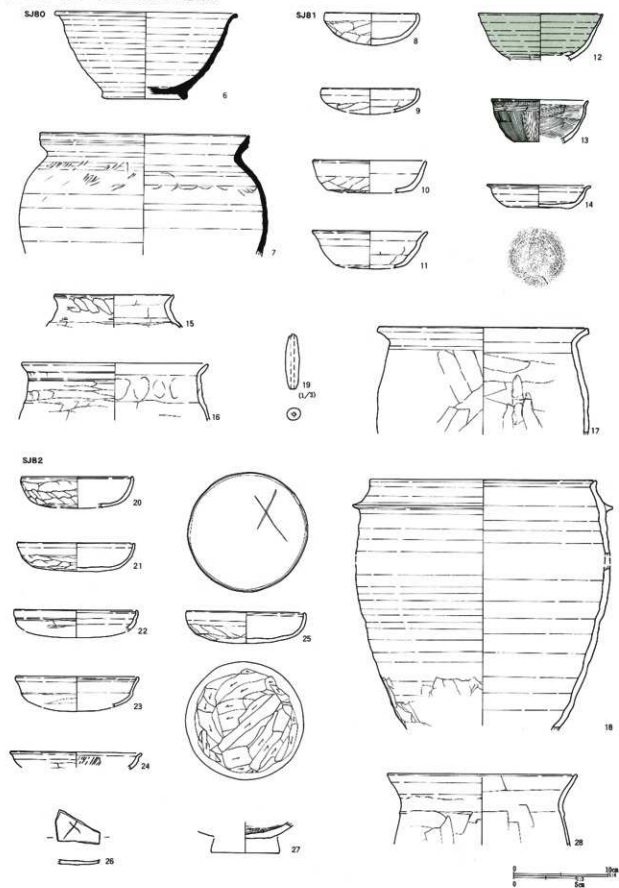
SJ83

1 黄褐色土 ロームブロック、ローム粒混入(張り方埋土)



大寄II区

第328図 第79~83号住居跡出土遺物(2)



第151表 第79～82号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(11.0)	2.5		ADE	2	にぶい褐	15	SJ79
2	坏	12.0	1.9		AD	2	橙	10	SJ79
3	坏	(13.0)	3.1		DE	2	にぶい橙	20	SJ79 体部無調整
4	坏	14.0	4.5	8.5	BDH	1	にぶい橙	50	SJ80 確認面 体部+底部ヘラケズリ
5	付付環		3.1	9.0	DEH	1	にぶい黄橙	85	SJ80 確認面
6	須恵高台椀	19.2	9.1	(8.0)	AHI	3	にぶい黄橙	30	SJ80 確認面 木野産
7	須恵鉢	22.0	12.7		BIJ	1	青灰	25	SJ80 確認面 木野産
8	坏	9.8	3.4		ADH	1	橙	80	SJ81 No.7 (注記違い)
9	坏	(10.2)	2.5		DG	1	にぶい褐	10	SJ81
10	坏	(12.0)	3.4	(9.0)	ADEJ	1	にぶい橙	15	SJ81 体部無調整 雲母状微粒子
11	坏	(12.2)	3.9		ADE	2	にぶい褐	10	SJ81 体部無調整
12	灰釉高台椀	(13.2)	5.0		EJ	1	灰白	10	SJ81No.6 東濃産 漬け掛けか 内面降灰
13	高台椀	(10.2)	4.5		CEG	1	黒褐	25	SJ81内外面ミガキ+黒色処理
14	小皿	10.8	2.4	6.6	ADEH	1	にぶい橙	80	SJ81 No.7
15	付付環	(12.6)	3.5		EG	1	にぶい褐	5	SJ81 SK 1
16	甕	(19.8)	6.0		ADH	1	明赤褐	25	SJ81
17	甕	(22.0)	11.2		AE	3	灰褐	5	SJ81
18	羽釜	(24.0)	27.0		BDEJ	1	にぶい橙	20	SJ81 カマド SK 2 No.2・3 ロクロ整形 土師質
19	土鍾	長4.3cm	最大径1.1cm	孔径0.2cm	重量4.59g	灰褐			SJ81
20	坏	11.8	3.2		DEH	2	にぶい橙	45	SJ82
21	坏	12.3	3.0		ADEH	2	橙	50	SJ82 No.2
22	坏	(13.0)	2.2		AEG	1	明赤褐	5	SJ82
23	坏	(13.0)	3.2		AEG	1	橙	5	SJ82
24	坏	(14.0)	2.1		ADEG	1	橙	50	SJ82 内面放射線文
25	坏	12.5	3.4		DH	1	橙	100	SJ82 No.1 内面「×」ヘラ描きあり
26	坏				AEG	1	にぶい黄橙	破片	SJ82 内面「×」線刻
27	高台椀		1.8	6.4	DEHJ	1	明赤褐	10	SJ82 高台剥落 ロクロ土師器
28	甕	(20.0)	7.5		ADEG	1	にぶい赤褐	10	SJ82 カマド

3.33m、深さ0.07mを測る。主軸方向はN-90°-Eを示す。

床面は平坦である。掘り方上に貼床され、カマド前面から住居中心部は比較的強く縮まっていたが、壁際は全体に軟弱であった。カマドは東壁の南寄りに設置される。燃焼部は壁を切り込んでおり、底面は皿状に窪む。掘り込みが浅いために遺存状態は悪い。第2層はロームブロックと焼土が多量に含まれ、掘り方の可能性がある。火床面は既に削平されているものか。

ピットは3本検出されたが、住居に伴う柱穴ではない。土壌は3基検出された。いずれも床下土壌または、

掘り方と思われる。壁溝は東半部で検出された。

出土遺物は少なく、図化可能なものは土師器環1点に留まる(第329図1)。

第329図1は土師器環である。推定口径12cm前後、残存高2.7cm。胎土に赤色粒子・角閃石・砂粒を含み、焼

成は普通。色調は橙色である。残存率は約15%。平底の土師器環と思われる、体部は無調整(指押さえ)である。時期的には9世紀代と思われる。

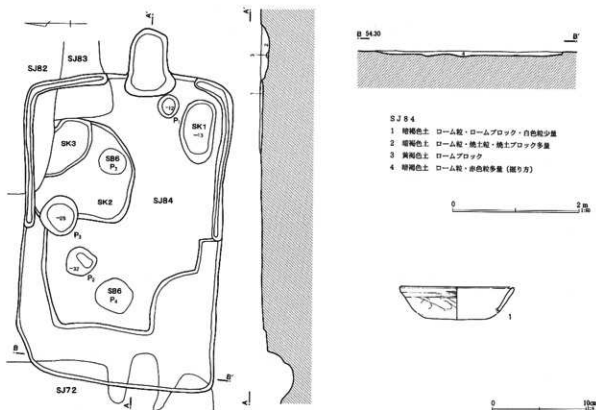
第85号住居跡(第330図)

第85号住居跡は、D-17グリッドに位置する。第1号柵列の東側に位置する。第2号柵列(SA2)の一部と思われるピット列が住居を切っている。第86号住居跡と重複し、第86号住居跡壁溝上に貼床が乗っていたことから本住居跡の方が新しいことが判明した。但し、時期的にはほぼ同時期と思われる、継続的に建て替えたものと考えられる。

平面形は長方形で、規模は長軸3.87m、短軸2.85m、深さ0.04mを測る。主軸方向はN-90°-Wを示す。

床面は細かい凹凸が顕著であるが、全体に強く踏み固められていた。カマドは西壁の南寄りに設置される。燃焼部は壁を切り込んでおり、焚口部の底面は被熱し

第329図 第84号住居跡・出土遺物



ていた。

ピットは2本検出された。Pit 1は南東コーナー部にあり、カマド対向ピットと考えられる。深さ43cm。第86号住居跡 Pit 2としたものは本住居内に位置するが、上面に貼床されており、本住居跡に直接伴うものではない。おそらく、重複する第86号住居跡カマド2に対応する住居(第86b号住居跡)のカマド対向ピットと考えるのが妥当であろう。Pit 2は本住居跡に帰属するものではなからう。

土壌は1基検出された。上面に貼床されており、住居に伴う床下土壌と考えられる。壁溝は南壁に一部途切れる箇所があるが、カマドを除き巡っていた。

出土遺物は少ない。カマド内からロクロ土師器高台碗と羽釜が検出されている(第330図1・2)。第330図1はロクロ土師器高台碗。内面は丁寧なヘラミガキ調整が施されている。黒色処理の有無は不明確。2は土師質の羽釜。器壁は厚く、非ロクロ整形。胴部は縦方向のヘラケズリ調整がなされている。住居の時期は10

世紀後半～11世紀初頭頃と考えられる。

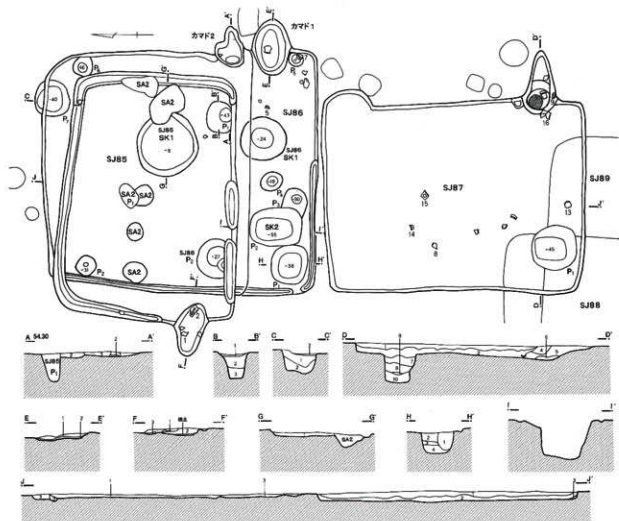
第86号住居跡(第330図)

第86号住居跡は、D-17グリッドに位置する。重複する第85号住居跡に切られていた。南側には第87号住居跡が接している。本住居跡東壁にはカマドが2基付設されており、西壁部にはピットが2本検出されている。1号カマドとPit 1が、2号カマドとPit 2がそれぞれ対応するものと思われ、2基のカマドは住居の建て替えに対応する可能性が高い。2号カマドをもつ段階を第86b号住居跡、1号カマドに対応する段階を第86a号住居跡とすると、第86b号住居跡から第86a号住居跡に南壁部分を拡張したものと推定される。

第86a号住居跡は、平面形が横長方形で、規模は長軸4.38m、短軸3.83m、深さ0.04mを測る。主軸方向はN-90°-Eを示す。

床面は第85号住居跡のそれとほぼ同一面にある。細かい凹凸が比較的顕著で、全体に堅く踏み固められていた。カマドは東壁の南端に設置される。燃焼部は壁

第330図 第85～87号住居跡・出土遺物(1)



- SJ85**
 1 暗褐色土 ローム殻・焼土粒少量
 2 暗褐色土 ローム殻 ロームブロック多量
 3 SJ86
 暗褐色土 ローム殻・ロームブロック・
 焼土粒少量
SJ85 カマド
 1 暗褐色土 灰・炭化物粒含む
 2 暗褐色土 焼土粒多量
 3 暗褐色土 ローム殻 (SJ85住居跡)
SJ85 竪柱
 1 暗褐色土 ロームブロック混入

- SJ85 ビット1**
 1 暗褐色土 ローム粒含む
 2 暗褐色土 黒色土ブロック混入
 3 黄褐色土 粘り床面様い
SJ86 カマド1
 1 暗褐色土 焼土粒・灰多量 (灰層)
SJ86 カマド2
 1 赤褐色土 焼土殻・焼土ブロック主体
 2 暗褐色土 ローム殻・ロームブロック主体
SJ86 ビット1
 1 黒色土 ローム粒少量、焼土粒少量

- 2 暗褐色土 ローム粒少量
 3 暗褐色土 ローム
 4 暗褐色土 ロームブロック含む
SJ86 ビット7
 1 黒色土 黒色土・ロームブロック混入層、
 灰層破くしまる
 2 黒色土
 3 赤色土 ロームブロック混入
SJ87
 1 暗褐色土 ローム殻・ロームブロック多量
 2 暗褐色土 ローム殻・焼土粒少量
 3 黄褐色土

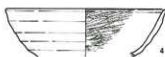
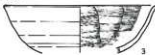
- SJ87 カマド**
 4 暗褐色土 ローム殻・焼土粒少量
 5 暗褐色土 ロームブロック・焼土ブ
 ロック・白色粘土多量
 6 褐色灰層 焼土粒少量
SJ87 ビット1
 7 暗褐色土 ローム殻・赤色粒多量
 8 暗褐色土 ローム殻・赤色粒少量
 9 黄褐色土
 10 暗褐色土 ロームブロック・ローム殻・
 赤色粒少量

0 2m

SJ85

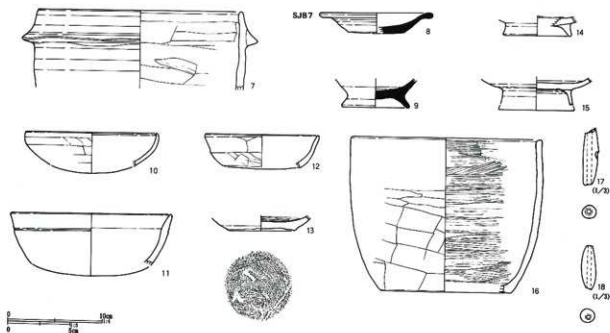
2
(1,2)

SJ86



0 10cm

第331図 第85～87号住居跡出土遺物(2)



第152表 第85～87号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高台碗	(16.0)	5.1		BDE	2	橙	20	SJ85 カマド No.4 ロクロ土師器 内面ミガキ
2	羽釜		6.8		ADEHJ	2	赤	10	SJ85 カマド No.1 土師質 赤ロクロ
3	高台碗	(16.0)	5		ADEH	2	にぶい橙	20	SJ86 Pit 1 ロクロ土師器内面ミガキ
4	高台碗	(16.8)	5		ADE	2	にぶい橙	10	SJ86 Pit 1 ロクロ土師器 内面ミガキ
5	高台碗		1.7	(8.0)	ABE	1	にぶい赤褐	40	SJ86 No.6 ロクロ土師器
6	砥石	長(4.9)cm	最大幅4.0cm	厚さ3.7cm			重量94.28g		SJ86 Pit 2
7	羽釜	(21.6)	8.3		BDHJ	1	明赤褐	25	SJ86 No.1 土師質
8	須恵皿	(12.0)	2.1	(6.0)	AEIJ	2	灰	20	SJ87 No.3 末野産
9	須恵高台碗		3.0	(7.5)	BEI	2	橙	35	SJ87 No.3 末野産 カマド No.2 末野産
10	碗	(14.0)	3.5		DEH	2	にぶい赤褐	10	SJ87
11	碗	(17.0)	5.3		ABDEH	3	にぶい橙	10	SJ87 外面風化 調整不明
12	碗	(12.0)	3.4	(8.2)	DEH	3	にぶい橙	10	SJ87
13	碗		1.6	7.4	BDEHI	1	灰褐	80	SJ87 No.7 ロクロ土師器 内黒ミガキ
14	高台碗		2.1	(7.0)	BEHJ	2	褐	30	SJ87 No.2 ロクロ土師器 内黒ミガキ
15	高台碗		2.9	(7.6)	ADE	2	にぶい黄橙	80	SJ87 No.1 ロクロ土師器
16	鉢	(20.1)	16.1	(14.0)	ABEHJ	1	橙	20	SJ87 カマド No.1 内面ミガキ
17	土鏝	長(4.5)cm	最大径1.11cm	孔径0.35cm			重量4.65g		にぶい黄橙 SJ87
18	土鏝	長3.45cm	最大径1.11cm	孔径0.25cm			重量3.94g		にぶい黄橙 SJ87

を切り込んで構築され、底面は浅い皿状に掘り込まれていた。袖は検出されなかった。

ピットは7本検出された。Pit 1は南西コーナー部にあり、住居に伴うカマド対向ピットと考えられる。深さ38cm。Pit 5はカマド脇に位置し、内部には焼土・灰・炭化物混じりの黒色土が詰まっていた。いわゆる灰溜め状ピットと思われる。他のピットは直接伴うものではなからう。

土壌は2基検出された。いずれも上面に貼床が施され、床下土壌か。

第86号住居跡は、南壁部が確定できない。おそらく2号カマドとPit 2を結ぶラインと推定される。平面形は方形で、推定規模は長軸3.83m、短軸3.30m(推定)、深さ0.04mを測る。主軸方向はN-90°-Eを示す。

カマドは東壁の南端に設置される。燃焼部は壁を切

り込んで構築されていた。遺存状態は悪く詳細は不明である。

Pit 2は西壁際にあり、上面は貼床され、第85号住居跡壁溝が乗っていた。深さ27cm。位置関係から本住居跡に伴うカマド対向ピットと推定される。

第86号住居跡から出土した遺物は少なく、ロクロ土師器高台椀と羽釜、砥石がある(第330図3～6・第331図7)。3・4のロクロ土師器高台椀はPit 1から出土した。3は内面ヘラミガキ、4はヘラミガキと黒色処理が施されている。5は内面にヘラミガキが施されない。7はPit 5上面から出土した土師質の羽釜である。非ロクロ整形。銕は高くしっかりした作りである。住居の時期は10世紀後半～11世紀初頭頃であろう。

第87号住居跡(第330図)

第87号住居跡は、D・E-17グリッドに位置する。第86号住居跡の南側にはほぼ西壁を揃えて隣接する。南壁部は第89号住居跡を切っていた。第88号住居跡重複部は、調査当初第89号住居跡の一部と誤認したため第87号住居跡が漸しいと捉えたが、切り合いは不明とした方が良いかもしれない。

平面形は横長方形で東壁部北端に半円形の張り出し部をもつ。規模は長軸4.18m、短軸3.06m、深さ0.13mを測る。主軸方向はN-90°-Eを示す。

床面はやや凹凸があり、全体に堅く踏み固められていた。カマドは東壁の南端に設置される。燃焼部は壁を切り込んでおり、焚口部付近の底面は弱く被熱していた。

ピットは1本南西コーナーにある。隅丸方形プランで深さ45cm。カマド対向ピットと考えられる。

出土遺物は土師器環、ロクロ土師器椀・高台椀、鉢、須恵器皿・高台椀、土錘がある(第331図8～18)。須恵器皿(8)、須恵器高台椀(9)、土師器環(10～12)は混入の可能性が高い。第331図13は無台の椀か。底部糸切りで、高台を付した痕跡はない。ロクロ土師器で、内面ヘラミガキと黒色処理が施されている。14・15はロクロ土師器高台椀。内面調整は13と同様である。16は鉢か。胴部外面上位は剥離している。下半はヘラケ

ズリ、内面は丁寧なヘラミガキ調整が施されている。カマド前面出土。住居の時期は10世紀前半と推定される。

第88号住居跡(第332図)

第88号住居跡は、E-17グリッドに位置する。重複する第89～93号住居跡を切っていた。第87号住居跡との新旧関係は不明確である。

平面形は非常に横長の長方形で、規模は長軸5.18m、短軸2.37m、深さ0.16mを測る。主軸方向はN-96°-Eを示す。

床面は南壁側が深く、北壁側に行くに従って浅くなっていた。全体に堅く締まっており、特にカマド前面は非常に堅く踏み固められていた。

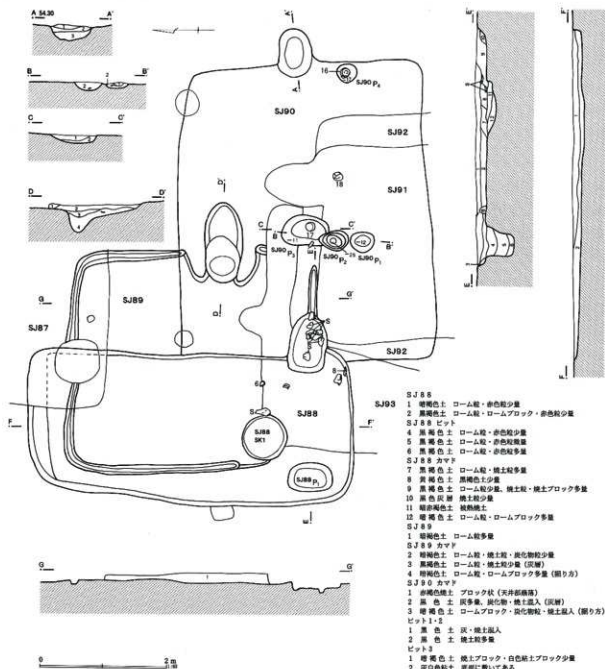
カマドは東壁の南端に設置される。燃焼部は壁を切り込んで構築され、細長く伸びる煙道部に続く。燃焼部底面は皿状に掘り込まれているが、これは掘り方面(第12層)で、火床面は床面とほぼ同一レベルで続く。火床面は被熱層が形成されていた(第11層)。燃焼部から煙道部にかけての側壁は強く被熱していた。燃焼部内には礫が数点散乱していた。カマドの補強材として使用されたものか。

ピットは1本南西コーナー部から検出された。深さ48cm。カマド対向ピットと考えられる。

土壌は1基検出された。円形プランで上面に貼床されていた。住居に伴う床下土壌と考えられる。

出土遺物は土師器の環、ロクロ土師器の高台椀・小皿、須恵器コップ形土器、羽釜がある(第333図1～11)。土師器環(1～4)と、須恵器コップ形土器(9)は混入である。コップ形土器は1号土壌出土の破片と、第91・93号住居跡出土の破片が接合しており、いずれかの住居に帰属するものであろう。5・6はロクロ土師器高台椀。5は風化が激しく、黒色処理の有無は不明。6は内面黒色処理とヘラミガキが施されている。7・8はロクロ土師器小皿である。底部は回転ヘラ切りされたままで、器形の歪みが激しい。ほぼ同巧である。10・11は土師質羽釜。いずれも非ロクロ整形で、胴部は縦方向のヘラケズリ調整が施されている。住居

第332図 第88～90号住居跡



の時期は10世紀後半～11世紀初頭頃と考えられる。

第89号住居跡 (第332図)

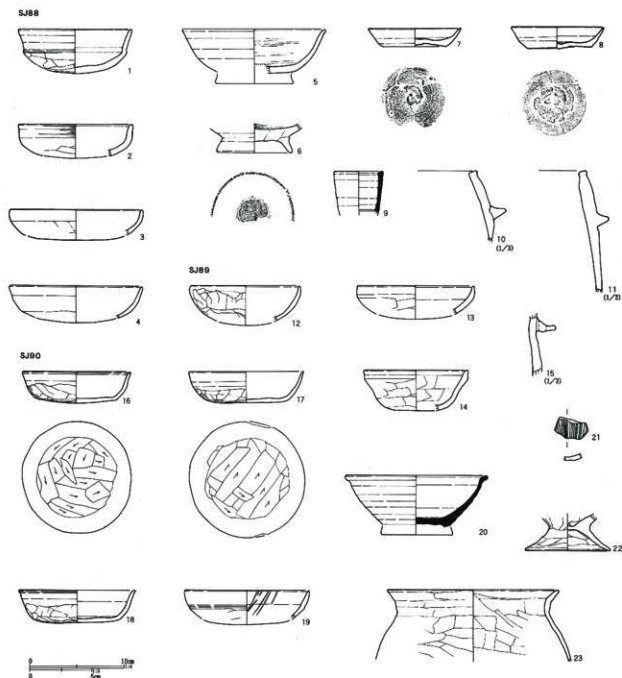
第89号住居跡は、E-17グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第87・88・90号住居跡に上面を、第93号住居跡に南壁部を削平されていた。

平面形は方形と推定され、規模は長軸3.56m、短軸3.23m (現在長)、深さ0.02mを測る。主軸方向はN-91°-Eを示す。

床面は概ね平坦である。カマド前面から住居中央部は比較的強く踏み固められていたが、壁際はやや軟弱であった。

カマドは東壁に設置され、壁を切り込んで構築されていた。焚口部底面は深く掘り込まれていたが、上面を埋め戻し、掘り方を形成していた(第4層)。第3層が灰層で、第4層上面が火床面となる。軸は白色粘土混じりの褐色土で作られるが、あまり明確なものでは

第333図 第88～90号住居跡出土遺物



なかった。

ピットは検出されなかった。塹溝はカマドを除き概ね巡っていた。

出土遺物は少なく、土師器環と羽釜片がある(第333図12～15)。12・13の土師器環は口縁部が短く内湾または直立する丸碗タイプの北武蔵型環である。14は平底環で、体部は無調整である。混入と思われる。15の羽釜片も混入である。土師質、非ロクロ整形で、鈿に上

下に貫通する孔(直径5mm程)が、1.2cmの間隔を置いて2箇所穿たれている。本来第87号住居跡または第88号住居跡に帰属するものであろう。住居の時期は8世紀初頭前後と考えられる。

第90号住居跡(第332図)

第90号住居跡は、E-17グリッドに位置する。遺構の遺存状態は極めて悪く、確認段階で床面の大半は削平されていた。形態・規模は不明確な点がある。第89

第153表 第88～90号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.0)	4.6		DEH	1	にぶい褐	30	SJ88
2	坏	(12.0)	3.3		AEH	2	にぶい褐	10	SJ88 内黒
3	坏	(14.0)	2.6		DEH	2	明赤褐	10	SJ88
4	坏	(14.0)	3.3		DEHJ	3	にぶい橙	10	SJ88
5	高台碗	(15.0)	4.6	8.0	AH	1	にぶい黄橙	30	SJ88 ロクロ土師器 内面ミガキ
6	高台碗		3.1	7.8	BDEHJ	1	にぶい橙	50	SJ88 Na2 ロクロ土師器 内黒 内面ミガキ
7	小皿	(9.8)	1.9	6.7	DEH	1	にぶい橙	60	SJ88 SJ90 確認面 ロクロ土師 底部ヘラ切り
8	小皿	9.9	2.3	6.8	DEH	2	にぶい橙	95	SJ88 Na5 ロクロ土師器 歪む 底部ヘラ切り
9	須恵コップ形	5.2	4.6		BEF	1	灰	40	SJ88 SK 1 南比全産
10	羽釜		5.5		BDEHJ	1	明赤褐	5	SJ88 非ロクロ整形 土師質
11	羽釜		9.5		BDEHJ	1	橙	5	SJ88 非ロクロ整形 土師質
12	坏	(11.4)	3.8		ADE	2	にぶい赤褐	25	SJ89
13	坏	(12.2)	3.0		ADEI	2	にぶい橙	10	SJ89 床下
14	坏	(10.9)	4.2	(6.6)	AEGJ	1	にぶい黄橙	15	SJ89
15	羽釜		5.0		DEG	1	にぶい黄橙	5	SJ89 床下 鏝に2ヶ所穿孔
16	坏	11.4	3.4	8.3	ADEH	1	橙	100	SJ90 Pit 4 内
17	坏	12.2	3.2	8.5	ABCDE	1	橙	100	SJ90 Pit 3 内
18	坏	12.4	3.4	9.2	DEH	1	にぶい赤褐	95	SJ90 床面
19	坏	(13.1)	3.0		DG	1	にぶい赤褐	10	SJ90 確認面 内面暗文
20	須恵高台碗	(15.0)	5.4		AHEI	3	褐灰	40	SJ90 Pit 2 周辺確認面 未野産
21	坏				ACE	1	橙	破片	SJ90 確認面 内面放射暗文
22	台付甕		3.9	9.0	ABD	1	橙	95	SJ90 確認面
23	甕	(18.0)	7.5		ADEHI	1	橙	5	SJ90 Pit 周辺確認面

号住居跡・第91～93号住居跡を切り、第88号住居跡に切られていた。

平面形は長方形と推定され、規模は長軸4.69m(推定)、短軸4.05m(推定)を測る。主軸方向はN-87°-Eを示す。

床面は住居中央付近に部分的に検出されたのみである。カマドは東壁の中央に設置される。遺存状態は悪く、灰層と掘り方が辛うじて残存していた。

ピットは4本検出された。いずれも柱穴とはならない。Pit 3は白色粘土を底面に敷いており、土師器坏が伏せた状態で出土した。また、カマド脇のPit 4内からは完形の土師器坏が正位の状態で検出された。

出土遺物は土師器坏・甕・台付甕、須恵器高台碗がある(第333図16～23)。第333図16～18は平底の土師器坏。16はPit 4、17はPit 3、18は床面から出土した。体部は無調整(指押さえ)、底部はヘラケズリ調整である。20は須恵器高台碗。底部を欠き、内面には重ね焼き痕を留める。焼きは甘い。未野産である。23は「コ」の字状口縁甕。頸部は短く、やや外傾する。住

居の時期は土師器坏から9世紀代であることは間違いない。20の須恵器高台碗が伴うならば、9世紀後半に降る可能性もある。9世紀前半～中葉と考えておく。

第91号住居跡 (第334図)

第91号住居跡は、E・F-17グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第92～94号住居跡を切り、第88・90号住居跡に切られていた。

平面形は正方形で、規模は長軸3.53m、短軸3.24m、深さ0.15mを測る。主軸方向はN-1°-Wを示す。

床面は平坦である。住居中央部とカマド前面は比較的堅く踏み固められており、壁際、特に北壁際がやや軟弱であった。

カマドは2基検出された。1号カマドは東壁の南端に設置される。主軸方向はN-95.5°-Eを示す。燃焼部は壁を切り込んで掘り込まれている。第3層が灰層、第4層は掘り方埋土である。袖部は白色粘土混じりの褐色土が残るが、遺存状態はあまり良くない。

2号カマドは北壁の東寄りに設置されていた。袖は遺存せず、埋土の状況から埋め戻された可能性が認め

られた(第1~3層)。これらのことから、2基のカマドは同時併存したのではなく、2号カマドから1号カマドに付け替えられたものと推定される。

ピットは検出されなかった。壁溝はほぼ全周する。

出土遺物は土師器環・皿・甕・鉢、須恵器蓋・環、土唾がある(第335図1~20)。第335図1~7・9は北武蔵型環である。口縁部が内湾気味に直立し、扁平な丸底風の形態が主体となる。やや丸底の強い1・6は2号カマド、扁平化の進んだ2・4は1号カマドから出土した。8は平底風の環で、体部は無調整。10・11は平底暗文環の系譜にある。10は扁平な平底風となり、内面に放射暗文が施される。体部は無調整。11は大振りて、深身のタイプである。体部と底部はヘラケズリで仕上げる。内面に放射暗文が施される。12の皿は第90号住居跡に帰属するものか。混入である。16の環は体部と底部を深く削り込み、平底風に仕上げる。厚手。1号カマド出土。

13は須恵器環。推定口径15cm、底径9cm前後、底部は平底で、全面回転ヘラケズリ調整される。内外面に火傷が残る。南比企産である。2号カマド前面から出土した。14・15は須恵器蓋。いずれも低平な器形で、かえりは付かない。14はやや小さいリング状のつまみが付く。素地は精良で、黄色みを帯びた灰白色に焼き上がる。秋間産と思われる。15はつまみを欠く。胎土は粗く暗青灰色に焼き上がる。末野産である。17の土師器甕は口縁部が緩やかに外反する。胴部上半は斜めケズリ。胴部の張りは弱く長胴形態となる。1号カマド出土。住居の時期は8世紀前半、その中でも後半に位置付けられよう。

第92号住居跡(第334図)

第92号住居跡は、E・F-17グリッドに位置する。重複する第93号住居跡を切り、第88・90・91号住居跡に切られており、遺構の遺存状態は極めて悪い。

平面形は正方形で、規模は長軸3.48m、短軸3.38m、深さ0.11mを測る。主軸方向はN-97°Eを示す。

残存する床面は平坦である。カマドは東壁の南寄り

に設置される。上面を第91号住居跡カマドによって壊

されており、掘り方が検出されたのみである。詳細は不明とせざるを得ない。

ピットは1本検出されたが、柱穴とはならない。壁溝はカマド周囲を除き全周する。

出土遺物は土師器環と甕、壺がある(第335図21~30)。小片が多く、また重複する第93号住居跡との分離ができない。第335図21は比企型環で混入。22・23はPit 1から出土したもので、本住居跡に伴う遺物と考えてよいであろう。口縁部は直立し、丸腕形態の北武蔵型環である。27・28も同類である。26は扁平化しており、第91号住居跡に帰属するものか。25の暗文環も第91号住居跡に帰属する可能性がある。29の甕は口縁部が「コ」の字状を呈し、第90号住居跡に伴うものと推定される。住居の時期は、22・23の土師器環から8世紀前半に位置づけられる。第91号住居跡との関係から8世紀1/4期中心となろう。

第93号住居跡(第334図)

第93号住居跡は、E-17グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第89号住居跡を切り、第88・90~92号住居跡に切られていた。

平面形は正方形で、規模は長軸3.78m、短軸3.66m、深さ0.15mを測る。主軸方向はN-3°Eを示す。

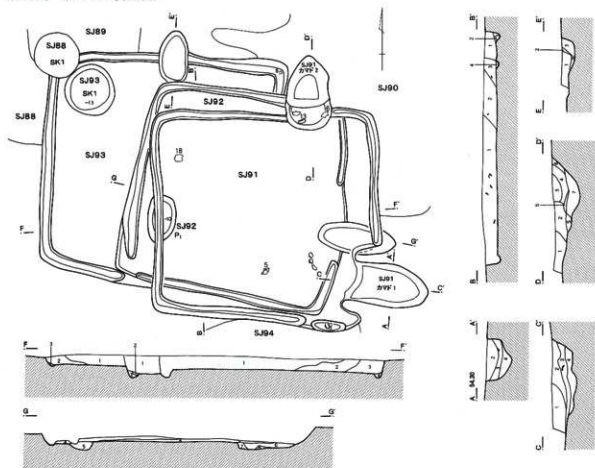
床面は平坦で、残存する部分は比較的堅く締まっていた。住居埋土にはロームブロックが多量に含まれ、人為的に埋め戻された可能性が高い。

カマドは北壁のほぼ中央に設置される。燃焼部は壁を切り込んで構築される。埋土は埋め戻し土が覆い、袖部は全く残存していなかった。廃絶時に取り払われたのかもしれない。

土壌は北西コーナー部に1基検出された。直径80cmの円形プランである。上面に貼床は確認されなかった。本来第88号住居跡に伴う床下土壌とみた方が良いかもしれない。壁溝は残存部は全周する。

出土遺物は第92号住居跡と混在しており、分離できない(第335図21~30)。土師器環・甕・壺がある。遺物の説明は第92号住居跡を参照。おそらく時間的には非常に近接した段階と思われる。

第334図 第91～93号住居跡



SJ91

- 1 暗褐色土 ローム粒・ローム小ブロック多量（埋め戻し土）
- 2 暗褐色土 ローム大ブロック多量（埋め戻し土）
- 3 黒褐色土 ローム少量（一次埋戻土）
- 4 黒褐色土

SJ91 カマド1

- 1 暗褐色土 ロームブロックやや多い、ローム粒多量
- 2 暗褐色土 灰色粘土ブロック少量、粘土ブロックやや多い（天井部崩落土）
- 3 黒色土 灰・粘土多量（灰層）
- 4 暗褐色土 ロームブロック混入（掘り方）

SJ91 カマド2

- 1 暗褐色土 ロームブロック多量（埋め戻し土）
- 2 暗褐色土 ローム少量、粘土混入（埋め戻し土）
- 3 暗褐色土 ロームブロック多量（埋め戻し土）
- 4 暗褐色土 粘土・黄灰色粘土ブロック混入（天井部崩落土）
- 5 黒色土 灰・粘土・炭化物粒混入（灰層）
- 6 褐色土 粘土・粘土ブロック混入
- 7 褐色土 白色粘土ブロック・ロームブロック・粘土混入（掘り方）

SJ92

- 1 暗褐色土 ロームブロック多量（埋め戻し）
- 2 暗褐色土 粘土粒多量
- 3 暗褐色土 ローム粒やや多い
- 4 暗褐色土 炭化物粒・ローム粒やや多い
- 5 暗褐色土 ローム粒写りに含む（床下ピット）
- 6 黒色土 粘土・ローム粒・灰含む（カマド掘り方の一部）
- 7 黒色土 ロームブロック多量（カマド掘り方の一部）
- 8 黒色土 ロームブロック少量（カマド掘り方の一部）

SJ93

- 1 暗褐色土 ロームブロック多量
 - 2 暗褐色土 粘土粒やや多い、ローム粒少量
 - 3 黒色土 ローム粒多量
- SJ93 カマド
- 1 暗褐色土 粘土粒・ローム粒・炭化物粒混入
 - 2 黄褐色土 ローム主体、黒色土混入
 - 3 黒褐色土 ローム粒・粘土粒少量

住居の時期は、重複する第89号住居跡、91・92号住居跡との関係から、8世紀初頭～前半に位置づけられるのは間違いない。寧ろ、8世紀初頭から前半（凡そ2/4期前半）までの一定時間幅の中で、89→93→92→91号住居跡の順に順次建て替えられたものと理解した方が実体に即しているものと考えられる。

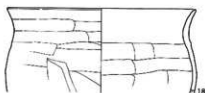
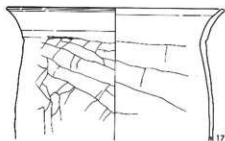
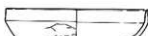
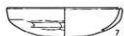
第94号住居跡（第336図）

第94号住居跡は、F-17グリッドに位置する。重複する第91・95・96号住居跡に切られていた。

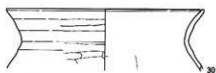
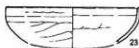
平面形は正方形で、規模は長軸3.83m、短軸3.40m、深さ0.25mを測る。主軸方向はN-74°-Eを示す。床面は平坦で全体に堅く踏み固められていた。北半

第335図 第91～93号住居跡出土遺物

SJ91



SJ92 - SJ93



第154表 第91～93号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(11.8)	3.5		DH	1	にぶい褐	30	SJ91 No 6
2	環	(13.0)	3.0		ABDH	1	にぶい橙	50	SJ91 1号カマド
3	環	(13.0)	2.8		AEH	1	橙	25	SJ91
4	環	(13.0)	3.1		ADEH	2	橙	20	SJ91 1号カマド
5	環	(14.4)	3.3		DEH	2	にぶい褐	30	SJ91 No 2
6	環	14.4	3.7		ABDH	1	橙	40	SJ91 No 4 床下
7	環	(12.0)	2.5		ADEH	2	橙	15	SJ91 覆土
8	環	(14.0)	3.8		ADEH	2	橙	10	SJ91
9	環	(13.0)	4.5		ADEH	1	明赤褐	30	SJ91 覆土
10	環	(12.0)	2.8		ADE	1	橙	15	SJ91 カマド 内面放射暗文
11	環	(16.0)	4.1		DEH	2	橙	15	SJ91 内面放射暗文
12	皿	(13.4)	1.7		BDE	2	灰黄褐	25	SJ91 覆土
13	須恵蓋	15.0	3.5	(9.0)	BEFH	1	灰	30	SJ91 No 5 南比企産
14	須恵蓋	14.0	2.6		BEH	1	灰白	70	SJ91 2号カマド 覆土 秋田産か
15	須恵蓋	15.8	1.7		BEIJ	1	灰	40	SJ91 2号カマド 末野産
16	環	(10.5)	3.0	4.9	DEH	1	明赤褐	50	SJ91 1号カマド
17	甕	(23.2)	13.8		DEH	2	にぶい褐	20	SJ91 1号カマド
18	甕	(20.0)	8.8		ADEH	2	橙	15	SJ91 No 1
19	鉢	(22.0)	7.2		ADEH	2	橙	15	SJ91 覆土
20	土鉢	長(3.0)cm 最大径1.5cm 孔径0.3cm 重量5.36g 橙 SJ91							
21	環	(12.0)	2.6		DE	2	明赤褐	10	SJ92・93 比企型環
22	環	(11.8)	4.0		ADEG	1	にぶい橙	20	SJ92・93 床下 Pit 1
23	環	(14.0)	3.8		ADEG	1	橙	5	SJ92・93 Pit 1
24	環	(13.0)	2.8		ABE	2	黒	10	SJ92・93 内外面黒色処理
25	環	(14.0)	2.3		ADE	1	橙	15	SJ92・93 内面放射暗文
26	環	(13.0)	3.0		ADEH	2	橙	15	SJ92・93
27	環	(14.0)	2.8		ADE	2	明赤褐	5	SJ92・93
28	環	(15.0)	3.1		ADE	2	にぶい赤褐	15	SJ92・93
29	甕	(19.2)	5.1		CDEG	1	灰黄褐	5	SJ92・93
30	甕	(21.0)	5.4		ADE	2	にぶい橙	10	SJ92・93

部を中心に硬化した貼床面が2枚認められた。住居埋土にはロームブロックが多量に含まれ、埋め戻された可能性がある。カマドは東壁に設置される。燃焼部は壁を切り込み、底面は皿状に窪む。第4層上面が火床面か。袖は検出されなかった。

ピットは検出されなかった。床面を除去して柱穴の有無を確認したものの、支柱穴となるようなものは検出されなかった。壁溝は北西コーナー部を除き巡っていた。

出土遺物は土師器環・皿・甕・壺、須恵器蓋がある(第336・337図1～15)。第336図1～3の土師器環と10・11の甕はカマド内から出土した。

第336図1～8は土師器環である。1～5は北武蔵型環。口縁部は短く直立し、底部は丸底形態である。

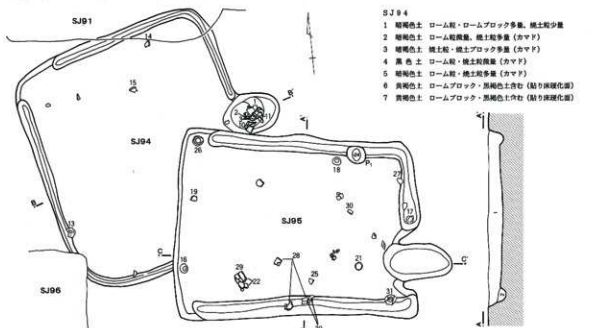
5は口縁部が長くやや扁平な器形となろう。6は暗文環で底部丸底形態となろう。7・8は模倣環で混入と思われる。9は皿である。10・11は同一個体かもしれない。口縁部が斜め上方に立ち上がり、胴部は長い。

13～15は須恵器蓋。13は扁平な擬宝珠状つまみが付く。おそらくかえり蓋と思われる。末野産。14はつまみを欠く。口縁端部に低いかえりが付く。末野産である。15もかえり蓋で、かえりは口縁端部よりも突出する。形態・胎土から群馬産、藤岡窯跡群産の可能性があらうか。住居の時期は8世紀前半(1/4期)と考えられる。

第95号住居跡(第336図)

第95号住居跡は、F-17・18グリッドに位置し、第94号住居跡を切って構築されていた。

第336図 第94・95号住居跡・出土遺物(I)



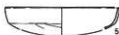
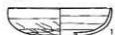
- SJ94
- 1 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量、焼土粒少量
 - 2 暗褐色土 ローム粒微量、焼土粒多量 (カマド)
 - 3 暗褐色土 焼土粒・焼土ブロック多量 (カマド)
 - 4 黒色土 ローム粒・焼土粒微量 (カマド)
 - 5 暗褐色土 ローム粒・焼土粒多量 (カマド)
 - 6 黄褐色土 ロームブロック・黒褐色土含む (粘り床礫化面)
 - 7 黄褐色土 ロームブロック・黒褐色土含む (粘り床礫化面)



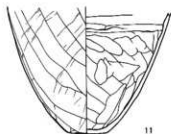
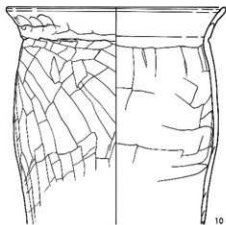
- SJ95
- 1 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土ブロック少量
 - 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量
 - 3 黄褐色土 ロームブロック (カマド)
 - 4 暗褐色土 ローム粒・焼土粒多量 (カマド)
 - 5 暗褐色土 焼土粒・焼土ブロック多量 (カマド)
 - 6 黄褐色土 ロームブロック多量 (カマド)

0 2m

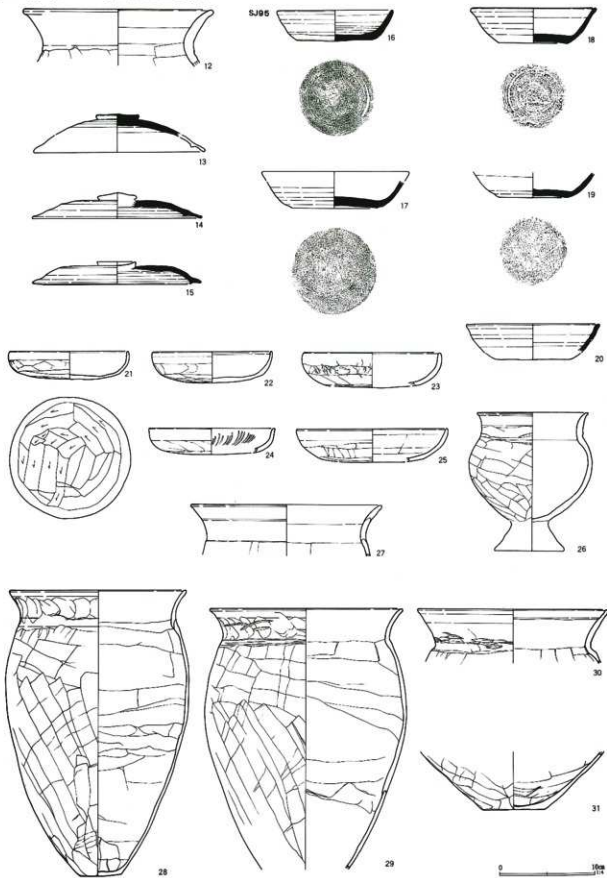
SJ94



0 10cm



第337图 第94・95号住居跡出土遺物(2)



第155表 第94・95号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(11.0)	3.0		ADE	2	赤褐	25	SJ94 カマド No 6
2	環	(10.4)	3.6		AEH	2	にぶい黄褐	15	SJ94 No 5
3	環	12.4	3.4		DE	2	橙	60	SJ94 カマド No 3
4	環	(13.0)	3.1		DE	2	明赤褐	20	SJ94
5	環	(12.0)	2.3		DE	1	明赤褐	15	SJ94
6	環	(12.0)	2.8		DE	1	明赤褐	10	SJ94 内面放射暗文
7	環	(11.4)	2.8		EH	2	にぶい褐	15	SJ94
8	環	(12.0)	2.8		ADEH	3	橙	10	SJ94
9	皿	(16.0)	3.5		AEH	2	橙	10	SJ94
10	甕	(23.0)	22.8		DEHJ	1	明赤褐	25	SJ94 カマド No 1
11	甕		13.4	4.4	DEHJ	1	赤褐	80	SJ94 カマド No 2
12	壺	(20.0)	5.9		DEHJ	3	灰褐	25	SJ94
13	須恵蓋		2.4		BEHI	3	灰黄褐	85	SJ94 Na13 未野産
14	須恵蓋	(18.0)	1.9		BEHI	3	灰黄	20	SJ94 Na 9 未野産
15	須恵蓋	(18.0)	1.9		B	1	灰白	25	SJ94 Na10 藤岡産か
16	須恵環	12.0	3.2	8.3	BI	1	灰	100	SJ95 Na17 群馬産 胎土精良
17	須恵輪		2.8	9.0	BEFI	1	灰	80	SJ95 Na 3 南比企産 周辺ヘラケズリ
18	須恵環	13.1	3.7	7.3	ABEI	2	灰オリーブ	100	SJ95 未野産
19	須恵環		2.6	7.2	ABEI	3	灰黄	60	SJ95 Na19 未野産
20	須恵環	(14.0)	3.0		BEFJ	2	灰白	20	SJ95 Na13 南比企産
21	環	12.6	2.9		DEJ	1	橙	100	SJ95 Na 9
22	環	(12.6)	3.3		DEH	2	にぶい赤褐	60	SJ95 Na16
23	環	(14.4)	3.5		DEH	2	にぶい赤褐	25	SJ95
24	環	(13.2)	2.6		BDE	1	橙	15	SJ95 内面放射暗文
25	環	(16.0)	3.4		ADEH	2	橙	20	SJ95 Na12
26	台付甕	(11.6)	11.3		BDEH	1	赤褐	90	SJ95 Na20
27	甕	(20.0)	5.4		DEH	2	橙	15	SJ95 Na 1
28	甕	18.6	30.0	4.5	BDEH	1	明赤褐	40	SJ95 Na13 南比企産・14・15
29	甕	(20.4)	27.4		ADEH	1	にぶい赤褐	20	SJ95 Na16
30	甕	(20.2)	5.6		ADE	1	明赤褐	25	SJ95 Na 6 床下
31	甕		6.1	6.4	ADEH	1	明赤褐	70	SJ95 Na10

平面形は長方形で、規模は長軸3.97m、短軸3.04m、深さ0.20mを測る。主軸方向はN-95°-Eを示す。

床面は平坦で全体に堅く踏み固められていた。住居埋土はロームブロック混じりの暗褐色土を基調としており、大きな土層変化は観察されなかった。埋め戻された可能性があらう。

カマドは東壁の南寄りに設置される。燃焼部は壁を切り込んでおり、底面は皿状に窪む。明確な灰層は検出されなかったが、第6層が掘り方埋土、その上面が火床面となろうか。袖部には白色粘土混じりの褐色土が使用されていたが、残存状態はあまり良くなかった。

ピットは1本北壁際から検出されたが、柱穴とはならない。掘り方の精査においても柱穴は検出できなかった。壁溝は西壁部を除き巡っていた。

出土遺物は土師器環・甕・台付甕・壺、須恵器環・輪がある(第337図16-31)。21の土師器環はカマド前面の床面から出土した。16の須恵器環は西壁直下から、斜位の状態で出土、18は北壁際の床面から6cmほど浮いた位置から出土した。いずれも完形である。

第337図16-18-20は須恵器環である。16は底部全面回転ヘラケズリ調整、体部下端は回転力の弱いヘラケズリ、または手持ちヘラケズリ調整される。器壁は厚く重量感がある。素地土は精良で、径3mm前後の白色鉱物が含まれる。焼成は堅緻。秋間産か?。18は底部回転糸切り無調整の環。底径よりも内底径の方が大きい。胎土に片岩を含み、焼成は甘い。未野産である。19も18と同類。未野産。20は南比企産の環で、底部を欠く。推定口径14cm。17は須恵器無台輪。底部回転糸

切り後、周辺部を回転ヘラケズリ調整されている。南比企産。

21～25は土師器環。21・22は扁平な北武藏型環。底部は弱い丸底風。体部は無調整(指押さえ)、底部はヘラケズリ。23・25は底部が平底風の環で、体部と底部をヘラケズリしている。24は平底風の暗文環で、内面に放射暗文が施される。26は小型台付甕。脚部を欠く。27～30は土師器甕。口縁部は弓状に外反し、胴部上位は横方向、下位は縦方向のヘラケズリが施される。31は壺である。住居の時期は8世紀中葉～後半頃と考えられる。

第96号住居跡 (第338図)

第96号住居跡は、F-17グリッドに位置し、第94号住居跡を切って構築されていた。掘り込みは浅く、床面は部分的に露出していた。

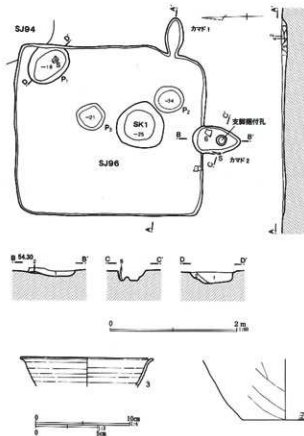
平面形は正方形で、規模は長軸3.04m、短軸2.70m、深さ0.03mを測る。主軸方向はN-92°-Eを示す。

床面は概ね平坦である。カマドは2基検出された。1号カマドは、東壁の南端に設置される。燃焼部全体が壁外に突出するような状態で検出された。焼土の含有量は少ない。2号カマドは南壁の中央に設置される。燃焼部は壁を切り込んでおり、底面は平坦である。燃焼部底面には支脚を据え付けたと思われる小孔が穿たれ、右(西)側壁には片岩系の板石が壁に沿って据えられていた。

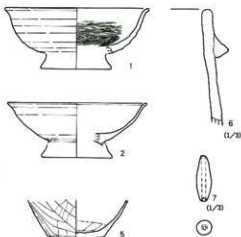
ピットは3本検出された。Pit 1は北東コーナーにある。深さ18cmと浅く、住居に伴うピットと考えられる。Pit 2・3は上面に床面が貼られており、掘り方または床下土壌と思われる。土壌は1基住居中央からやや南に寄った位置に検出された。深さ25cm。やはり上面は貼床されており、床下土壌と考えられる。

出土遺物はロクロ土師器高台碗、羽釜、甕、土鍾がある(第338図)。第338図1～3はロクロ土師器高台碗である。1は内面ヘラミガキと黒色処理が施される。

第338図 第96号住居跡・出土遺物



- SJ96
- 1 暗褐色土 ローム殻・ロームブロック少量
 - SJ96 カマド1
 - 2 黄褐色土 焼土殻少量
 - 3 暗褐色土 ローム殻少量
 - 4 暗褐色土 ローム殻多量、焼土殻微量
 - 5 黄褐色土 焼土殻微量 - SJ96 カマド2
 - 1 暗褐色土 ローム殻・ロームブロック多量
 - 2 暗褐色土 ロームブロック含む - SJ96 ピット1
 - 1 暗褐色土 ローム殻・赤色殻少量
 - 2 暗褐色土 ローム殻多量、ロームブロック含む



第156表 第96号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高台椀	(15.4)	4.8	(5.2)	ABDH	1	にぶい黄橙	20	ロクロ土師器 内面内黒・ミガキ
2	高台椀	(14.8)	4.4		ADE	1	にぶい黄橙	15	ロクロ土師器
3	高台椀	(14.2)	3.0		ADHI	2	明赤褐	15	ロクロ土師器
4	羽釜		6.4	(9.0)	ABDEH	2	にぶい褐	10	
5	甕		4.1	6.0	ABEH	2	橙	60	カマド
6	羽釜		9.0		ADEH	2	にぶい赤褐	15	№1
7	土鉢	長3.6cm 最大径1.2cm 孔径0.2cm 重量4.21g 褐灰 床下							

2の高台は補描図ほどには高くならないであろう。
4・6は土師質羽釜。6は口縁部片で非ロクロ整形。
胴部はナデ。5の甕底部は混入と思われる。住居の時
期は10世紀後半～11世紀である。

第97号住居跡 (第339図)

第97号住居跡は、F-17グリッドに位置する。第1
号溝跡に上面を削平されていた。

平面形は横長の長方形で、北壁の東端に張出部が付
設されていた。規模は長軸3.92m、短軸2.50m、深さ
0.18mを測る。主軸方向はN-102°-Eを示す。

床面は凹凸が顕著であったが、全体に堅く踏み固め
られていた。

カマドは東壁の南寄りに設置される。燃焼部は壁を
切り込んで構築される。側壁は弱く被熱していた。底
面はほぼ平坦で床面との段差はあまりない。底面中央
から北側にかけて赤褐色に被熱した部分が認められた。
奥壁部近くには角棒状の礫が倒れた状態で出土した。
支脚と思われる。

ピットは4本検出された。Pit 1は南西コーナー部
にあり、深さ29cm。住居に伴うカマド対向ピットと考
えられる。Pit 2・3は西壁際に位置し、床面を切っ
ていた。住居に伴う可能性もある。Pit 4はカマド前面に

あり、上面は貼床が乗っていた。掘り方か。

土壌は1基カマド前面に検出された。深さ18cm。住
居に伴う床下土壌と考えられる。

張出部は北壁ラインから30cmほど半円形に突出す
る。底面は床面と同一レベルで続き、壁溝は壁ライ
ンに沿って通っていたことから、屋内の一部として取り
込まれていたことがわかる。

出土遺物はロクロ土師器小皿・高台椀、土師器甕、
羽釜が検出されている(第339図)。第339図1・2はロ
クロ土師器小皿である。底部は回転糸切りされる。3
はロクロ土師器高台椀で、内面ヘラミガキと黒色処理
が施されている。4は土師質甕である。胴部は縦方向
のナデ調整されるが、部分的に平行叩きと思われる痕
跡が残る。内面には当て具状と思われる半円状の窪み
が認められる。カマド内出土。6～9は土師質の羽釜
である。6・7は同一個体か。非ロクロ整形で、胴部
は縦方向のナデ調整。カマド内出土である。8・9も
同巧である。住居の時期は10世紀後葉と考えられる。

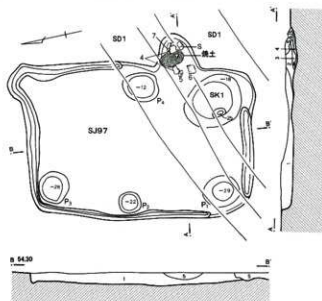
第98号住居跡 (第340図)

第98号住居跡は、D・E-17・18グリッドに位置す
る。重複する第100号住居跡を切り、第99号住居跡に切
られていた。掘り込みは浅く、床面の大半は削平され、

第157表 第97号住居跡出土遺物観察表

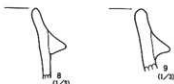
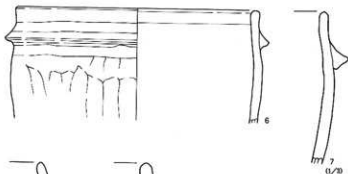
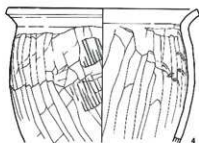
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	小皿	(10.0)	2.5	(5.6)	BEJ	2	にぶい橙	20	ロクロ土師器
2	小皿	(9.2)	2.4	(4.7)	ADEH	2	橙	40	ロクロ土師器
3	高台椀	(16.0)	4.5		ADEH	2	にぶい赤褐	10	ロクロ土師器 内黒+ミガキ
4	甕	(20.0)	14.0		ADEH	1	明赤褐	25	カマド №1・5
5	羽釜		4.1	(10.0)	ABDEJ	3	にぶい赤褐	25	カマド №2 土師質
6	羽釜	(25.0)	11.7		ABDEJ	1	明赤褐	20	カマド №3 土師質 非ロクロ
7	羽釜		11.9		ADE	2	明赤褐	15	カマド №5 土師質 非ロクロ整形
8	羽釜		5.5		ADE	2	明赤褐	10	SK1 土師質
9	羽釜		4.9		ADEH	2	にぶい赤褐	10	土師質

第339図 第97号住居跡・出土遺物



SJ97

- 1 暗褐色土 白色粘土ブロック・焼土跡・ローム粒少量
- 2 暗褐色土 焼土ブロック・炭化物粒多量(天井崩落?)
- 3 黒色土 灰・炭化物粒多量(灰層)
- 4 赤色焼土 ガリガリに硬い(堆山被褥)
- SD1 褐色土 ローム粒微量



南壁は不明確であった。

平面形は不整形で、規模は長軸3.30m、短軸2.65m(現在長)、深さ0.02mを測る。主軸方向はN-90°-Eを示す。

床面はほぼ平坦である。カマドは東壁の南寄りに設置されていたが、遺存状態は極めて悪く、カマドまたはカマド前面の灰層が僅かに検出されたのみである。

ピットは8本検出されたが、遺構に確実に伴うものは抽出できなかった。

土壌は2基検出された。上面に貼床面が形成され、住居に伴う床下土壌、または掘り方と思われる。

出土遺物は検出されなかった。住居の時期は重複住

居との関係から、8世紀前半以降、10世紀後半以前となるが、正確な時期は不明とせざるを得ない。

第99号住居跡(第340図)

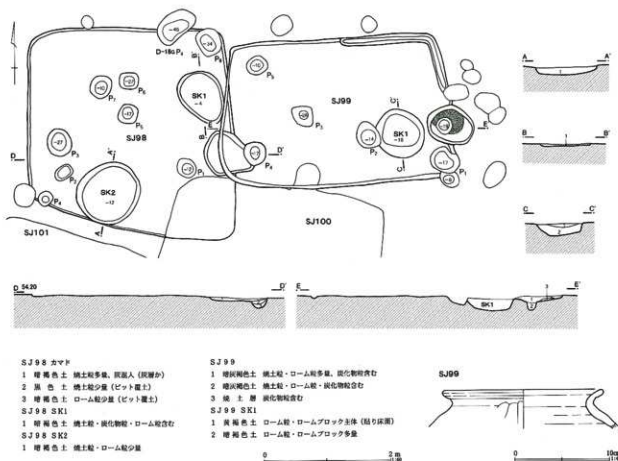
第99号住居跡は、D・E-17・18グリッドに位置する。重複する第98・100号住居跡を切って構築されていた。掘り込みは極めて浅く、遺構の遺存状態は悪い。

平面形は長方形で、規模は長軸3.64m、短軸2.33m、深さ0.01mを測る。主軸方向はN-91°-Eを示す。

床面は全体に東側に向かって傾斜していた。東半部の床面はほぼ露出した状態で、堅く締まっていた。西半部は床面が僅かに削平されていた。

カマドは東壁の南寄りに設置される。燃焼部は壁を

第340図 第98・99号住居跡・出土遺物



切っており、底面は皿状に窪んでいる。底面は被熱しており、小ビツトが穿たれていた。支脚据え付け痕であるか否かは不明である。

ビツトは5本検出された。Pit 1はカマド脇のコーナー部にあり、深さ17cm、貯蔵穴であろうか。Pit 4は住居よりも古い。他のビツトの層属は不明である。

カマド前面からは土塊が1基検出された。上面に貼床が乗っており、住居に伴う床下土塊と考えられる。

出土遺物は土師器の甕が1点検出されたに留まる（第340図1）。第340図1は土師器甕の口縁部小片で、口径及び傾きは不安定である。口縁部は短く強く外反する。胴部は縦方向（下から上）のヘラケズリ調整が施されている。推定口径16.8cm、残存高4.1cm。胎土に角閃石・白色粒子・砂粒が含まれている。焼成は普通、にぶい赤褐色を呈する。住居の時期は不明確であるが、10世紀後半頃か。

第100号住居跡（第341図）

第100号住居跡は、E-18グリッドに位置する。重複する第105号住居跡を切り、第98・99・101・103・104号住居跡に切られていた。西壁部の内側に壁溝が巡ることから建て替え（縮小）られたものと考えられる。

平面形は方形と推定されるが、東壁部はやや広がっている。規模は長軸4.50m、短軸2.53m（現在長）、深さ0.05mを測る。建て替え後の東西長は3.63mである。主軸方向はN-7°-Eを示す。

床面は概ね平坦である。カマド前面は比較的強く踏み固められていたが、壁際は軟弱であった。

カマドは北壁の東寄りに設置される。燃焼部は壁にかかって掘り込まれていた。遺存状態は悪く、掘り方面（第4層）と火床面（第4層上面）が辛うじて残存したに過ぎない。袖部は本来白色粘土を用いて構築されたものと思われ、カマド周辺に広がっていたが、袖

部自体はほとんど原形を留めていなかった。

ピットは2本検出された。Pit 1はカマド右脇のコーナー部にあり、深さ11cmを測る。貯蔵穴と考えて良からう。Pit 2は住居に伴うものではない。柱穴に相当するピットは検出できなかった。

土壌は1基、カマド前面に検出された。円形プランで直径1.05m、深さ0.17m。上面に貼床が乗っており、床下土壌と考えられる。

出土遺物は土師器環・碗、須恵器環・蓋がある(第342図1~14)。第342図1~8は扁平化した丸底形態の北武蔵型環である。口縁部は内湾気味に開くものと、直立するものがある。いずれも体部上位に無調整部を残す。1・4~6・8はほぼ床面から出土した。9は土師器の碗である。外面体部と底部はヘラケズリ調整され、その後、内面と外面体部から底部は横方向のヘラミガキが施されている。全体にやや器面が荒れているが、本来黒色処理されていた可能性が高い。10・11は暗文環。

12は須恵器蓋である。低平な形態で、リング状のつまみが付く。胎土から秋間産と考えられる。覆土出土。13は須恵器環。僅かに丸底風で、底部はヘラ切り。厚手の底部から口縁部にかけて先細りする。内面体部と底部の境に沈線状の窪みが巡る。焼成は良好で、黒色粒子が浮き出ている。胎土は緻密。秋間産と思われる。12の蓋とセットとなろうか。なお、第23号井戸跡から同一個体の破片が出土し、接合した。14は扁平で大振りの須恵器環。口径15cm。底部及び体部下端は回転ヘラケズリ調整。焼成は甘く、褐色に焼き上がる。器面が剥落している。片岩を含み木野産と考えられる。その他、重複する第101号住居跡の床面下から出土した16・17の平底暗文環と18の環も本住居跡に帰属する可能性が高い。住居の時期は8世紀前半、1/4期後半~2/4期頃と思われる。

第101号住居跡(第341図)

第101号住居跡は、E-17・18グリッドに位置する。第100・105号住居跡を切り、第104号住居跡に切られていた。

平面形は長方形で規模は長軸4.23m、短軸3.50m、深さ0.14mを測る。主軸方向はN-116°-Eを示す。

床面は概ね平坦で、カマド前面から住居中央部を中心に堅く踏み固められていた。壁際はやや軟弱である。カマドは東壁の南寄りに設置される。重複する第104号住居跡にカマド先端を削平されているため、遺存状態はあまり良くない。燃焼部は壁を切り込んでおり、灰層(第5層)、掘り方(第6層)が残存する。天井部崩落土は白色粘土と焼土ブロックが多量に含まれていた。袖は白色粘土を使用したものと思われるが、遺存状態は悪く詳細は不明である。

ピットは検出されなかった。壁溝は全周する。

出土遺物は須恵器環、土師器の環・甕がある(第342図15~23・第343図24)。第342図15は兩壁直下から出土した須恵器の環である。口径11.9cm、底径6.0cm。底部は回転糸切り無調整、南比企産。16~20は土師器環。16・17は平底暗文環。体部は無調整、底部ヘラケズリ。内面に螺旋暗文と放射暗文が施される。16~18は掘り方から出土しており、重複する第100号住居跡に伴う遺物とみの方がよいかもしいない。19は体部下位に屈曲をもち、底部を作り出す意識の強い環である。カマド内出土。20は平底環で混入か。21~24は土師器甕。口縁部は弓状に外反し、胴部は比較的強く張る。

「コ」の字状口縁甕に移行する以前の武蔵型甕である。15の須恵器環は糸切り無調整ではあるが、内底径が大きく、口縁部の外反がない等、9世紀中葉まで降る要素はない。土師器環・甕の形態からみて8世紀後半~9世紀初頭頃と考えておく。

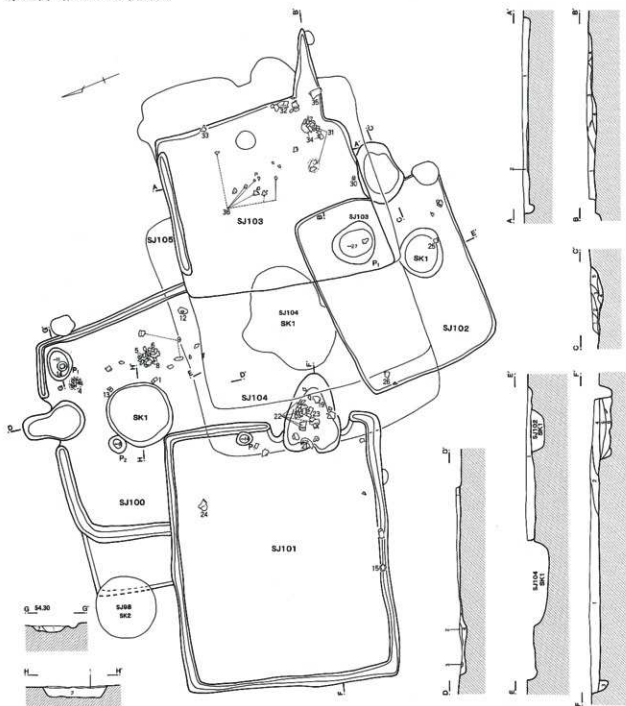
第102号住居跡(第341図)

第102号住居跡は、E-18グリッドに位置する。重複する第104~106号住居跡を切り、第103号住居跡に切られていた。

平面形は長方形で、規模は長軸3.08m、短軸2.44m、深さ0.11mを測る。主軸方向はN-90°-Eを示す。

床面は北側の重複部がやや深くなる。全体に堅く締まっていた。カマドは東壁の南寄りに設置される。燃焼部は壁を切って掘り込まれていた。底面は皿状に窪

第341図 第100～103号住居跡



SJ100

- 1 暗褐色土 ローム殻・焼土殻・白色結土層
- 2 暗褐色土 焼土ブロック・白色結土・炭化物殻多量 (灰層) (カマド)
- 3 白色結土 白色結土ブロック (カマド)
- 4 暗褐色土 ローム殻・焼土殻少量 (掘り方) (カマド)

SJ100 ビット1

- 1 暗褐色土 炭化物殻・焼土殻やや多い
- 2 暗褐色土 灰色結土ブロック多量

SJ100SK1

- 1 黄褐色土 腐り深狭くしまる
- 2 暗褐色土 暗褐色土・ローム小ブロックの混土層。焼土殻やや多い

SJ101

- 1 暗褐色土 ローム殻多量
- 2 暗褐色土 ローム殻・白色殻やや多い
- 3 黄褐色土 ローム殻多量
- 4 褐色土 焼土殻・白色結土ブロック多量
- 5 黒色土 灰・焼土ブロック多量
- 6 暗褐色土 ロームブロック・焼土ブロック混在

SJ102 カマド

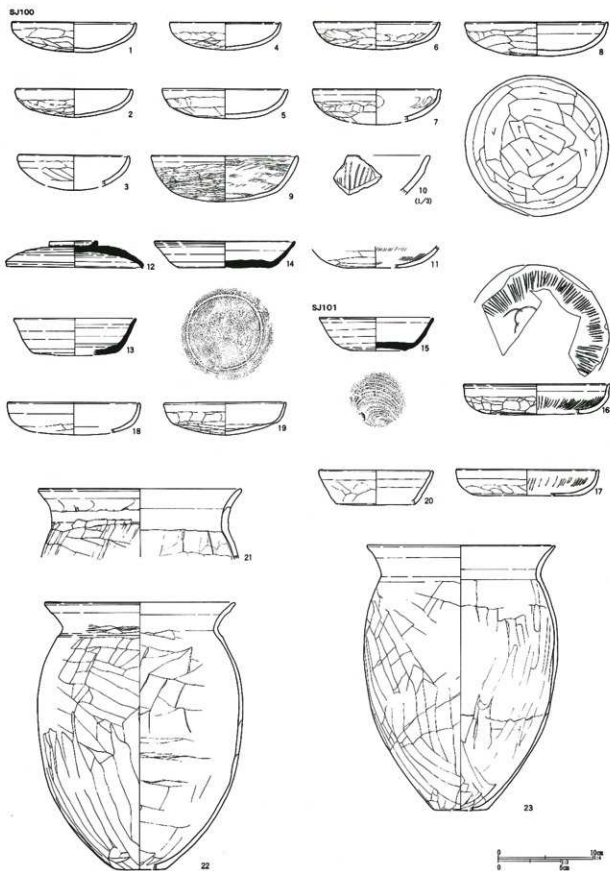
- 1 暗褐色土 焼土殻・炭化物殻やや多い
- 2 暗褐色土 焼土ブロック極めて多量 (天井部崩壊土)
- 3 黒色土 灰多量。焼土殻混じる (灰層)
- 4 暗褐色土 ローム殻混入 (掘り方)
- 5 黒色土 焼土殻・ローム殻少量 (掘入土か)

SJ103

- 1 黄褐色土 焼土殻・白色結土ブロック含む
- 2 白色結土
- 3 褐色土 白色結土多量。焼土ブロック混入
- 4 黒色土 灰層。炭化物殻・焼土含む

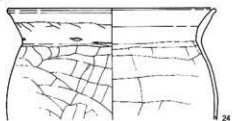
大寄Ⅱ区

第342图 第100~103号住居跡出土遺物(I)



第343图 第100~103号住居跡出土遺物(2)

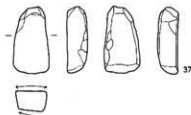
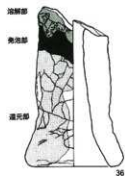
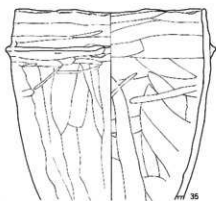
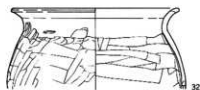
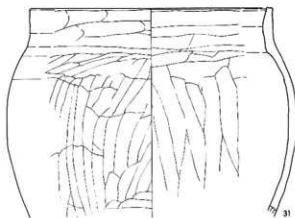
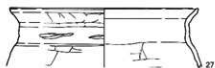
SJ101



SJ103



SJ102



第158表 第100～103号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(13.0)	3.0		DE	2	にぶい橙	40	SJ100 No13 ほば床面
2	環	(12.2)	3.0		DEH	2	赤褐	30	SJ100
3	環	(11.1)	3.2		DE	2	橙	15	SJ100
4	環	11.6	2.9		DH	1	にぶい赤褐	25	SJ100 No2 床面
5	環	(13.2)	3.1		DH	1	にぶい橙	50	SJ100 No18・19 床面
6	環	(13.4)	2.9		DH	1	明赤褐	50	SJ100 No15 床面
7	環	(13.5)	3.4		DEH	1	にぶい橙	30	SJ100 床下
8	環	15.0	3.6		DEH	1	橙	95	SJ100 No16・17 床面
9	碗	15.4	4.8	11.0	DEH	2	橙	60	SJ100 No6・11 内外面ヘラミガキ
10	環		3.0		ADE	2	明赤褐	破片	SJ100 内面放射暗文 11と同一個体
11	環		2.2		ADE	2	明赤褐	20	SJ100 内面放射暗文 10と同一個体
12	須恵蓋	14.4	3.0		EHJ	1	灰	60	SJ100 No7 秋間産 環状つまみ
13	須恵環	(13.0)	3.8	(9.0)	E	2	灰白	15	SJ100 No4 秋間産 底部ヘラ切り SE23と接合
14	須恵環	15.0	2.7	9.8	ABDEH	3	にぶい橙	95	SJ100 No1 末野産 底部全面回転ヘラケズリ
15	須恵環	11.9	3.5	6.0	BEF	1	灰	100	SJ101 No1 南比企産 底部全面回転糸切り
16	環	(15.4)	3.2		ABD	1	橙	30	SJ101 床下 内面放射+ラセン暗文
17	環	(15.0)	2.7	(11.8)	ADEH	1	橙	20	SJ101 床下 内面放射暗文
18	環	(14.0)	3.1		DEH	2	にぶい赤褐	20	SJ101 床下
19	環	12.7	3.4		ACDEH	1	にぶい橙	60	SJ101 カマド No11
20	環	(12.0)	3.5	(8.2)	DEH	2	にぶい赤褐	15	SJ101 カマド
21	甕	(21.3)	7.2		DH	1	にぶい黄褐	30	SJ101 カマド No4
22	甕	(20.0)	28.0	5.4	ADEH	1	にぶい褐	30	SJ101 カマド No8
23	甕	(20.0)	27.8	5.6	DEH	1	にぶい褐	15	SJ101 カマド No8
24	甕	(21.8)	11.7		DH	1	にぶい赤褐	25	SJ101 No4
25	須恵高台碗	(15.1)	5.3		ACEIJ	1	黄灰	15	SJ102 No3
26	須恵高台碗	(15.0)	4.6		ABEIJ	2	灰	15	SJ102 No5 末野産
27	甕	(20.0)	6.2		ADEJ	1	にぶい橙	10	SJ102
28	環	(12.0)	3.4		ADEH	1	橙	10	SJ103
29	皿	(16.0)	3.3		DEH	2	橙	10	SJ103
30	高台碗	(13.5)	5.6	6.1	ABIJ	1	にぶい黄橙	50	SJ103 カマド SJ103 ロクロ土師器
31	甕	(25.6)	21.9		ABDJ	1	明赤褐	25	SJ103 No6・9
32	甕	(17.8)	8.4		DE	1	明赤褐	25	SJ103 No4
33	甕	(20.0)	5.7		ADEH	2	橙	15	SJ103 No22
34	甕		9.8	10.0	BHDJ	1	にぶい赤褐	40	SJ103 No7 土師質 タテケズリ
35	羽釜	(20.0)	20.0		CDGJ	1	橙	15	SJ103 No1
36	轆羽口	長16.8cm 最大幅10.4cm 孔径(7.6)cm					重量924.95g	SJ103	EH1 灰質 70 No11・12・15・18・19・21
37	砥石	長(7.0)cm 最大幅3.8cm 厚さ2.1cm					重量79.34g	SJ103	

み、埋土は第4層が覆り方、その上面が火床面と考えられる。袖部は検出されなかった。

ピットは南東コーナー部に1本あるが住居に伴うものではない。土壌は1基カマド前面から検出された。直径78cm、深さ22cm、住居に伴う床下土壌と考えられる。

出土遺物は少なく、須恵器高台碗と土師器甕がある(第343図25～27)。第343図25・26は須恵器高台碗で、高台部を欠く。いずれも末野産である。27は典型的な「コ」の字状口縁甕である。住居の時期は9世紀後半

と考えられる。

第103号住居跡(第341図)

第103号住居跡は、E-18グリッドに位置する。第102・104・105・119号住居跡を切って構築されており、重複住居の中で最も新しい。

調査区を分割したため、当初住居の存在に気づかず、西壁部は確認できなかった。ピットの位置から復元したが大きくずれることはないであろう。平面形は歪んだ正方形と推定され、規模は長軸3.30m、短軸2.90m(推定)、深さ0.10mを測る。主軸方向はN-100°-E

を示す。

床面は概ね平坦である。全体に堅く締まっていたが、北東コーナー付近は軟弱であった。多少掘りすぎた可能性がある。カマドは東壁の南端に設置される。燃焼部から煙道部は壁を切って掘り込まれ、水平に長く延びる。両側壁は弱く被熱していた。

ピットは南西コーナーから1本検出された。深さ27cm。カマド対向ピットと考えられる。

出土遺物は土師器環・皿・甕、土師質の高台椀、羽釜、輪羽口、砥石がある(第343図28~37)。28・29は混入。30は第102号住居跡カマドにかかる位置から出土した。本住居跡に伴うものと考えた。須恵器高台椀の形態であるが、厚手で、全体に雑な作りである。口縁部の一端は指で押しつけられ、輪花あるいは片口状の表現がみられる。高台部も低く退化的である。ロクロ整形で、酸化焰焼成されている。胎土は大粒の礫を多量に含み粗い。31は大型の土師器甕である。口縁部は直立しヨコナゲ調整。胴部はナゲ、またはヘラナゲ調整で器面は平滑に整えられている。32は「コ」の字状口縁甕の系統下にあるが口縁部の段が弱く、器壁も厚くなっている。33は東壁際から出土したもので混入。おそらく第104号住居跡に伴うであろう。35は土師質、非ロクロ整形の羽釜である。胴部はナゲまたは軽いヘラケズリ、内面はナゲ調整で仕上げている。罫は低い。36は輪羽口で、住居内から散乱した状態で出土した。基部はラッパ状に開き、差込部は溶解している。基部に向かい、溶解、還元、酸化面と移行する。孔径は3~7.5cm、基部径は約10.5cm、住居の時期は10世紀前半頃と考えられる。

第104号住居跡(第344図)

第104号住居跡は、E-18グリッドに位置する。第100・101・105・119号住居跡を切り、第102・103号住居跡に切られていた。第101号住居跡との関係は調査時に第105号住居跡西壁を本住居跡のものとして誤認したために遺構と遺物の関係が矛盾をきたしたが、図上で訂正した。

平面形は縦長の長方形で、規模は長軸5.00m、短軸

3.65m、深さ0.08mを測る。主軸方向はN-105°-Eを示す。

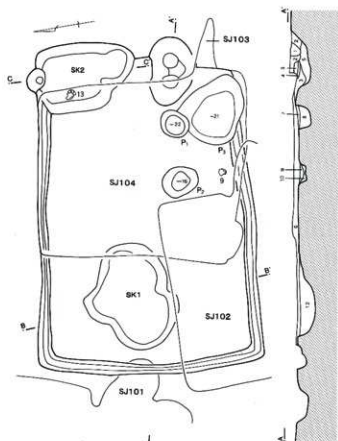
床面は概ね平坦である。住居中央付近は堅く、壁際がやや軟弱であった。カマドは東壁の南寄りに設置される。燃焼部は壁を切って掘り込まれ、底面は鍋底状に窪む。第5層は掘り方、第5層上面が火床面となろう。天井部は崩落しており、焼土ブロックと灰色粘土混じりの褐色土が堆積していた。袖は明確に検出することはできなかった。

ピットは3本検出された。Pit 1・2の帰属は不明。Pit 3は掘り方か。土壌は2基検出された。1号土壌は上面に貼床されており、床下土壌または掘り方であろう。2号土壌は東壁部から張り出すように検出された。上面に貼床が認められず、住居に伴う施設の可能性がある。やや大きすぎるが貯蔵穴か。

出土遺物は土師器環・皿・高環・甕・小型甕、須恵器高台椀・皿、灰釉陶器皿がある(第344・345図)。第344図1~3・10~12は明らかな混入である。4~9は平底環で深身のものが主体である。9はほぼ器形が判明する資料で、口縁下端に沈線を通らす。体部上位は指押しさえ、下位と底部はヘラケズリ調整される。南壁際の覆土から出土した。13は須恵器高台椀。木野産で高台部の作りは雑である。焼きも甘い。火中に投げられたものと思われ、煤が付着し器面が剥落している。2号土壌内出土。14は須恵器の無台皿。灰色に焼き上がり焼成は良好。15は灰釉陶器皿である。口縁部は小さく外反する。体部上位まで回転ヘラケズリ、透明に近い色調の釉を内面全体に掛けている。刷毛塗りであろう。胎土はやや砂っぽく狼狽産というよりも三河産の可能性がある。K-14号窯式と思われる。本住居跡及び第102号住居跡の確認面出土。

16・22は小型台付甕。17~21・23~25は甕。17は器壁が厚く、「コ」の字状口縁に崩れがみられる。上面に乗る第103号住居跡に伴うものとすべきか。18・19は典型的な「コ」の字状口縁甕である。胴部の張りは強い。26は須恵器甕で、南比企産である。住居の時期は9世紀後半と考えられる。

第344図 第104号住居跡・出土遺物(Ⅰ)

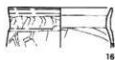
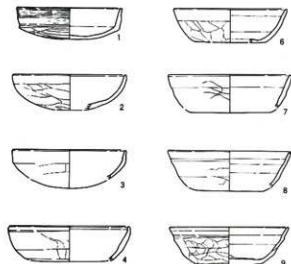
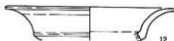
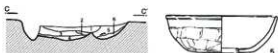
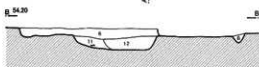


SJ104

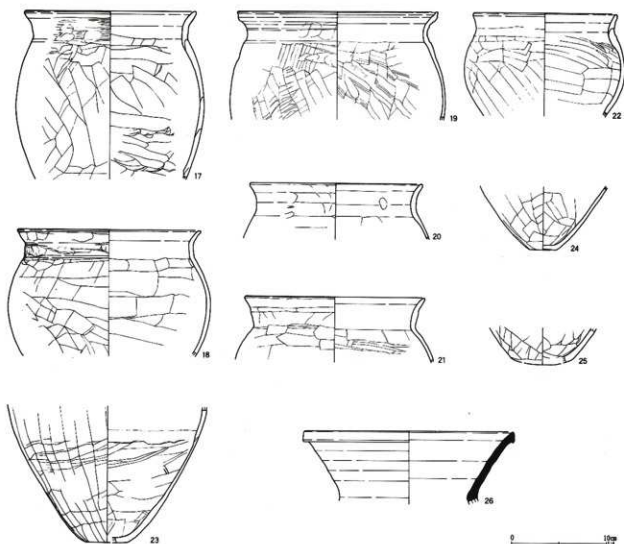
- 1 黄褐色土 焼土・灰・炭化物散入
- 2 褐色土 灰色粘土・焼土粒・焼土ブロック多量
- 3 黒色土 灰玉珠・炭化物粒・焼土粒散入 (灰層)
- 4 焼土
- 5 黄褐色土 炭褐色粘土・焼土ブロック散入 (掘り方)
- 6 黄褐色土 ロームブロック・白色粘土中多量
- 7 焼土
- 8 灰色土 灰多量・焼土ブロック散入 (炭層状ピット?)
- 9 灰白色粘土 (ピット)
- 10 黄褐色土 灰色粘土散入 (ピット)
- 11 黄褐色土 ロームブロック多量
- 12 黒色土 ローム粒・焼土粒少量

SJ104 貯蔵穴

- 1 黒色土 灰・炭化物粒主体・焼土粒散入
- 2 焼土
- 3 褐色土 ローム粒・白色粘土ブロック・焼土粒散入
- 4 白色粘土 白色粘土玉珠・ロームブロック少量
- 5 焼土
- 6 黄褐色土 白色粘土ブロック散入



第345図 第104号住居跡出土遺物(2)



第159表 第104号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(11.0)	3.3		ADH	1	にぶい褐	40	
2	坏	(11.0)	3.7		ADEH	2	にぶい赤褐	20	
3	坏	(12.0)	3.0		DEH	2	にぶい褐	5	
4	坏	(13.0)	3.5	(9.4)	DH	3	橙	10	SK 2
5	坏	(11.6)	4.0	(7.1)	ADEH	1	褐灰	25	
6	坏	(12.0)	3.5	(7.6)	DE J	2	灰褐	20	
7	坏	(13.0)	3.5		DEH	2	にぶい赤褐	10	床下
8	坏	(13.0)	3.8		ADEH	2	にぶい赤褐	5	SK 2
9	坏	(12.5)	4.0	7.0	AD	1	にぶい橙	50	Na 6
10	皿	(16.0)	3.1		ADE	2	灰黄褐	5	
11	坏	(16.8)	6.7		BDEH	1	明赤褐	25	
12	高坏	(18.0)	3.5		AE	1	明赤褐	10	
13	須恵高台碗	14.6	5.7	7.0	ABI	3	灰黄	70	SK 2 No.1 末野産
14	須恵皿	(13.0)	2.3	6.0	BE I J	1	灰	40	末野産
15	灰釉皿	(16.0)	2.1		E	1	灰白	10	SJ102・104 確認面 三河産 K-14号窯式
16	小型甕	(11.0)	4.2		DEH	2	にぶい黄橙	25	
17	甕	(18.2)	17.6		DH	2	褐灰	20	SK 2

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
18	甕	19.6	13.2		BDEH	1	明赤褐	30	Pit 1
19	甕	(21.0)	11.3		ADE	1	明赤褐	15	
20	甕	(18.0)	5.8		DEH	2	にぶい赤褐	15	カマド
21	甕	(19.0)	6.8		ADEJ	1	橙	20	カマド
22	小型甕	(15.2)	10.7		ADEHJ	2	にぶい橙	20	SK 2
23	甕		14.3	(4.4)	DH	1	黒褐	25	カマド
24	甕		6.6	3.0	ADH	1	明赤褐	25	SK 2
25	甕		3.7	(6.4)	DEH	1	灰赤	30	
26	須恵甕	(22.0)	7.7		BEF	2	灰	15	床下 南比企産

第105号住居跡 (第346図)

第105号住居跡は、E-18グリッドに位置する。第100~104号住居跡に切れ、遺構の遺存状態は極めて悪い。

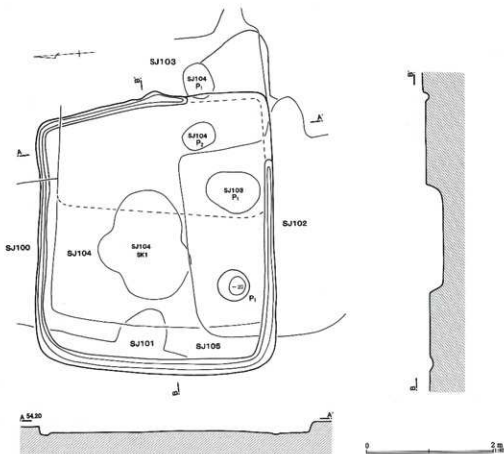
平面形は方形で、規模は長軸4.37m、短軸3.85m、深さ0.12mを測る。主軸方向はN-93°-Eを示す。

床面は重複住居の削平を受けていた。カマドは不明である。

ビットは1本検出されたが、帰属は不明である。壁溝は南東コーナーを除き巡る。南壁部は重複住居と重なっていた。

出土遺物はない。第104号住居跡から出土した土師器丸底環(第344図2・3)や皿(10)等が本住居跡に伴う可能性もあろうか。住居の時期は重複遺構との関係から8世紀前半、またはそれ以前となる。8世紀初頭前後の可能性を考えておきたい。

第346図 第105号住居跡



第106号住居跡 (第347図)

第106号住居跡は、E・F-18グリッドに位置する。直角に屈曲する浅い溝跡が検出されたことから、住居壁溝と考え精査したが、西壁部は明確に検出できなかった。第102・107・108号住居跡と重複している。新旧関係は不明確であるが、第102・107・108号住居跡よりも古い可能性が高い。

平面形は方形と推定され、規模は長軸4.28m(推定)、短軸3.92m(推定)である。主軸方向はN-29°-Wを示す。

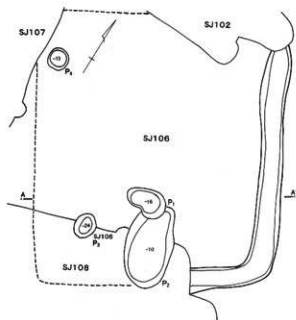
床面は削平されており、残存していなかった。カマドは検出されなかった。

ピットは住居内から4本検出されたが、主柱穴に相当するものはない。Pit 2・3は重複する第108号住居跡を切っており、遺構に伴う可能性は低い。

壁溝、または掘り方は幅40cm、深さ5~10cmで、直角に屈曲する。

出土遺物はPit 2内から土師器環と甕が出土している(第347図)が、前述したように住居跡に伴う可能

第347図 第106号住居跡・出土遺物



第160表 第106号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(12.0)	2.7		DEH	2	にぶい橙	10	Pit 2
2	甕	(22.0)	10.1		ADEH	1	橙	20	Pit 2

性は低く、時期は不明とせざるを得ない。

第107号住居跡 (第348図)

第107号住居跡は、E・F-17・18グリッドに位置する。第106号住居跡と重複し、本住居跡の方が新しい可能性が高い。

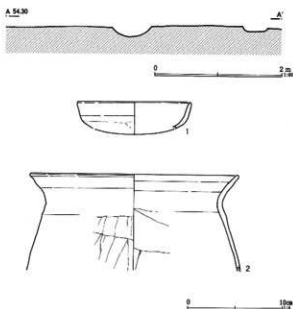
平面形は横長方形で、規模は長軸3.03m、短軸2.23m、深さ0.02mを測る。主軸方向はN-92°-Wを示す。床面は削平されており、掘り方向が露出していた。カマドは西壁の南寄りに設置される。燃焼部は壁を切り込んでいる。上面は削平されており、辛うじて灰層と掘り方が遺存するのみで、詳細は不明である。

ピットは5本検出されたが、住居の柱穴となるものではない。カマド北側に土壌状の掘り込みが検出された。掘り方と思われる。

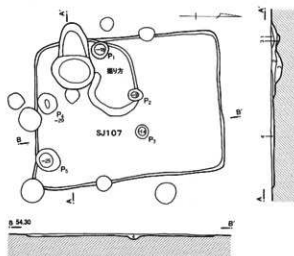
出土遺物は全くなく、時期は不明である。

第108号住居跡 (第349図)

第108号住居跡は、F-18グリッドに位置する。重複する第106号住居跡を切り、第109号住居跡に切られていた。



第348図 第107号住居跡



SJ107

- 1 黒色土 白色粘土・焼土ブロック多量 (天井破断面土の一部)
- 2 黒色土 灰多量 (灰層)
- 3 黒色土 ローム粘土層 (掘り方)
- 4 暗褐色土 ローム粘土多量

0 2m

平面形は長方形で、規模は長軸4.20m、短軸3.05m、深さ0.04mを測る。主軸方向はN-69°-Eを示す。

床面は平坦で堅く踏み固められていた。カマドは東壁の北寄りに設置される。燃焼部は壁を切り込んで構築されていた。上面は削平され、遺存状態は悪い。第7層が灰層、第5・6層は掘り方である。袖部は残存していなかった。

ピットは1本検出されたが、住居に伴う柱穴は検出されなかった。土壌は1基カマド南西側から検出された。円形で、直径1.40m、深さ0.22m。住居に伴う床

下土壌と考えられる。

出土遺物は土師器環と小型甕がある(第349図1~6)。1~5は口縁部が直立またはやや内湾する丸底タイプの北武蔵型環である。底部はやや扁平化している。6は小型甕、おそらく台付甕となろう。住居の時期は8世紀前半と考えられる。

第109号住居跡 (第349図)

第109号住居跡は、F-18グリッドに位置する。第108号住居跡及び第6号井戸跡を切っている。

平面形は長方形で、規模は長軸3.28m、短軸2.33m、深さ0.08mを測る。主軸方向はN-57°-Eを示す。

床面は凹凸があり一定しない。カマドは検出されなかった。当初から存在しなかった可能性が高く、通常の住居跡とは性格が異なるであろう。

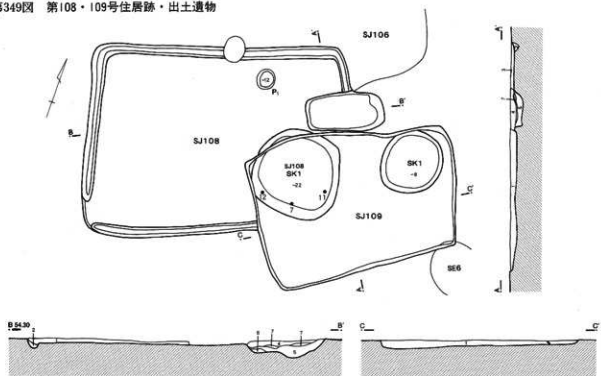
土壌は1基、北東コーナー付近から検出された。円形プランで、直径1.05m、深さ0.08mである。住居に伴う床下土壌と考えられる。

出土遺物は土師器環・皿・甕・台付甕が検出された(第349図7~12)がいずれも小片である。土師器環は丸底形態の北武蔵型環である。9の皿は内面黒色に仕上げている。10の環内面には「×」状の線刻がある。重複する第108号住居跡出土遺物と時的にはほぼ同時期とみて良く、あるいは同住居跡からの流れ込み遺物かもしれない。住居の時期は不明確で、8世紀前半またはそれ以降とするに留めておく。

第161表 第108・109号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(12.5)	3.2		DEH	1	にぶい黄褐	30	SJ108
2	環	(13.0)	3.8		DEH	2	にぶい橙	20	SJ108
3	環	(13.0)	2.9		DEH	2	橙	5	SJ108
4	環	(13.0)	2.9		DH	2	にぶい赤褐	15	SJ108
5	環	(14.0)	3.4		DEH	2	にぶい赤褐	5	SJ108
6	小型甕	(13.4)	6.9		BDH	1	赤褐	30	SJ108 床下 SK1
7	環	(17.0)	4.2		ADEH	1	にぶい橙	15	SJ109 No.3
8	環	(13.0)	3.1		DEH	2	にぶい褐	5	SJ109
9	皿	(20.0)	2.9		ADE	2	にぶい黄橙	5	SJ109 内面黒色
10	環		0.7		AE	2	橙	10	SJ109 ヘラ記号
11	甕	(22.0)	7.7		BDEH	1	にぶい橙	25	SJ109 No.3 SJ106 Pit 2
12	台付甕		6.3	11.0	BDEH	1	にぶい赤褐	50	SJ109 No.6 SJ108 SK 1

第349図 第108・109号住居跡・出土遺物



SJ108

- 1 暗褐色土・ローム粒・赤色粒・炭化物粒少量
- 2 黒褐色土・ローム粒微量
- 3 暗褐色土・ローム粒・ロームブロック少量
- ホヤド
- 4 暗褐色土・ローム粒・黄土粒・白色粘土少量、炭化物粒少量（天井部崩壊上）

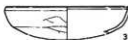
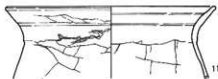
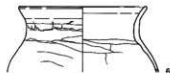
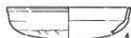
- 5 黒褐色土・ローム粒・ロームブロック多量（掘り方）
- 6 黒色土・黒色土・ロームブロック凝土層（掘り方の一部）
- 7 黒色土（反層）

SJ109

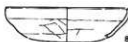
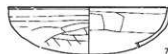
- 1 暗褐色土・ローム粒・ロームブロック多量（埋め戻し）

0 2m

SJ108



SJ109



0 5cm

10 (L/2)

第110号住居跡 (第350図)

第110号住居跡は、D-19グリッドに位置する。第111号住居跡と重複し、本住居跡の方が古い。遺存状態は極めて悪く、床面は削平されていた。

平面形は長方形で、規模は長軸4.33m、短軸3.78m、掘り方面の深さ0.05mを測る。主軸方向はN-90°-Eを示す。

床面は削平され、掘り方が残存するのみである。カマドは東壁の南寄りに設置される。燃焼部は壁を切って掘り込まれていた。天井部の大半は削平され、灰層(第3層)と掘り方(第4層)が辛うじて残存するに過ぎない。袖は基底部と思われる部分が残るのみであるが、あまり明確なものではない。

ピットは住居内から2本検出された。住居に伴う柱穴ではない。土壌は1基カマド前面から検出された。円形で直径1.15m、深さ0.25m。本住居跡の床下土壌と考えられる。

出土遺物は土師器環・皿が検出された(第352図1~5)。1はやや丸底風の扁平な環となろう。2は平底環で、体部は無調整。3は暗文環で、内面に放射暗文が施される。体部下位はヘラケズリされる。4は皿で、本住居跡及び、第111号住居跡の破片が接合している。第111号住居跡に伴う可能性もある。体部無調整、底部はヘラケズリされる。5は本来平底風の環となろうが、底部のヘラケズリを省略して焼いている。内面には焼成後に刻まれた「×」状の線刻が残る。住居の年代は、重複住居との関係から9世紀初頭またはそれ以前となるが、正確な時期は不明である。

第111号住居跡 (第350図)

第111号住居跡は、D-19グリッドに位置する。重複する第110・112・113号住居跡を切って構築されていた。掘り込みは浅く、遺存状態はあまり良くないが床面上に炭化材や焼土が堆積し、焼失住居跡と考えられる。

平面形は横長方形で、規模は長軸4.66m、短軸3.48m、深さ0.04mを測る。主軸方向はN-3°-Wを示す。床面は平坦で堅く踏み固められていた。カマドは北壁の東寄りに設置される。燃焼部は壁を切って掘り込

まれていたが、遺存状態は極めて悪い。袖の有無も不明である。

ピットは2本検出されたが、住居に伴うものではない。その他の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は土師器環・甕が検出された(第352図6~10)。第352図6・7は体部無調整、平底風の環となろう。8は丸底環で混入か。9は平底部片で、内面に「×」状の線刻が刻まれている。10は甕。口縁部が弓状に外反している。その他、第352図4の皿、第113号住居跡から出土した甕(第353図42)は本住居跡に伴う可能性が高い。

住居跡の時期は8世紀末葉~9世紀初頭前後と考えしておく。

第112号住居跡 (第350・351図)

第112号住居跡は、D-19グリッドに位置する。第113号住居跡の内側に入れ子状におさまっていた。東壁をほぼ共有することから、本住居跡から第113号住居跡に継続的に建て替えたものと考えられる。覆土上面は第111・114号住居跡に、北壁部は第45号土壌に切られていた。

平面形は長方形で、規模は長軸3.63m、短軸2.92m、深さ0.13mを測る。主軸方向はN-94°-Eを示す。

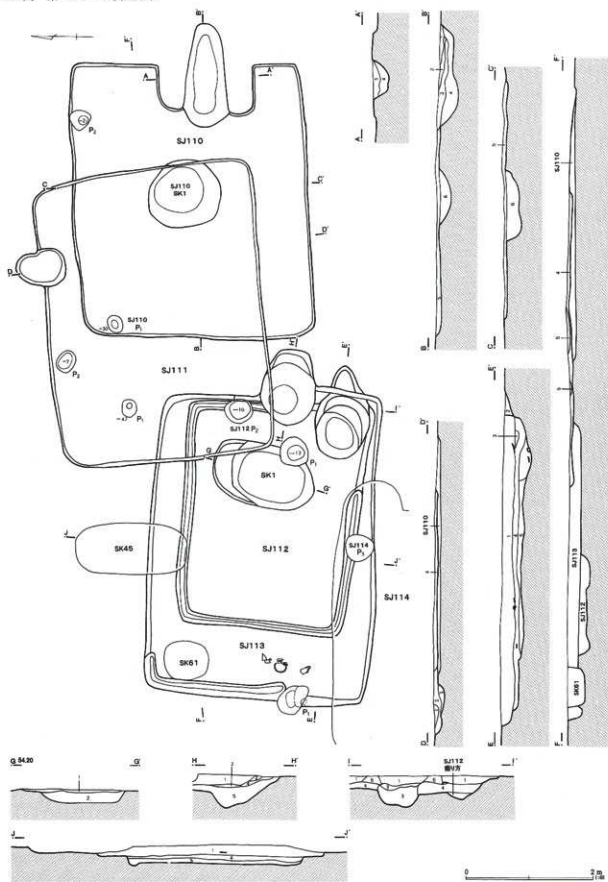
床面は概ね平坦である。カマド前面から中央部が比較的堅く締まり、壁際が軟弱であった。カマドは東壁に2基検出された。遺存状態から南側のそれを本住居跡に伴うカマドと考えた。燃焼部はほぼ壁内におさまり、先端のみに延びる。燃焼部の大半は埋め戻されており、詳細は不明である。袖は残存しない。

ピットはカマド前面から1本検出された。住居に伴うものではなからう。柱穴は検出されなかった。

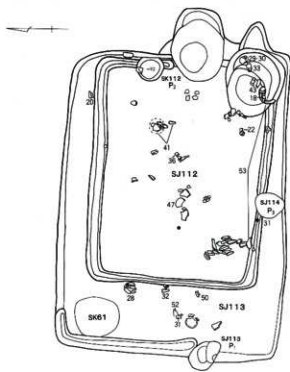
土壌は1基カマド前面から検出された。楕円形プランで、長径1.67m、深さ0.21mである。住居に伴う床下土壌と考えられる。

出土遺物は土師器環・壺・小型壺がある(第352図11~18)。11~15は丸底形態の北武蔵型環で、器高の深めのもので扁平なものがある。12はカマド内出土で、やや扁平化している。住居の時期は重複する第113号

第350图 第110~113号住居跡



第351図 第112・113号住居跡遺物出土状況



- SJ110
 1 暗褐色土 焼土粒中多
 2 暗褐色土 白色結土ブロック多量、焼土少量(天井部崩落土)
 3 黒色土 灰・焼土多量、白色結土混入
 4 暗褐色土 ロームブロック・焼土多量(掘り方)
 5 暗褐色土 ロームブロック多量(掘り方)
 SJ110 SK1
 6 暗褐色土 焼土・ロームブロック混入
- SJ111
 1 白色結土 焼土粒多量(天井部崩落土)
 2 黒色土 焼土粒・炭化物粒・灰混入(灰層+天井部崩落土)
 3 黒色土 ロームブロック多量、焼土少量(掘り方)
 4 黒色土 炭化物・焼土粒多量(灰層による埋土)
- SJ112・113
 1 黒褐色土 ローム粒、焼土粒少量、炭化物粒多量
 2 黒褐色土 焼土粒多量(SJ112カマド覆土)
 3 黒褐色土 ローム粒、焼土粒、白色結土多量
 4 黒褐色土 ローム粒、ロームブロック少量(SJ113掘り方)
 5 黒褐色土 ローム粒、ロームブロック多量
- SJ112 SK1
 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土粒・白色結土多量
 2 黒褐色土 ローム粒、ロームブロック・焼土粒・白色結土多量
- SJ113 カマド
 1 黒褐色土 ローム粒、焼土粒・白色結土多量
 2 赤褐色土 焼土粒主体、炭化物粒少量
 3 黒色土 焼土粒少量(灰層)
 4 白色結土 焼土粒少量
 5 黒褐色土 ローム粒、焼土粒・炭化物粒少量(掘り方)
 6 黒褐色土 白色結土多量(堀)

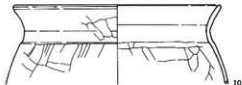
0 2m

第352図 第110～113号住居跡出土遺物(I)

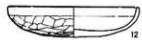
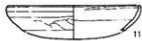
SJ110



SJ111



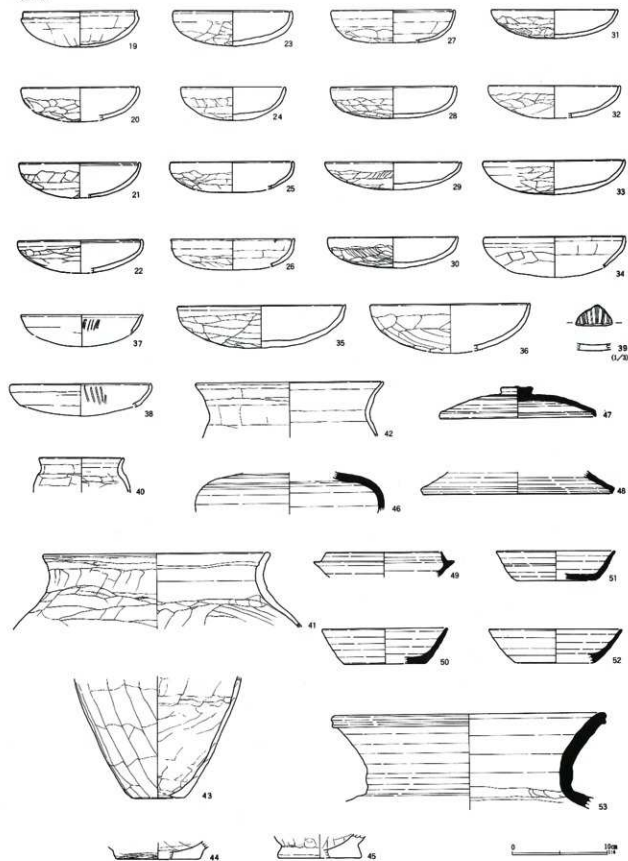
SJ112



0 10cm

第353图 第110~113号住居跡出土遺物(2)

SJ113



住居跡とはほぼ同時期か直前段階と考えられる。重複関係と土師器環の形態から、8世紀前半とみて良からう。
第113号住居跡(第350・351図)

第113号住居跡は、D-18・19グリッドに位置する。第112号住居跡を拡張して構築されたものと考えられる。覆土上面に第111・114号住居跡が被っていた。また、第45・61号土壌に切られていた。

平面形は長方形で、規模は長軸4.86m、短軸3.63m、深さ0.16mを測る。主軸方向はN-94°-Eを示す。

床面は第112号住居跡上部に貼床されていたが、全体に軟弱であった。カマドは東壁の中央付近に設置される。

ピットは西壁にかかって1本検出されたが、遺構に伴うものではない。壁溝は西壁部から北壁にかけて部分的に検出された。

出土遺物は土師器環・甕・壺・小型壺、須恵器環・蓋・瓶・甕がある(第353図19-53)。遺物量は多く、床面に相当する高さから出土したものが目立つ。また、住居南西部よりの床面から編物石が10数点まとまって出土した。

第353図19-39は土師器の坏である。19は模倣坏か。20-36は内湾気味に直立する口縁と丸腕風の底部をもつ北武蔵型坏である。全体に器高がやや浅いものが多い。37-39は暗文坏である。内面に放射暗文が施さ

れている。40は小型壺、41は大型壺である。42は胴部上端が横方向のヘラケズリが施され、口縁部が2段に屈曲する特徴から、「コ」の字状口縁甕の前段階のものと思われる。重複する第111号住居跡に帰属する可能性が高い。

46は須恵器長頸瓶である。肩部に2条の沈線が巡る。群馬産か。47・48は須恵器の蓋である。47はほぼ完形。焼きはやや甘い。白色針状物質は確認できないが、南比企産に近い。47は大振りて碗蓋か。胎土はやや砂っぽく、大粒の鉱物を全く含まない。黒色粒子が多量に吹き出している。群馬産と思われる。乗附・観音山窯跡群産の可能性もあろうか。49はいわゆる環Hで、産地不明。混入である。50-52は須恵器坏である。50は平底風の坏で、底部はヘラ切りか。内面底部から体部の立ち上がりか丸味をもつ。群馬産か。51は外面に降灰がかかり、底部調整は不明瞭。おそらくヘラ切りと思われる。胎土から秋間産と考えられる。52は底部を欠く。体部下端は回転ヘラケズリ調整される。底部ふきんは厚く口縁部に向けて先細りする。内面の立ち上がりは丸味をもつ。胎土は砂っぽく、大粒の鉱物を含まない。群馬産。乗附・観音山窯跡群産か。53は須恵器甕口縁部片である。群馬産。秋間窯跡群産または乗附・観音山窯跡群産の可能性がある。住居の時期は8世紀前半、1/4期後半-2/4期頃と推定される。

第162表 第110～113号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(12.0)	2.6		DE	2	にぶい赤褐	15	SJ110 床下
2	環	(12.0)	3.0		ADEH	2	にぶい赤褐	15	SJ110 床下
3	環	(13.0)	3.1		ADE	2	にぶい赤褐	15	SJ110 カマド
4	皿	(16.2)	2.7		DEH	1	灰褐	25	SJ110 SJ111 周辺確認面
5	環		2.3	4.0	ADE	2	明赤褐	35	SJ110 内面に「×」ヘラ記号
6	環	(12.6)	3.0		DEH	1	にぶい黄橙	25	SJ111 周辺確認面
7	環	(13.1)	2.8		BDE	1	にぶい橙	10	SJ111 周辺確認面
8	環	(12.6)	3.9		ADE	2	橙	5	SJ111 周辺確認面
9	環		0.7		BDE	2	橙	破片	SJ111 周辺確認面 内面にヘラ記号「×」か?
10	甕	(22.0)	8.3		BDH	1	にぶい褐	15	SJ111 周辺確認面
11	環	(14.0)	2.8		DE	2	橙	5	SJ112 SK 1
12	環	(13.6)	3.2		DEH	1	にぶい褐	50	SJ112 カマド
13	環	(13.0)	3.7		ADE I	2	橙	10	SJ112 カマド
14	環	(13.8)	4.1		ADE	1	橙	10	SJ112 床下
15	環	(16.0)	3.0		BDE	1	橙	15	SJ112 床下
16	小型壺		2.3		ADEH	1	橙	70	SJ112 カマド

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
17	小型壺	(5.8)	4.4	(5.4)	DEH	1	橙	20	SJ112
18	壺	(20.8)	6.5		ADEG	1	橙	25	SJ112 Na13・14
19	坏	(12.0)	3.8		EG	1	にぶい褐	15	SJ113
20	坏	(12.4)	3.5		ADE	1	にぶい褐	25	SJ113 Na43
21	坏	(12.8)	3.7		DH	1	橙	25	SJ113
22	坏	(13.1)	3.5		DEH	1	明赤褐	45	SJ113 Na49
23	坏	(12.4)	3.7		DH	1	にぶい橙	50	SJ113
24	坏	(11.0)	3.5		DH	1	黒褐	25	SJ113 SK 1
25	坏	(13.0)	2.9		BDH	1	にぶい橙	30	SJ113
26	坏	(13.0)	2.9		DEG	1	にぶい黄橙	15	SJ113
27	坏	(13.0)	3.4		BDE	1	にぶい赤褐	15	SJ113
28	坏	13.2	3.3		AEH	1	明赤褐	70	SJ113 Na11
29	坏	(14.4)	2.9		BDH	1	褐灰	40	SJ113 Na63 SJ112
30	坏	13.6	3.2		DH	1	にぶい赤褐	60	SJ113 Na63
31	坏	(13.3)	3.0		DH	2	にぶい褐	40	SJ113 Na 6
32	坏	(13.8)	3.4		CDH	1	橙	25	SJ113 Na10
33	坏	(14.8)	3.6		EH	1	にぶい褐	25	SJ113 Na62
34	坏	(14.8)	3.3		DEG	1	にぶい褐	20	SJ113
35	坏	(17.6)	4.4		DEH	1	橙	50	SJ113 カマド周辺
36	坏	(16.8)	4.9		BDEH	1	明赤褐	30	SJ113 Na45 SJ112 SK 1
37	坏	(13.0)	2.1		AEG	1	明赤褐	10	SJ113 内面放射暗文
38	坏	(14.8)	2.4		EG	1	明赤褐	5	SJ113 内面放射暗文
39	坏				ABE	1	橙	破片	SJ113 内面放射暗文
40	小型壺	(9.0)	3.6		DEGH	1	にぶい黄橙	20	SJ113
41	壺	(24.0)	7.9		DEIJ	1	にぶい橙	30	SJ113 Na39・41 SJ114Na 4
42	甕	(19.8)	5.8		ADE	1	明赤褐	25	SJ113
43	甕		12.8	5.6	BDH	1	にぶい黄褐	80	SJ113 Na61 SJ112 甕に転用?
44	甕		1.9	(9.0)	DE	1	にぶい褐	5	SJ113
45	甕		2.5	(8.6)	BDEI	2	にぶい褐	30	SJ113 底部木葉痕
46	須恵瓶		4.4		E	1	灰	5	SJ113 群馬産か
47	須恵蓋	16.4	3.3		ADEH	2	灰黄	90	SJ113 No29 産地不明
48	須恵蓋	(20.0)	2.4		E	1	灰	20	SJ113・114 群馬産
49	須恵坏	(12.2)	2.6		E	1	黄灰	5	SJ113 産地不明
50	須恵坏	(13.2)	3.7	(8.4)	AEH	2	灰黄	20	SJ113 Na 8 群馬産
51	須恵坏	(12.5)	3.1	(8.4)	BE	1	黄灰	25	SJ113+SK45 秋田産
52	須恵坏	(14.0)	3.5	(8.4)	E	1	灰	20	SJ113 Na 5 群馬産
53	須恵甕	(29.2)	8.0		BEH	1	灰オリーブ	60	SJ113 Na12・59 群馬産

第114号住居跡 (第354図)

第114号住居跡は、D-18・19グリッドに位置する。第112・113・115・116号住居跡を切って構築されていた。

平面形は長方形で、東壁北端に半円形の張り出し施設を設けている。規模は長軸3.87m、短軸3.25m、深さ0.08mを測る。主軸方向はN-91°-Eを示す。

床面は概ね平坦で、堅く踏み固められていた。カマドは東壁の南に設置される。焼成部は壁を切って構築され底面はほぼ平坦である。焚口付近は強く被熱し

ていた。

ビットは5本検出された。Pit 1は南西コーナー部にあり、壁ラインよりも僅かに突出している。埋土からロクロ土師器高台椀(第355図4)が出土しており、住居に伴うカマド対向ビットと考えられる。深さ32cm。Pit 2はカマド脇の南東コーナー部に位置する。上面は貼床されており、少なくとも焼成段階には機能していなかったことがわかる。貼床下面は灰・焼土混じりの黒色土が詰まっていた。Pit 3は北壁際にあり、住居に伴う可能性は低い。Pit 5も同様である。Pit 4は

床下土壌または、掘り方の一部であろう。

カマド前面には床下土壌が2基検出された。いずれも上面に貼床されていた。

張り出し状施設は壁面から約40cmほど突出する。床面は同一レベルで続き、壁溝も半円形に巡っている。

出土遺物は土師器環・壺、ロクロ土師器高台碗・小皿、須恵器鉢、羽釜、甕がある(第355図1~9)。土師器環(1~3)、壺(6)、須恵器鉢(7)は混入である。4はロクロ土師器高台碗である。胎土は精良で、内面にミガキはない。5はロクロ土師器小皿。完形品でカマド焚口部付近から出土した。8は土師質の羽釜である。非ロクロ整形で、胴部はナデと雑なヘラケズリ整形。9は土師質の甕孔部。ロクロ整形である。カマド内から出土した。住居の時期は小皿から、10世紀後葉~11世紀初頭と推定される。

第115号住居跡(第354図)

第115号住居跡は、D・E-18・19グリッドに位置する。掘り方のみ残存しており、平面形態や規模は不明確である。第116号住居跡を切り、第114号住居跡に切られていた。第117号住居跡との関係は、不明確であるが、本住居跡の方が古いものと考えた。また、第8号掘立柱建物跡の北西隅柱が本住居跡内にあることが予想されたため、床面を除去して検出に努めたが検出できなかった。

平面形は掘り方ラインで決定した。縦長の長方形で、規模は長軸3.47m、短軸1.76m、深さ0.10mを測る。主軸方向はN-124°-Eを示す。

床面は削平され遺存しない。カマドは不明確ながら第117号住居跡北西部にある焼土を含む土壌を、本住居跡のカマドと考えた。おそらく掘り方のみ残存したもののと思われ、ロームブロックも多量に含まれていた。

ピットは3本検出されたが、遺構に伴うものではない。壁溝は南西壁に一部認められたが、不明確である。出土遺物は土師器環・甕・台付甕、須恵器環・高台碗がある(第355図10~17)。第355図10は土師器環。平底となろう。11は須恵器無台碗である。砂っぽい胎土で全体に器壁が厚い。底部は回転糸切りである。非末野

産。群馬産か。12・13は須恵器高台碗。13は厚くぼつたりした作りである。いずれも末野産。14・15は小形台付甕。16・17は「コ」の字状口縁甕で、頸部上端と下端に沈線を巡らせている。住居の時期は9世紀後半~末葉頃と考えられる。

第116号住居跡(第354図)

第116号住居跡は、D・E-18グリッドに位置する。掘り方向が辛うじて残存するのみで、形態・規模などの詳細は不明である。重複する第115号住居跡と同一住居の可能性も考えたが、方位が異なるために別住居とした。

平面形は方形と推定されるが、規模は不明である。

床面は削平されており、カマドは検出されなかった。ピットは7本検出されたが、住居に伴うものではない。

出土遺物はない。時期も不明とせざるを得ない。

第117号住居跡(第354図)

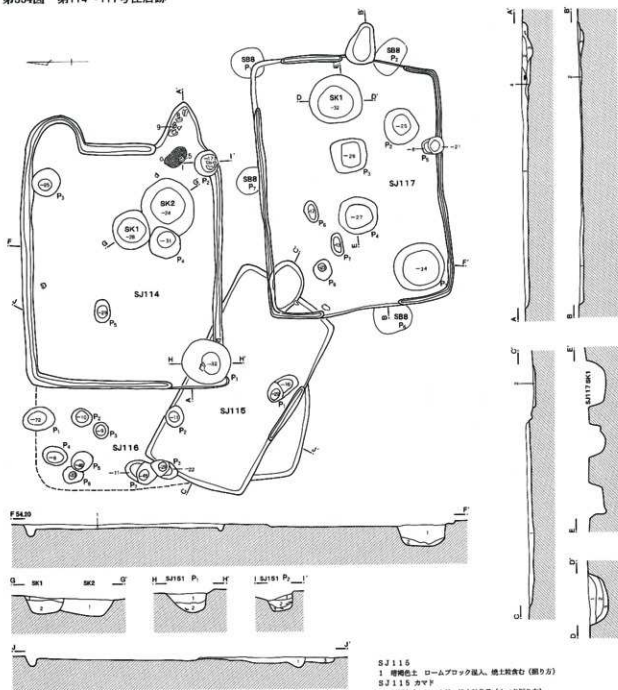
第117号住居跡は、E-18・19グリッドに位置する。第114号住居跡の南に隣接し、重複する第8号掘立柱建物跡を切っている。第115号住居跡との切り合いは不明確であるが、本住居跡の方が新しい可能性がある。平面形は長方形で、規模は長軸4.12m、短軸2.99m、深さ0.04mを測る。主軸方向はN-88°-Eを示す。

床面は平坦で全体に堅く踏み固められていた。カマドは東壁の南寄りに設置される。燃焼部は壁を切って掘り込まれていた。

ピットは8本検出された。Pit 1は南西コーナー部にあり、カマド対向ピットと同様なものか。住居に伴う。Pit 2~4は上面に貼床が乗っており、住居跡使用段階には機能していなかったものである。他のピットは中世の所産と思われる。土壌は1基、カマド前面から検出され、上面に貼床されており、床下土壌と考えられる。深さ32cm。

出土遺物は須恵器高台碗が1点検出されたのみである(第355図18)。18は須恵器高台碗。高台は低く、口縁部は外反する。焼きは甘く、軟質須恵器である。末野産。住居の時期は不明確であるが、高台碗が伴うとすれば、9世紀末葉~10世紀初頭頃となろう。

第354図 第114～117号住居跡



SJ114

1 暗褐色土 ローム殻・焼土殻少量

SJ114 カマド

2 黄褐色土 ローム殻・ロームブロック主体、焼土殻多量

3 暗褐色土 ローム殻・焼土殻多量

4 黒色土 ローム殻・焼土殻少量 (SK側)

SJ114 SK1

1 黄褐色土 ローム殻・ロームブロックによる斜り床面、黄褐色土少量

2 黄褐色土 ローム殻・ロームブロック多量、赤色殻・炭化物残骸

SJ114 SK2

1 黄褐色土 ローム殻・ロームブロック・赤色殻多量

SJ114 ビット1

1 黄褐色土 ローム殻・焼土殻・白色殻少量

2 黄褐色土 ローム殻 焼土殻機軸。1層に比べてやや厚い

SJ114 ビット2

1 黄褐色土 ローム殻・ロームブロック玉珠 (斜り床面) 黄褐色土少量

2 黒褐色土 ローム殻・焼土殻少量、灰多量

3 黄褐色土 黄褐色土少量

SJ115

1 暗褐色土 ロームブロック散入、焼土殻含む (掘り方)

SJ115 カマド

2 黒褐色土 ローム殻・焼土殻多量 (カマド掘り方)

SJ115 6

3 褐色土 ロームブロック・ローム殻混入、焼土殻少量 (SJ115掘り方)

SJ117

1 暗褐色土 ローム殻・ロームブロック少量

SJ117 カマド

2 暗褐色土 ローム殻・焼土殻・炭化物殻少量

3 暗褐色土 ローム殻・ロームブロック少量 (掘り方)

SJ117 SK1

1 黄褐色土 ローム殻・ロームブロック少量

2 褐色土 ローム殻・ロームブロック多量

3 黒色土 ローム殻少量

SJ117 ビット1

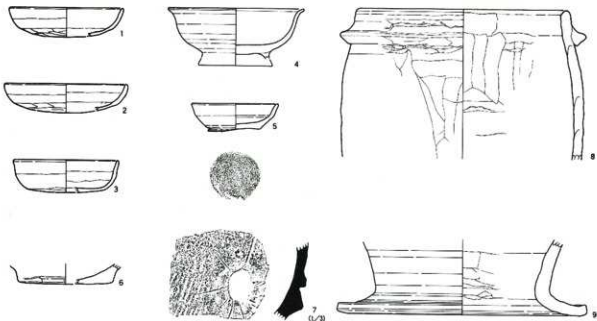
1 暗褐色土 ローム小ブロックを中割

2 暗褐色土 ローム主体、黒色土ブロック状に混入

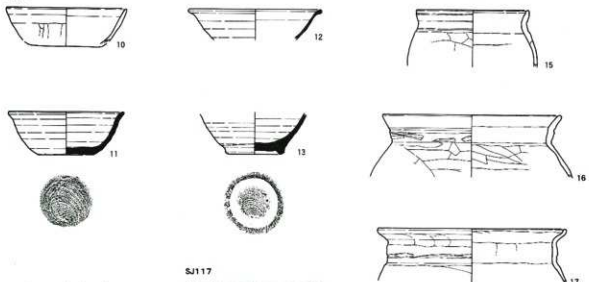
0 2m

第355図 第114・115・117号住居跡出土遺物

SJ114



SJ115



SJ117



第118号住居跡 (第356図)

第118号住居跡は、E-18グリッドに位置する。重複する第119号住居跡・第8号掘立柱建物跡を切って構築されていた。

また、床面精査段階で、住居中央部から、長方形

に床面が切れる部分を確認された。掘り進めたところ、ほぼ完形のロク土師器高台碗が出土した。形態、埋土の状態、出土遺物から土壌墓の可能性が高いと考えた(第1号土壌墓)。ロク土師器高台碗は副葬品と思われる。